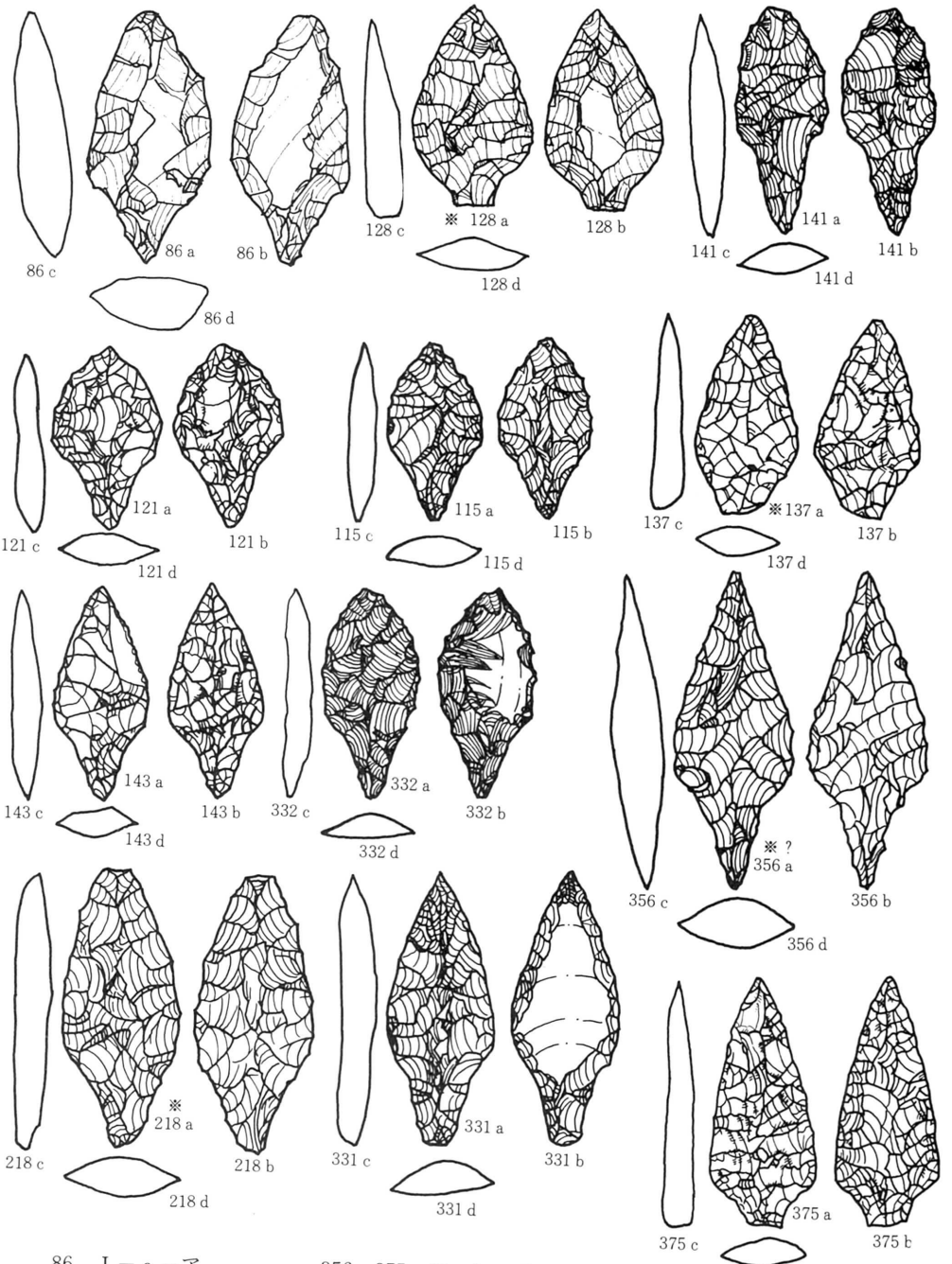
40.4%、(c)・(d)の側縁の一部12.2%、(g)・(h)の体側縁0.8%、(i)～(k)の側縁ノッチ風4.6%、(e)・(f)の基部42%となる。これは観察しえた破損現象の延べ数を基準にして算出した。実際的には複数の破損個所を有するものも存在する。先端部と茎部がほぼ同率で破損しているが、これは〝茎を有する（着柄された）刺突具〟としての機能想定を確実に裏づけるものであろう。ノッチ風の破損は材質と、そこに加えられた物理的な力との関係を考慮すべきであろう。

アスファルト類の付着は、(あ)・(お)のみであり、当然ながら従来の着柄想定が裏づけられたこととなる。

大きさを見ると、大：中：小＝14.0：53.3：32.7(%)になり、中・小を主とし大が従をなす。ただタイプⅠに大が若干多いとも見える。またⅢは小のみである。それ以外には形態と大きさの間に特別な傾向・相関関係は看取出来ない。したがって各タイプ毎に大中小の三者が併存していることとなる。このことは、使用対象の異同は、形態にではなく大きさにより直接的に現われるとする想定を満足させる結果とも思われる。ただし既に述べたとおりⅣは他に比し若干部厚で調整も粗である。これのみは使用対　乃至着柄が他とは異なるものであったと見なされるべきものであろう。使用素材とサブタイプとの関係は次のとおりである。

第19表　石鏃A類材質

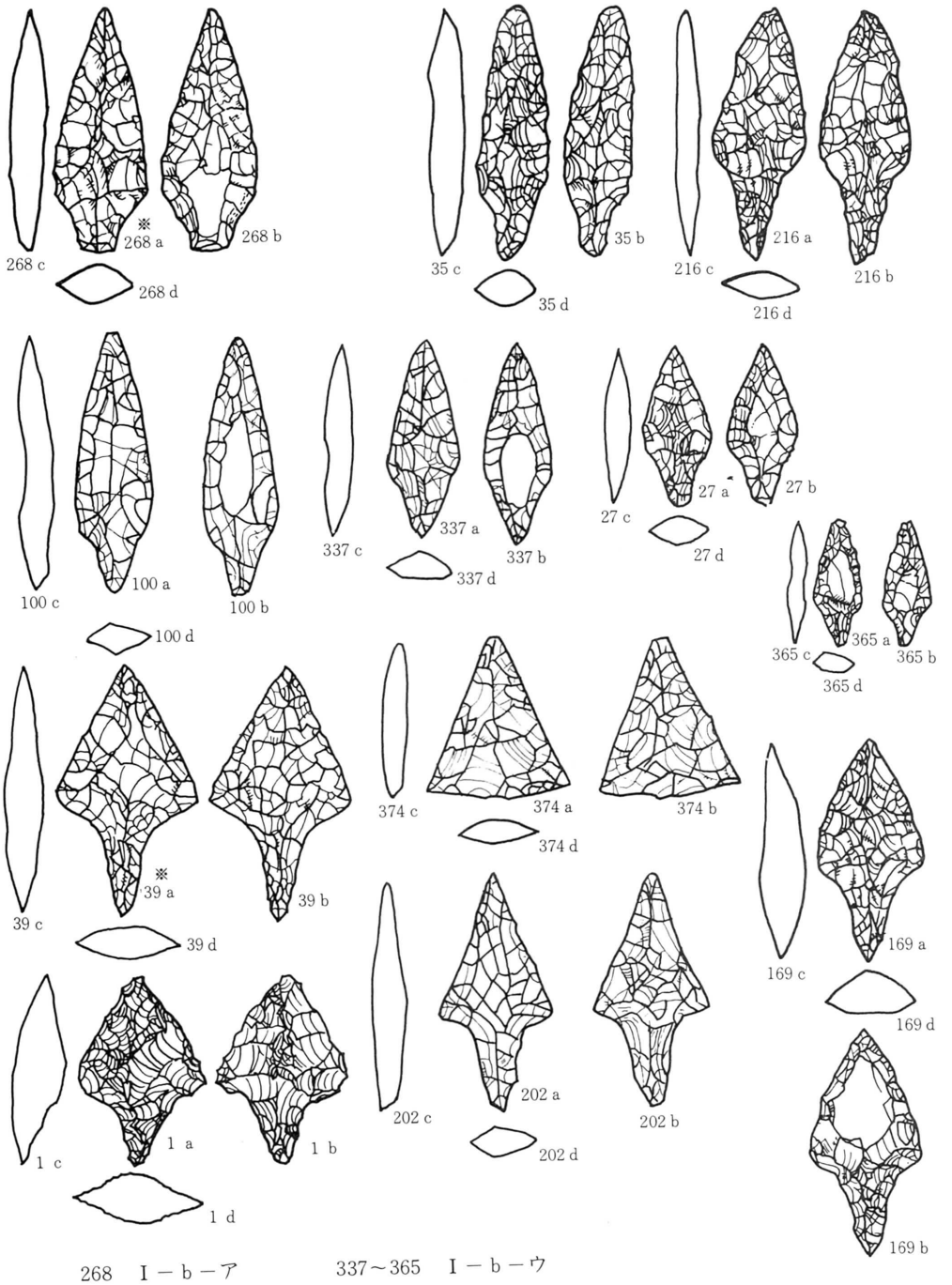
	Ⅰ	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅲ	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	計　比率
珪質泥岩	63.6 7 13.7	36.4 4 8.5							11 2.9
凝灰質硬質泥岩	81.3 13 25.5	18.7 3 6.4							16 4.3
硬質泥岩			14.1 11 32.4	33.3 26 26.5	3.8 3 37.5	11.5 9 33.3	15.4 12 22.6	21.8 17 30.9	78 20.3
フリント質凝灰岩	16.2 6 11.8	16.2 6 12.8	2.7 1 2.9	8.1 3 3.1		10.8 4 14.8	32.4 12 22.6	13.5 5 9.1	37 9.9
珪質凝灰岩	71.4 5 9.8	28.6 2 4.3							7 1.9
硬質泥岩質凝灰岩			47.6 10 29.4	52.4 11 11.2					21 5.6
珪質白色細粒凝灰岩			15.8 3 8.8	47.4 9 9.2				36.8 7 12.7	19 5.1
フリント質珪質凝灰岩			5.3 1 2.9	52.6 10 10.2				42.1 8 14.5	19 5.1
輝緑凝灰岩	11.1 1 2.0	66.7 6 12.8		22.2 2 2.0					9 2.4
鉄石英		100 3 6.4							3 0.8
チャート質粘板岩	75.0 3 5.9		25.0 1 2.9						4 1.1
粘板岩質チャート						30.0 3 11.1	50.0 5 9.4	20.0 2 3.6	10 2.7
チャート	12.0 3 5.9	36.3 9 19.1	8.0 2 5.9	40.0 10 10.2	4.0 1 12.5				25 6.7
玉髄	13.3 6 11.8	15.5 7 14.9	2.2 1 2.9	28.9 13 13.3	2.2 1 12.5	6.7 3 11.1	22.2 10 18.9	8.9 4 7.3	45 12.1
石英	60.0 3 5.9	40.0 2 4.3							5 1.3
めのう		5.5 3 6.4	7.2 4 11.8	23.6 13 13.3	5.5 3 37.5	14.5 8 29.6	23.6 13 24.5	20.0 11 20.0	55 14.7
流紋岩	100 3 5.9								3 0.8
黒曜岩	16.7 1 2.0	33.3 2 4.3		16.7 1 1.0			16.7 1 1.9	16.7 1 1.8	6 1.6
計	51	47	34	98	8	27	53	55	(373)



86　Ⅰ－a－ア　　356～375　Ⅱ－b－ア

128～332　Ⅰ－a－イ

0　5 cm　第80図　石鏃実測図(1)　A類

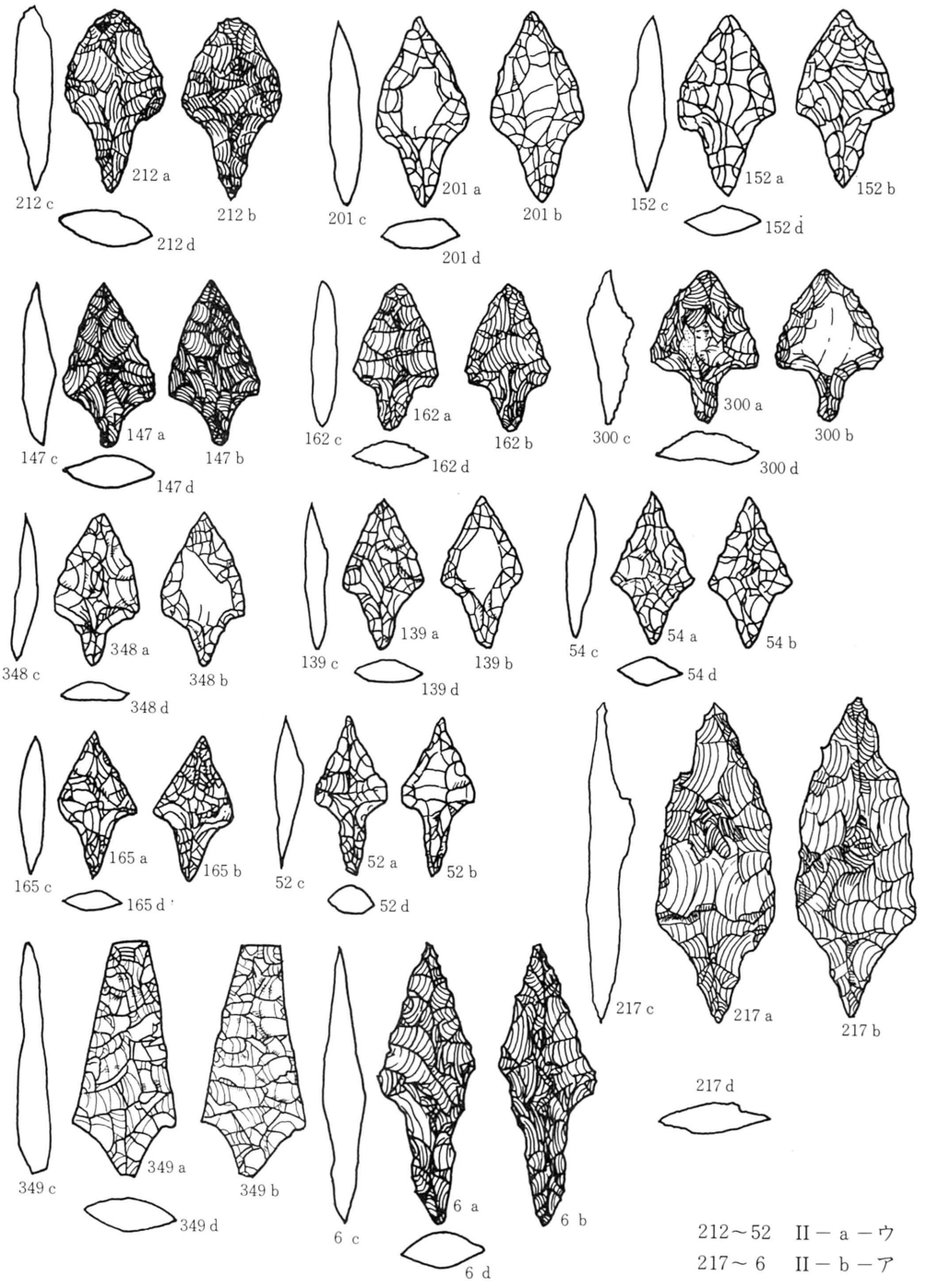


268　Ⅰ－ｂ－ア　　337～365　Ⅰ－ｂ－ウ

35～100　Ⅰ－ｂ－イ　　39～169　Ⅱ－ａ－イ

0　5 cm

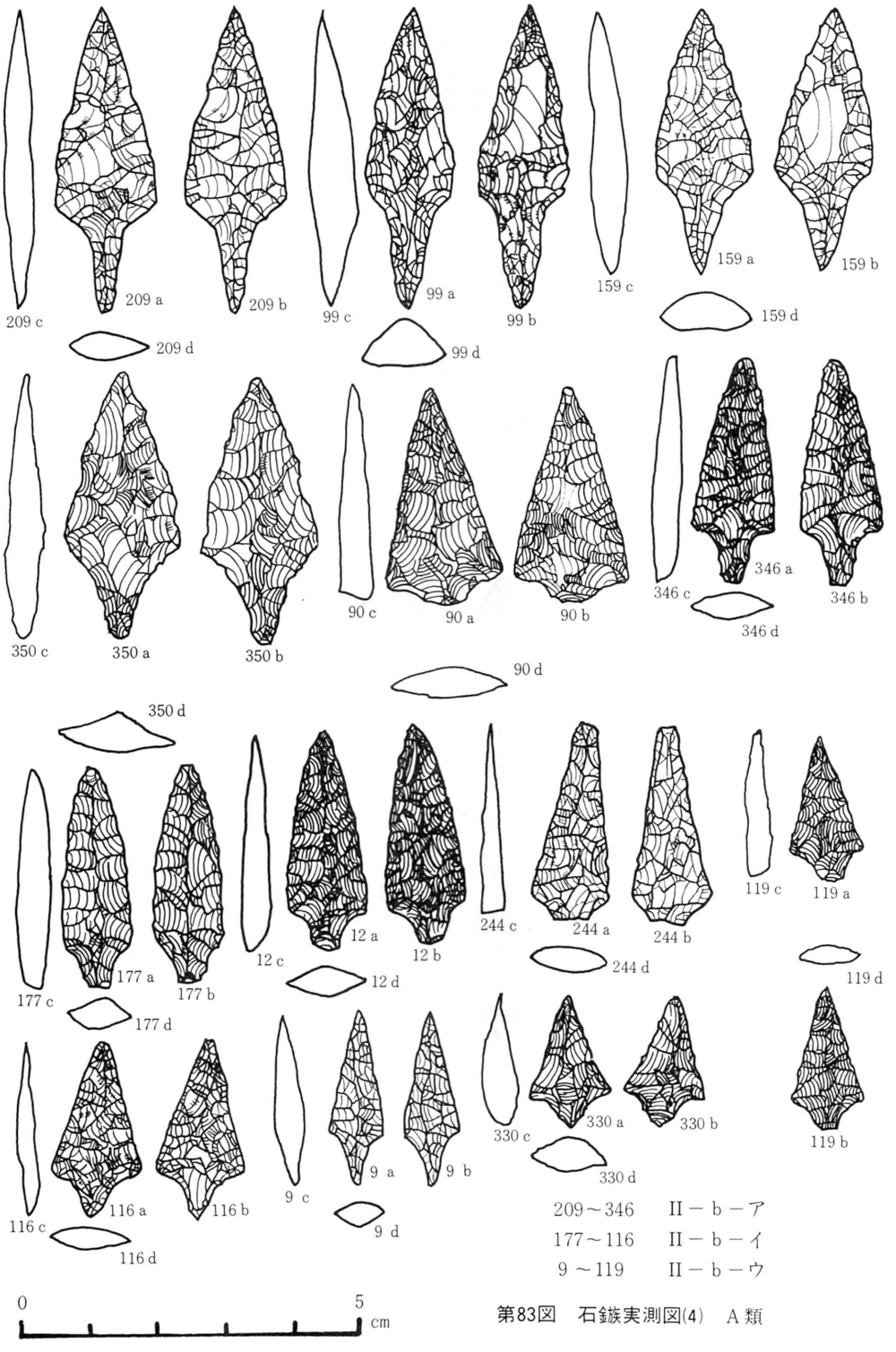
第81図　石鏃実測図(2)　Ａ類



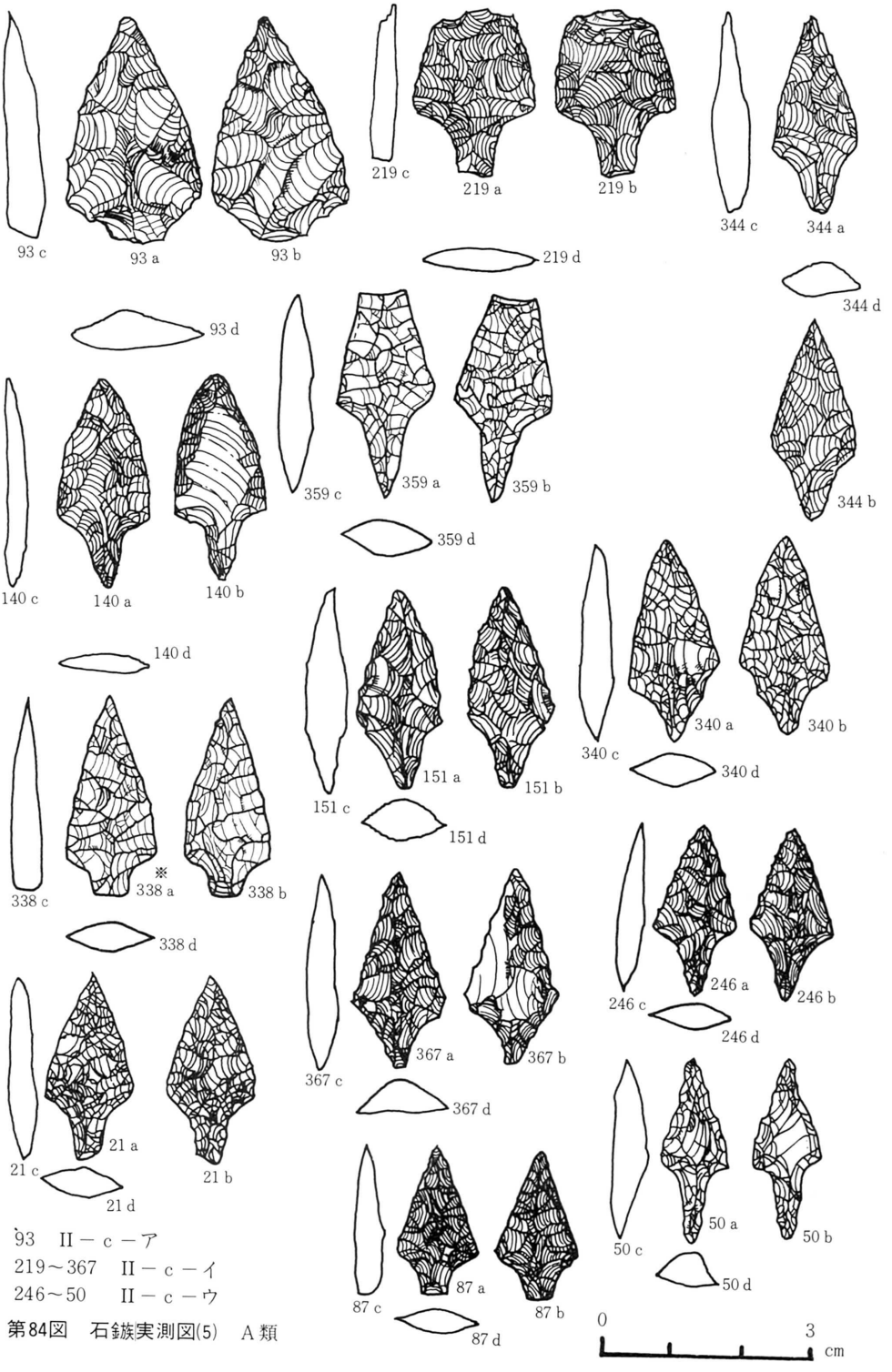
212～52　II－a－ウ
217～6　II－b－ア

0　5 cm

第82図　石鏃実測図(3)　A類

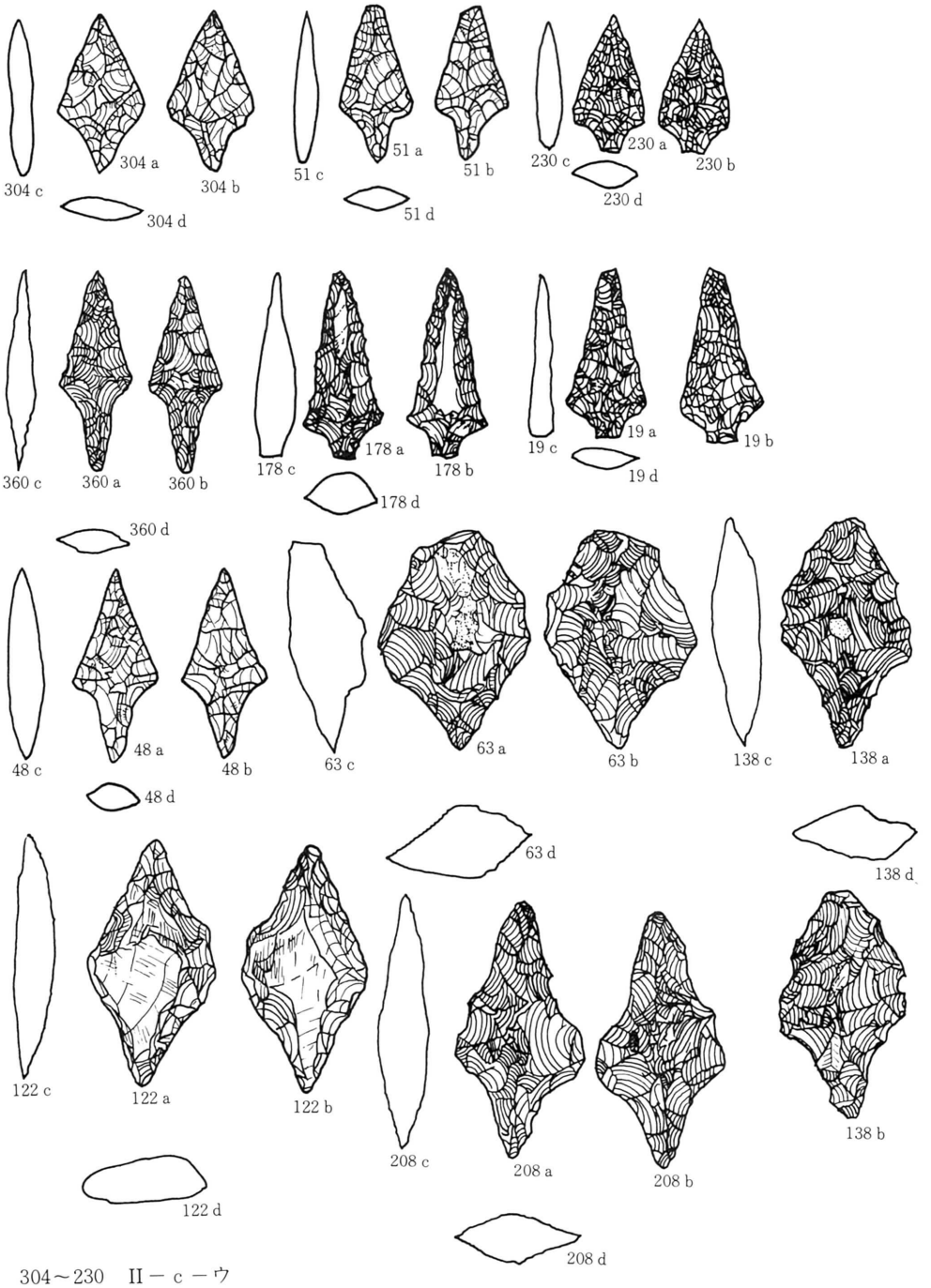


第83図　石鏃実測図(4)　A類



93　II－c－ア
219～367　II－c－イ
246～50　II－c－ウ

第84図　石鏃実測図(5)　A類

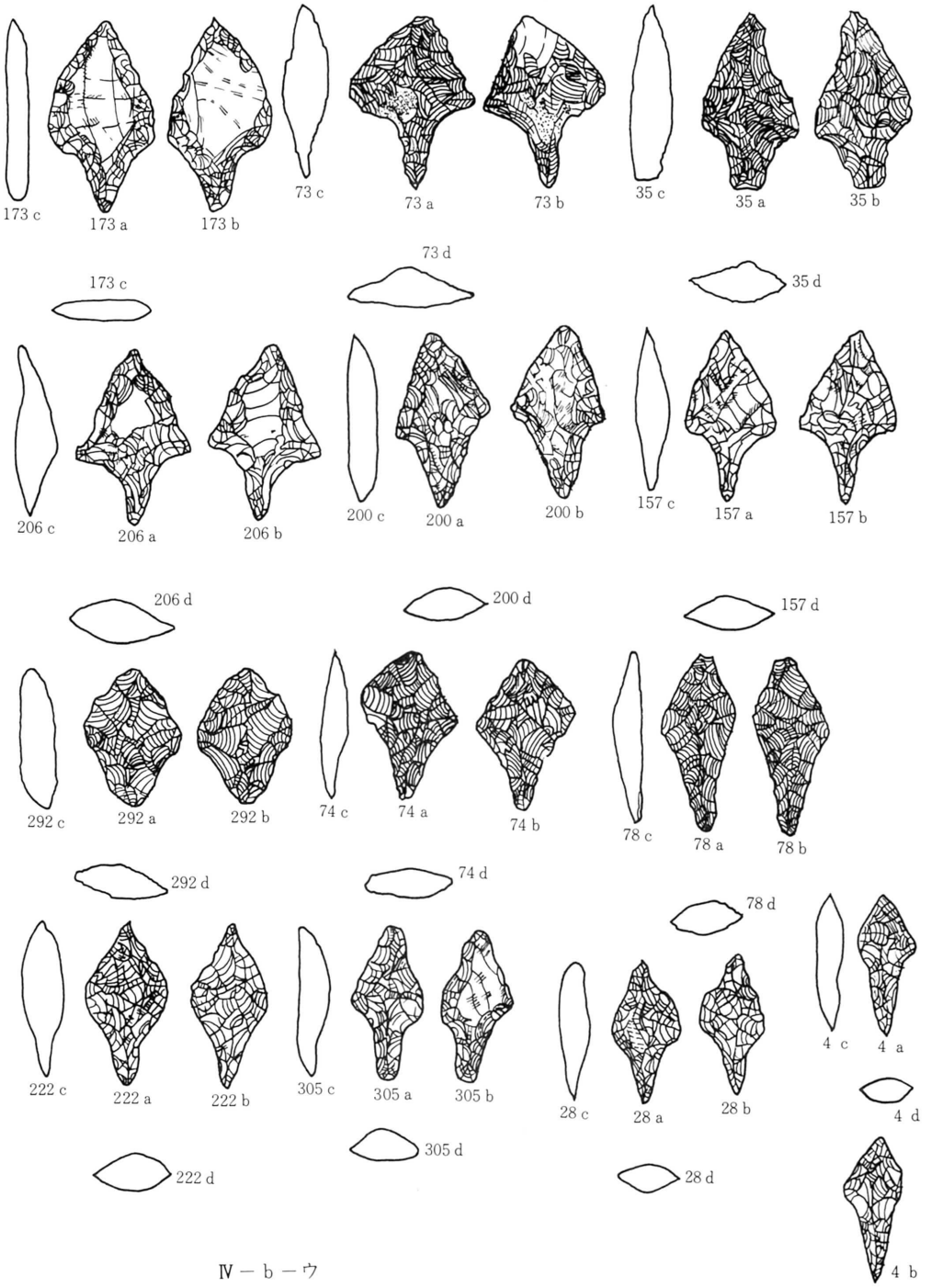


304～230　II－c－ウ

360～48　III－ウ　　63～208　IV－a－ア

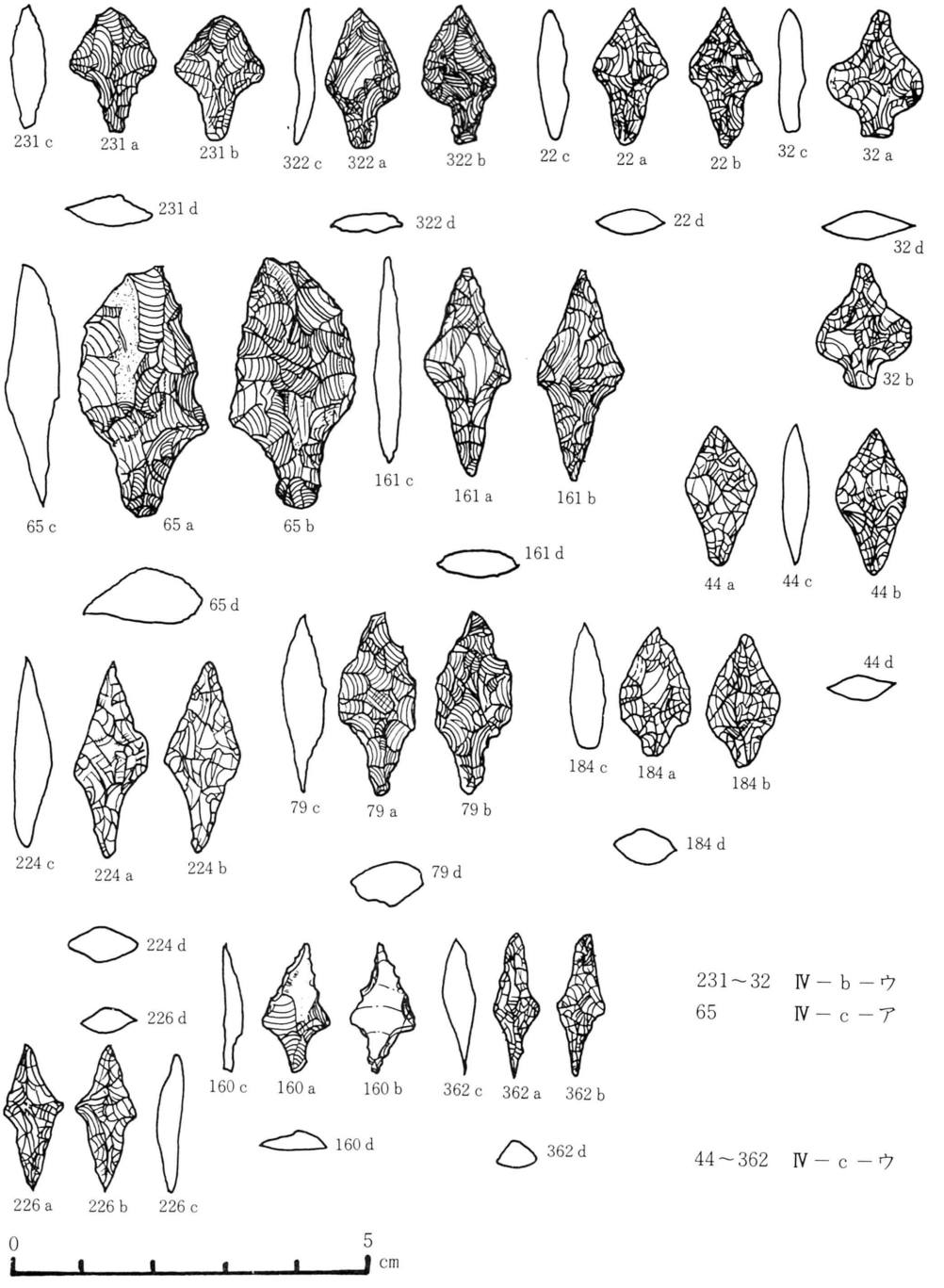
0　5 cm

第85図　石鏃実測図(6)　A類



0 5 cm

第86図　石鏃実測図(7)　A類



第87図　石鏃実測図(8)　A類

石鏃　B類　（第88図、図版40）　両端が尖るもののうち、平面形が狭長な菱形をなすものである。全体的に細身の印象が強い。最大径の部位によって二種に細分出来る。即ちⅠ、体部のほぼ中央に来るもの、Ⅱ、いずれかに若干寄るものである。大きさは大・中・小の三種がある。計測値他は第75表以下に示した。

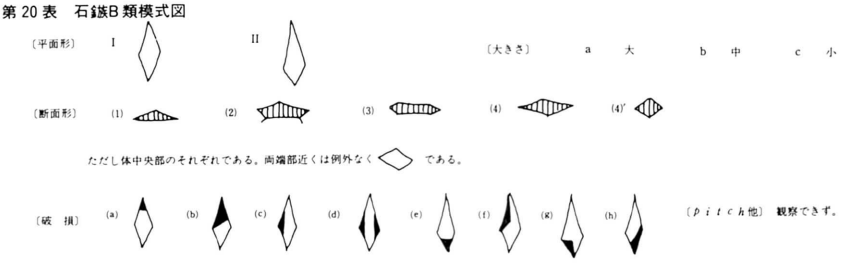
これらについて、第20表に掲げた観点での観察を試み、その結果を示した。以下それにしたがって説明を行なう。なお体部横断面形態は、体部中央のそれである。両端部近くは例外なく菱形である。また破損状況は、体部上下端部関連（a・b・e・h）と、側縁関連の（c・d・f・g）にまとめられよう。アスファルト類の付着は観察出来なかった。

平面形態はⅠ：Ⅱ＝65.4：34.6(%)でⅠが主体的に存在するが、二種の併存を常態と考える。横断面形態は、当然(1)は存在しない。(2)・(3)：(4)・(4)′＝69.2：30.8(%)で前者が主をなす。(4)・(4)′はⅡには少ない。これが本質的な対応関係か否かは今後検討したい。

大きさは、Ⅰは中・小型中心、Ⅱは大・中型中心となるが、これもさらに検討を要しよう。

破損部位はⒶ・ⓔの二種に限定される。これも他と同様、着柄されての刺突具なる想定機能に矛盾しない現象であろう。なお細破砕痕は両側縁にあるものが一般的である。

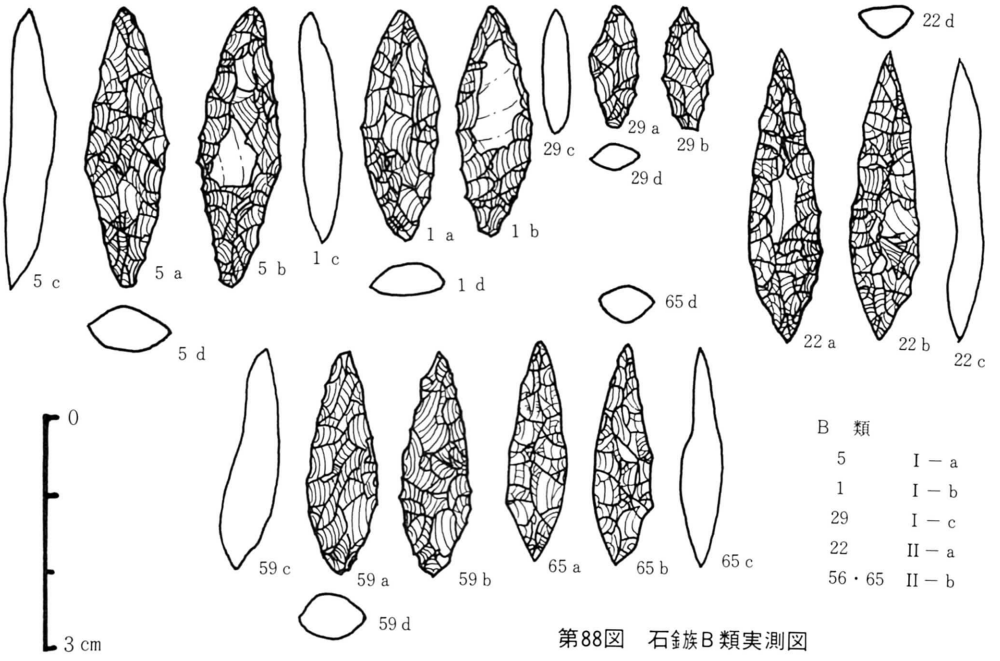
第20表　石鏃B類模式図



タイプ	断面					破損									その他
						完全	a	b	c	d	e	f	g	h	
Ⅰ-a		2					2				2				2
b		1	2		1	1	2				2				4
c		6		4	1		5				7				11
計		9	2	4	2	1	9				11				17 (65.4%)
Ⅱ-a		1	1			1	1								2
b		3	2	2		1	4				4				7
c															
計		4	3	2		2	5				4				9 (34.6%)
総計		13 (50%)	5 (19.2)	6 (23.0)	2 (7.7)	3 (11.5)	14				15				26
		69.2		30.8			(48.2)				(51.7)				

石　材	個数	比率
フリント質凝灰岩	1	4・0%
珪質白色細粒　〃	3	12.0%
硬質泥岩質　〃	2	8.0%
硬質泥岩	8	32.0%
チャート質粘板岩	4	16.0%
玉ずい	5	20.0%
めのう	2	8.0%
合　計	25	100%

第21表
石鏃B類
材質一覧



第88図　石鏃B類実測図

石鏃　C類　（第89図、図版41）　両端が尖るもののうち、その最大径部位がいずれかに（この場合は基部に近く）偏するものである。体部がやや幅広の印象を与えるものである。これらについて第22表の如き諸点にわたる観察を施こし、その結果を示した。それを見ると、まず平面形はI：II：III：IV（ただし不明である故に意味はないが）＝19.2：19.2：55.8：5.8(%)となり、IIIが主体をなすことが明らかである。しかし、I・IIも組成の構成要素ではあろう。大きさは、a：b：c＝7.7：41.3：51.0(%)でaが特徴的に少数であり、中・小型が基本型の如くである。とりわけIIIにcがもっとも多く対応することが顕著な事実である。したがってIIIのcをこの類の理念型と考えてよいであろう。

横断面形態は、もっとも基本的なものは(2)・(4)で、(3)がそれに次ごう。これは調整技法とも当然関係があると思われ、bi-facialは(4)となり、片面trimmingが(2)に、両面trimmingが(3)に対応しよう。(7)は例外的な一例であったが一応独立させた。(2)が多い点は晩期の鏃の一特徴を

第 22 表　石鏃C類模式図・集計表

〔平面形〕　I（細身）　II（ノーマル）　III（有舌尖頭器風）　IV　不明（破片）

〔大きさ〕　a　大　b　中　c　小

〔断面形〕　(1)　(2)　(3)　(4)　(6)　(7)

〔調　整〕　(1) uni-facial　(2) bi-facial　(3)′ 片面全面加工・片面 trimming 的　(4)′ 両面 trimming 的

〔破　損〕　完全　(a)　(b)　(c)　(d)　(e)　(f)　(g)　(h)　〔pitch 他〕　(あ)　(い)　(う)　(え)

	a		b		c		計	
I	②	1.9	⑫	11.5	⑥	5.8	⑳	19.2
II	③	2.9	⑦	6.7	⑩	9.6	⑳	19.2
III	③	2.9	⑳	19.2	㉟	33.7	㊽	55.8
IV			④	3.8	②	1.9	⑥	5.8
計	⑧	7.7	㊸	41.3	㊸	51.0	104	

タイプ	断面形								調整				破損									pitch			その他
									uni	bi	(3)′	(4)′	完	a	b	c	d	e	f	g	h	あ	い	う	
10.0 ② I－a			2 10.0							2				2											
60.0 ㉒ b	2 10.0		7 35.0	1 5.0	1 5.0			1 5.0		3	5	4	3	5		1		5		1					
30.0 ⑥ c			2 10.0	3 15.0	1 5.0					2		3		3	1			2							
⑳ 小計	② 10.0		⑪ 55.0	④ 20.0	② 10.0			① 5.0		⑦	⑤	⑦	③ 15.0	⑨	①	①		⑦ 35.0		①					⑳
														⑪ 55.0		① 5.0			① 5.0						
15.0 ③ II－a			2 10.0		1 5.0						2	1		3				2							未1
35.0 ⑦ b			4 20.0	1 5.0	2 10.0					7	1	5	1	2		3		2							未2
50.0 ⑩ c	1 5.0		4 20.0	2 10.0	3 15.0					5	2	3	2	8				5							未1
⑳ 小計	① 5.0		⑩ 50.0	③ 15.0	⑥ 30.0					⑫	⑤	⑨	③	⑬		③		⑨		①					⑳
													15.0	13	50.0		3 11.5	34.6		1 3.8					
5.1 ③ III－a			2 3.4	1 1.7							2	1		1				1							
34.5 ⑳ b			12 20.7	2 3.4	6 10.3					12	5	3	4	6	1	2		9	1	1	1				未1
60.3 ㉙ c			19 32.8	5 8.6	11 19.0					14	12	9	10	11		3		17			1				未3
㊾ 小計			㉝ 56.9	⑧ 13.8	⑰ 29.3					㉖	⑲	⑫	⑰	⑱	①	⑤		27	①	①	②				㊾
													25.9		⑲ 34.5		⑤ 9.1	49.1		② 3.6	3.6				
																		$e+h=52.7$							
0 IV－a																									
66.7 ④ b	2		1 16.7	1 16.7										1				1	2		1				
33.3 ② c	33.3		1 16.7		1 16.7										1			1							
⑥ 小計	②		② 33.3	① 16.7	① 16.7									①	①			②	②		①				⑦
	33.3														② 28.6			28.6		② 28.6	14.3				
																		$e+h=42.9$							
総計	② 1.9	③ 2.9	㊾ 53.8	㊾ 15.4	㊾ 25.0			① 1.0		㊸ 43.3	㉙ 27.9	㉙ 27.9	㉑ 20.2	㊸	③ ㊸ 41.7	⑨	⑨ 8.3	㊸ 41.7	④	② ⑥ 5.6	③ 2.8				108	未⑧ 7.7%

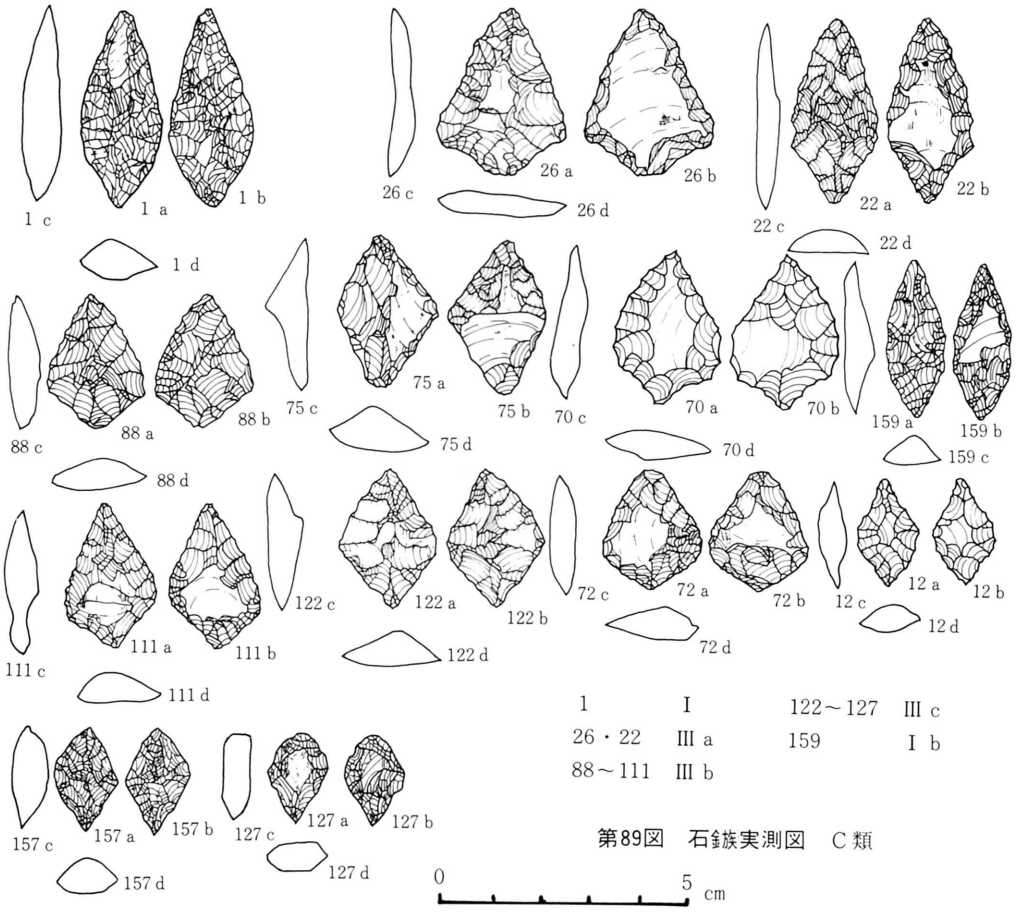
なす可能性がある。

調整技法を見ると、まず uni-facial は存在しない。bi-facial が 43.3%、trimming の目立つものが 55.8%となり、後者の多い点が特徴的である。これは上述の横断面形態(2)と表裏の関係をなすものであろう。

破損状況は、完全品が 20.2%、(a)+(b)=41.7%、(c)+(d)=8.3%、(e)+(h)=44.5%、(f)+(g)=5.6%となる。先端部乃至体部上半、下端部乃至基部の破損がそれぞれ同程度で存在する点は、既に述べてきたようなこの種石器の機能の反映とみなされるべきものであろう。

この種にはアスファルトの付着例は観察出来なかった。

石材とサブタイプの関係は次のとおりである。



第89図　石鏃実測図　C 類

第23表　石鏃C類材質一覧

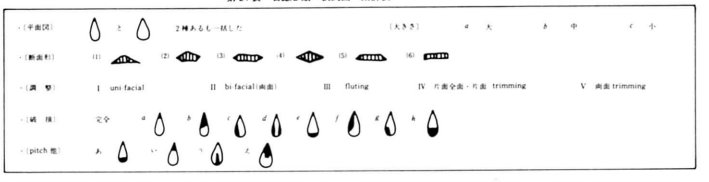
素　材　名	数	比率	I	II	III
フリント質珪質凝灰岩	26	25.0%	3	5	16
珪質白色細粒　〃	10	9.6	1		5
硬質泥岩質　〃	7	6.7	1	1	7
硬質泥岩	27	26.0	7	9	7
チャート質粘板岩	4	3.8			3
チャート	13	12.5	1	2	9
紫水晶及び玉ずい	3	2.9			2
赤色めのう	14	13.5	5	1	6
合　　計	104	100.0			

石鏃　D類　（第90図、図版41）　いわゆる無茎と有茎の中間的形態を示す偏桃形のものである。基底辺の外湾部を着柄の便を図るためのものと見なせば、茎的なものに近くなるからである。平面形態は太目・細目の二種があるが一括した。

これらを模式図の如き観点から観察し、その結果を第24表にまとめた。即ち大きさはa：b：c＝13.5：36.9：49.5(%)となり中・小型品が大部分を占める。しかし、(a)も組成を構成するものと考えておく。

横断面形態は他種に比し若干変種が多い。6類型をまとめると、まず(5)・(6)は同類と見なしうる。また、trimming的な技法の反映と思われる(3)も、(5)・(6)に近いといえよう。(1)は未製品的な性格のものと解釈すべきであろうか。(2)・(4)が基本形であろう。(2)＋(4)：(3)＋(5)＋(6)＝66.1：21.3(%)となる。

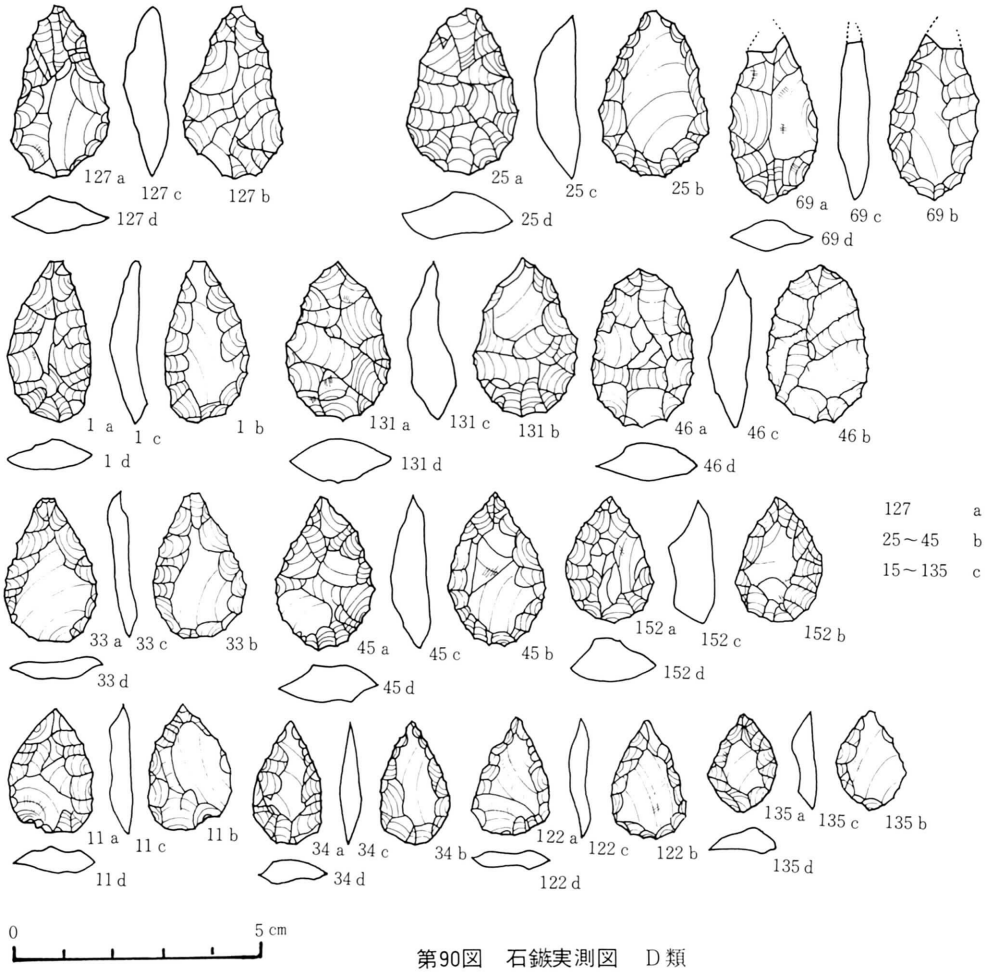
第24表　石鏃D類・模式図・集計表



タイプ		断面						調整					破損									pitch痕				その他
								uni	bi	fluting	片 trimming	両 trimming	完全	a	b	c	d	e	f	g	h	あ	い	う	え	
14 13.5	a	4 28.6	6 42.9	3 21.4	1 7.1				3		7	6	8	2	2			1		1	1					h.3
38 36.9	b	4 10.5	14 36.8	5 13.2	14 36.8		1 2.6		19	12	11	9	16	11	5	1	1	1	2	1	3					h.5
51 49.5	c	5 9.8	14 27.5	8 15.7	19 37.3	3 5.9	2 3.9	2	25	7	10	15	12	20	5	3	3	3	3	2	4					h.1 obsidian 1
計		13 12.6	34 33.0	16 15.5	34 33.0	3 2.9	3 2.9	2 1.9	41.8	19	28 27.2	30 49.1	36 40	33 44.0	12 16.0	4 5.3	4 5.3	5 6.6	5 6.6	4 5.3	8 10.7					
												54.3														
														a＋b＝60.0 c＋d＝10.6 e＋h＝17.3 f＋g＝11.9												

調整技法については、uni-facialは1.9%であり稀な存在である。trimming的なものを含めてのbi-facialが基本技法であろう。ただし、trimming的なものが多い点（両者で56.3%）は留意されるべきであろう。片面のみのものと両面のものは、横断面形態が異なり、前者は(2)、後者は(3)・(5)・(6)である。前者の片面は、全面加工済である。基底辺方向からするfluting的剥離技法もきちんと存在するが、他例ほど顕著ではない。このようにtrimming的なものが多いということは、この種石器に未製品的なものが多く含まれている可能性を示すものかもしれない。

破損状況をみると、完全品は40%となり、若干多い印象を与える。破損現象75のうち(a)+(b)：(c)+(d)：(e)+(h)：(f)+(g)＝60.0：10.0：17.3：11.9(%)となり、他と同様に先端部乃至体上半部欠失品が多い。(f)・(g)などのnotch風破損の原因は、材質を含めての今後の検討課題である。側縁部関連の破損は予想したほど多くは無かった。石材は第25表にまとめた。



第90図　石鏃実測図　D類

石鏃　E類　（第91・92図、図版41）　いわゆる無茎のもののうち、基底辺が直線的になり、平面形が三角形を呈すものである。縦長二等辺三角形的なものと正三角形のものに二大別出来る。

大きさは大・中・小の三種がある。これにも他と同様の観察を行ない、その結果を第26表に示した。それによると、大略次の傾向を指摘出来る。

平面形態はⅠ：Ⅱ＝7.5：92.5(%)となり後者が圧倒的に多く、主体をなすことは明らかである。大きさをみると、Ⅰにaを欠くのが目立つ。Ⅱは、a・b・cの併存と考えてよいと思われるが、やはりbが主体をなすとすべきであろう。

横断面形態は、まずⅠには(1)・(5)を欠き、(2)～(4)からなる。Ⅱにおいては、(2)＋(3)で72%を占める。したがってⅠ・Ⅱともに菱形の変種たる横断面形をもつのが一般的ということになる。ただし(2)・(3)・(5)などのようなその一部に平担面をもつものが多い点は注意されるべきであろう。

調整技法はuni-facialは未製品的なものに多く、断面形(1)・(5)などが対応する。本来的にはこの石器はbi-facial的なものであったろう。またfluting的処理はbi-facialの45.6%を占め、この技法がこの種鏃に特徴的に伴なう技法たる可能性を示している。また断面形(2)・(3)・(5)の存在もこの処理と無関係ではない（その結果）ことは明らかである。

破損状況をみると、完全品は12.9%と他例より若干少ないと思われる。106の破損現象を観察したが、a：b：c：d　：g：h：i ＝ 44.3：21.7：21.7：5.7：2.8：1.9（%）とな

第26表　石鏃E類模式図・集計表

〔平面形〕 Ⅰ　Ⅱ　〔大きさ〕 a 大　b 中　c 小

〔断面形〕 (1)　(2)　(3)　(4)　(5)

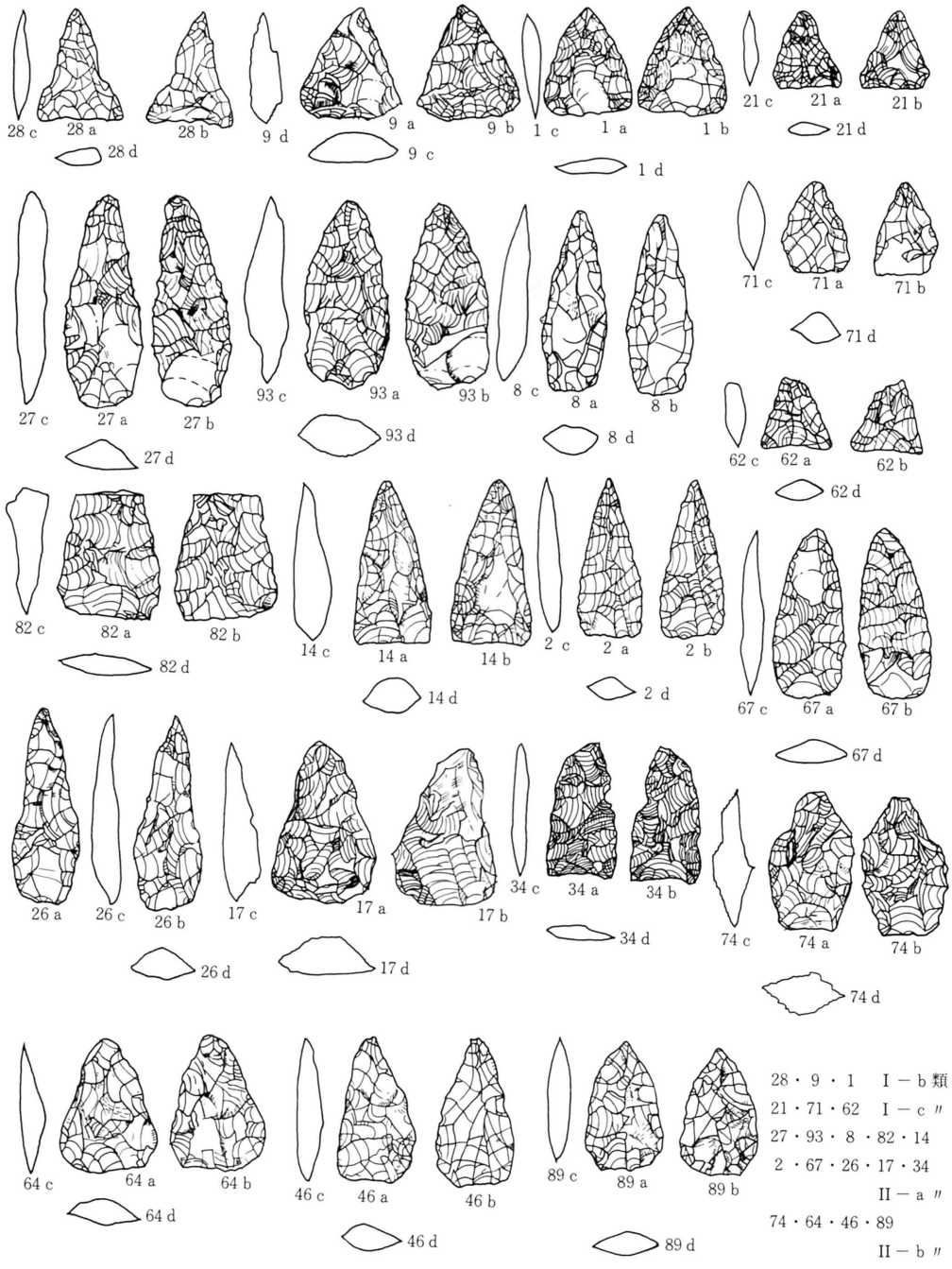
〔調　整〕 (a) uni-facial　(b) bi-facial　(c) fluting風

〔破　損〕 完全品　a　b　c　d　e　f　g　h　i　〔pitch 他〕 (あ)　(い)　(う)

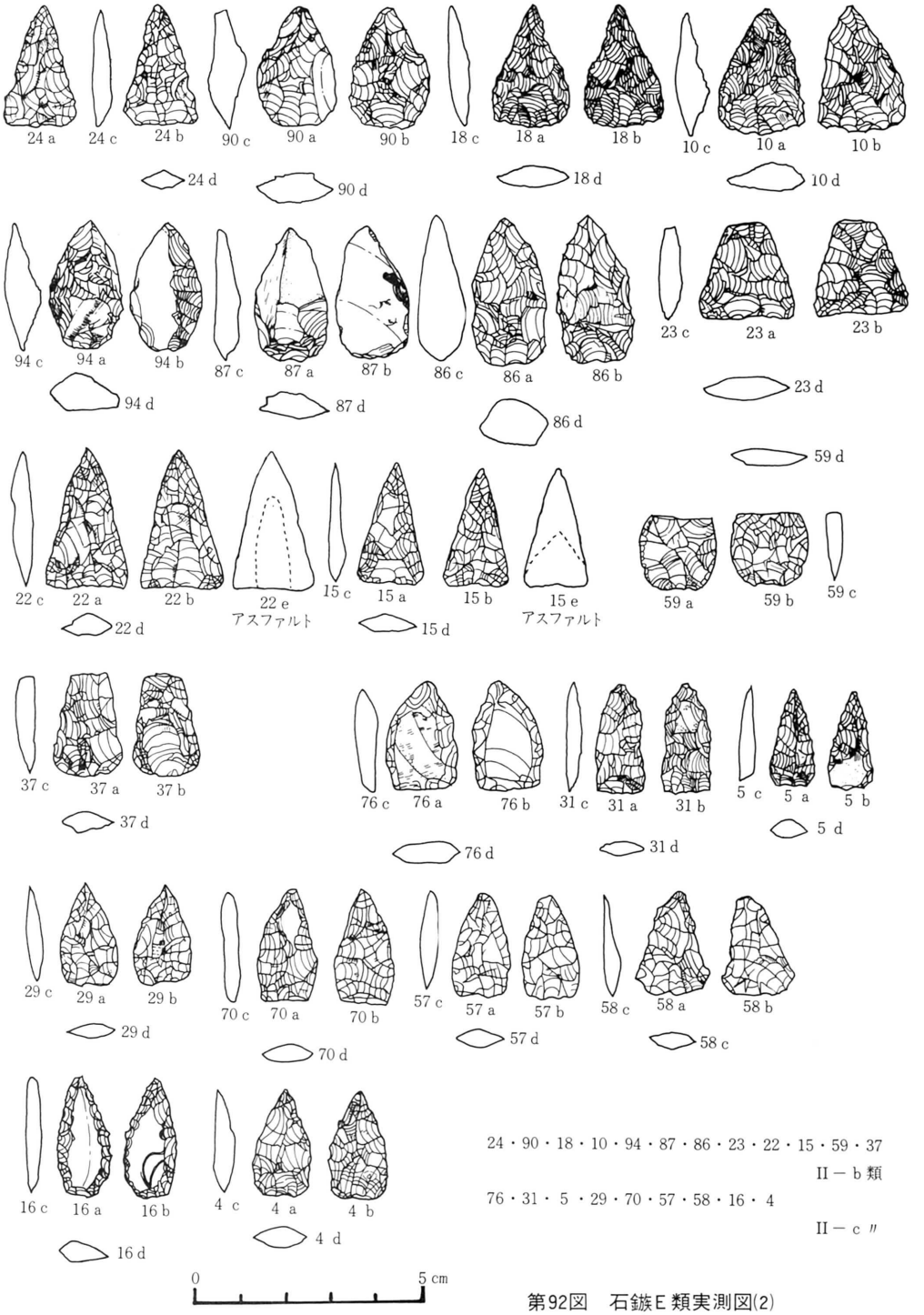
タイプ	断面形					調整			破損									pitch 他			その他
						uni	bi	fluting	完	a	b	c	d	e	f	g	h	あ	い	う	
1－b		1	1	1			3	1	2			1									3
c		1		3			4			4		2	1								㊥1 4
小計		2	1	4			7	1	2	4		3	1								7
11－a	5	11	6	3	2	3	24	9	1	17	7	7				2	2	1			㊥5 uni 27 obsidian 1
b	7	22	8	2	2	4	32	18	6	13	14	9	1			4		1	2		㊥6 uni 41
c		7	10	1			18	8	3	13	2	4					1				18
小計	12	40	24	6	4	7	72	35	10	43	23	20	1			6	3	2	2		86
総計	12.9	42 45.2	25 26.9	10 10.8	4 4.3	7 (8.1)	79 (91.9)	36 (38.7) (45.6)	12 (12.9)	47	23	23	2			6	3	2	2		93
		72.0																			

	a	b	c	計	%
Ⅰ	／	3	4	7	7.5
Ⅱ	27	41	18	86	92.5
%	29.0	47.3	23.7	100	100

a 44.3　b 21.7　66.0
c 21.7　d 1.9　h 2.8　26.4
e　f
g 5.7　h 2.8　i 1.9　10.4



第91図　石鏃E類実測図(I)



24・90・18・10・94・87・86・23・22・15・59・37　II－b類

76・31・5・29・70・57・58・16・4　II－c〃

第92図　石鏃E類実測図(2)

る。まとめるとa＋b＝66.0、c＋d＋h＝26.4、g＋h＋i＝10.4%となる。先端部分乃至体部上半を欠失する例が過半数を占め、刺突具に共通する現象を示している。基部側縁を欠くものがそれに次ぐが、この解釈には今後若干の検討を要しよう。少数ではあるがg・h・iが存在する点は他種に同様である。このnotch風の破損は材質の検討とともに十分に試みられねばならない。アスファルトの付着は2例に認められたが、他種に比較し若干少ないと思われる。付着状況が(あ)を示すのは当然であろう。

第27表　石鏃E類材質一覧

材　　質	個数	比率	材　　質	個数	比率
黒耀岩	1	1.1	玉　　髄	2	2.3
鉄質石英	1	1.1	チャート質粘板岩	5	5.7
輝緑凝灰岩質チャート	4	4.5	凝灰質石硬泥岩	17	19.3
チャート	3	3.4	フリント質凝灰岩	11	12.5
石　　英	1	1.1	めのう	1	1.1
珪質泥質凝灰岩	13	14.8	珪質（チャート質）輝緑凝灰岩	9	10.2
流紋岩	9	10.2	珪質泥岩	10	11.4
凝灰岩質チャート	1	1.1	計	88	

石鏃　F類　（第93～95図、図版42）　いわゆる無茎鏃のうち、基底辺を内湾させた（抉り入り）ものを一括した。平面形態・抉りの様相その他により五種に細分しうる。即ちI、二側縁が直線的で小型のもの、II、体部が一坦外方に張り出し、その後再び細くなり抉り部にいたるもの、III、側縁が若干湾曲し、かつ抉りがやや深めのもの、IV、抉りがかすかなもの、V、破片のため不明のもの、である。これらについて模式図に示した観察を行ない、その結果は第28表のとおりである。

(1)　平面形態と大きさとの関係を示すと次のようになる。Iにはcしかなく、その形状が小型なることを基本的性格としていることが明らかである。IIが過半数を示している。したがってこの種鏃が晩期前半期の鏃の主体的存在なることを明らかに示すものといえるであろう。大きさはb→c→aの比率で存在する。これは他時期との比較が必要であるが、仮に他時期に比較してaが極端に少ないとすれば、晩期において狩猟対象に何らかの変化が生じつつあったと解することも出来、今後の検討を要しよう。いずれにしても大きさがその用途をもっとも忠実に反映していると考えられよう。たとえば、小型品なることをその主要特徴としているIなどは、小型の鳥獣・魚類などを主対象としていた可能性が大である。

	a	b	c	計	比率
I			11	11	4.9
II	19	98	36	153	68.4
III	5	6	11	22	9.8
IV	6	14	18	38	17.0
計	30	118	76	224	
比率	13.4	52.7	33.9		

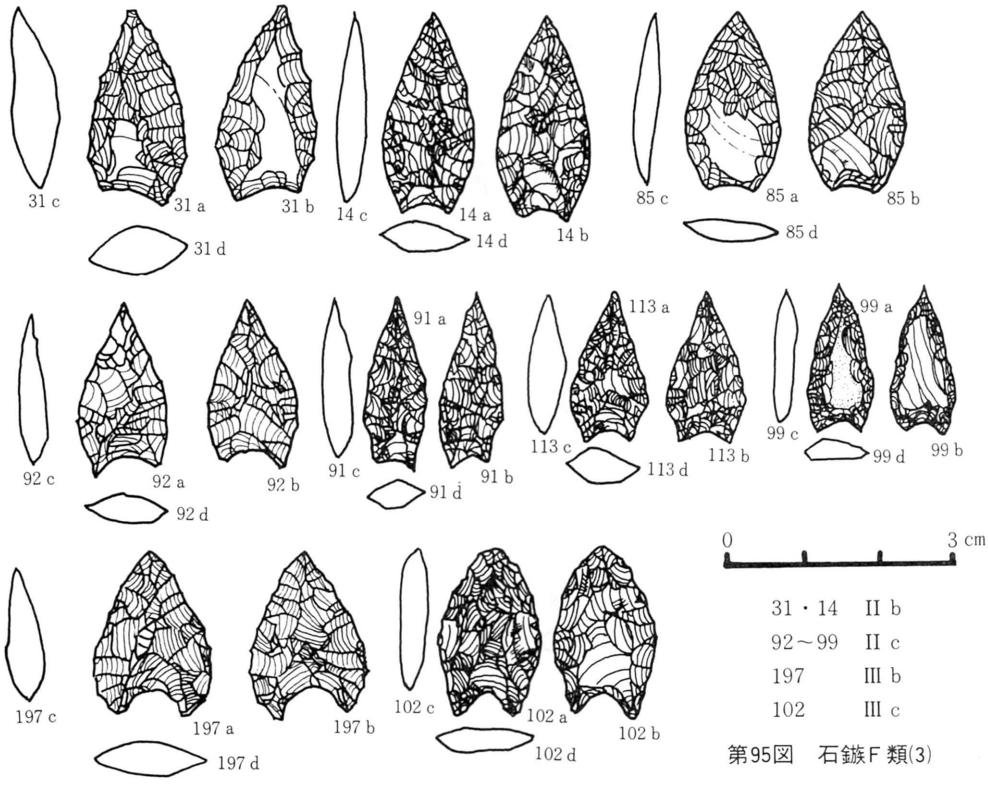
第 28 表　石鏃 F 類模式図・集計表

〔平面〕 I 直線的　II　III　IV　V 不明（破片）　〔大きさ〕 (a) 大　(b) 中　(c) 小

〔断面〕 (1)　(2)　(3)　(4)　〔技法〕 uni-facial　bi-facial　〔基部〕 fluting風

〔破損〕 (a)　(b)　(c)　(d)　(e)　(f)　(g)　(h)　(i)　(j)　〔pitch他〕 (あ)　(い)　(う)

タイプ	断面				調整			破損											pitch 他			
					uni-facial	bi-facial	fluting	完全	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	あ	い	う	
I − c		6 ⑥		5 ⑤		11 ⑪ ⑪		2 ②	4 ④		6 ⑥	2 ②							1 ①			末 1 obsidians 3
II − a		6	2	11		19 ⑲	11	7	7	2	5		1	1					5			
b		44	22	32	1	97 ⑨⑧	33	14	37	32	31	3		8	1	1			7			末は uni
c	1	19	10	6	2	34 ㉞	10	16	13	2	12			1								末は uni
小計	①	⑥⑨	㉞	㊶	③	150 153	⑤⑩	㊲	㊼	㊱	㊽	③	①	⑩	①	①			⑫			
III − a		2	2	1		5 ⑤	1			5	4								2			
b		4	1	1		6 ⑥	3	1		3				1								
c		7	3	1		11 ⑪	4	5		5	3								1			
小計		⑬	⑥	③		㉒ ㉒	⑧	⑥		⑬	⑦			①					③			
IV − a		3	3			6 ⑥	3	1	1	4												末 1
b		10	4		1	13 ⑭	6	6	2	4												末はuni
c	2	11	3	2	2	16 ⑱	3	4	4	7	5	5		3								uniは
小計	②	㉔	⑩	②	③	㉟ ㊳	⑫	⑪	⑦	⑮	⑤	⑤		③								
計	③	112	㊿	㊾	⑥	218 224	⑦④	㊻	⑥⑧	⑥④	⑥⑥	⑩ (225)	①	⑭	①	①			⑯			



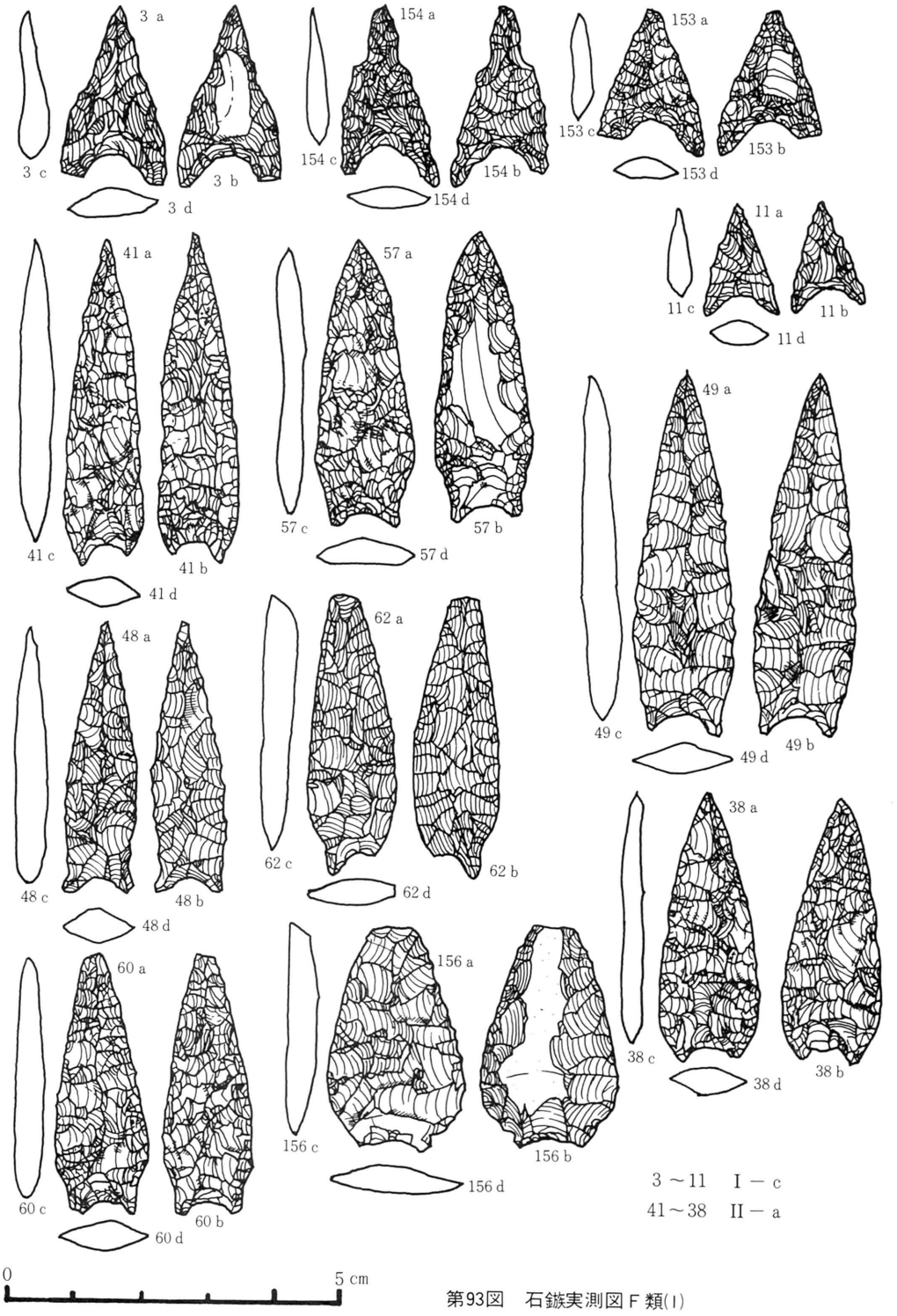
第95図　石鏃F類(3)

(2)　横断面形態は先端部は例外なく菱形を呈すので、基底辺近くのそれを見た。断面形態(1)と技法の uni-facial が例外的存在であり、この種鏃が bi-facial が基本形態をなすことは明らかである。(4)　に加え、平坦面をもつ(2)･(3)が 70％前後で存在する点は特徴的である。これは fluting 的な技法と密接に関連しているものであろう。これは bi-facial なものにも多く認められ、おそらくは着柄を考慮しての技法であろう。ただし、fluting 的と trimming 的技法の両者が存在する。

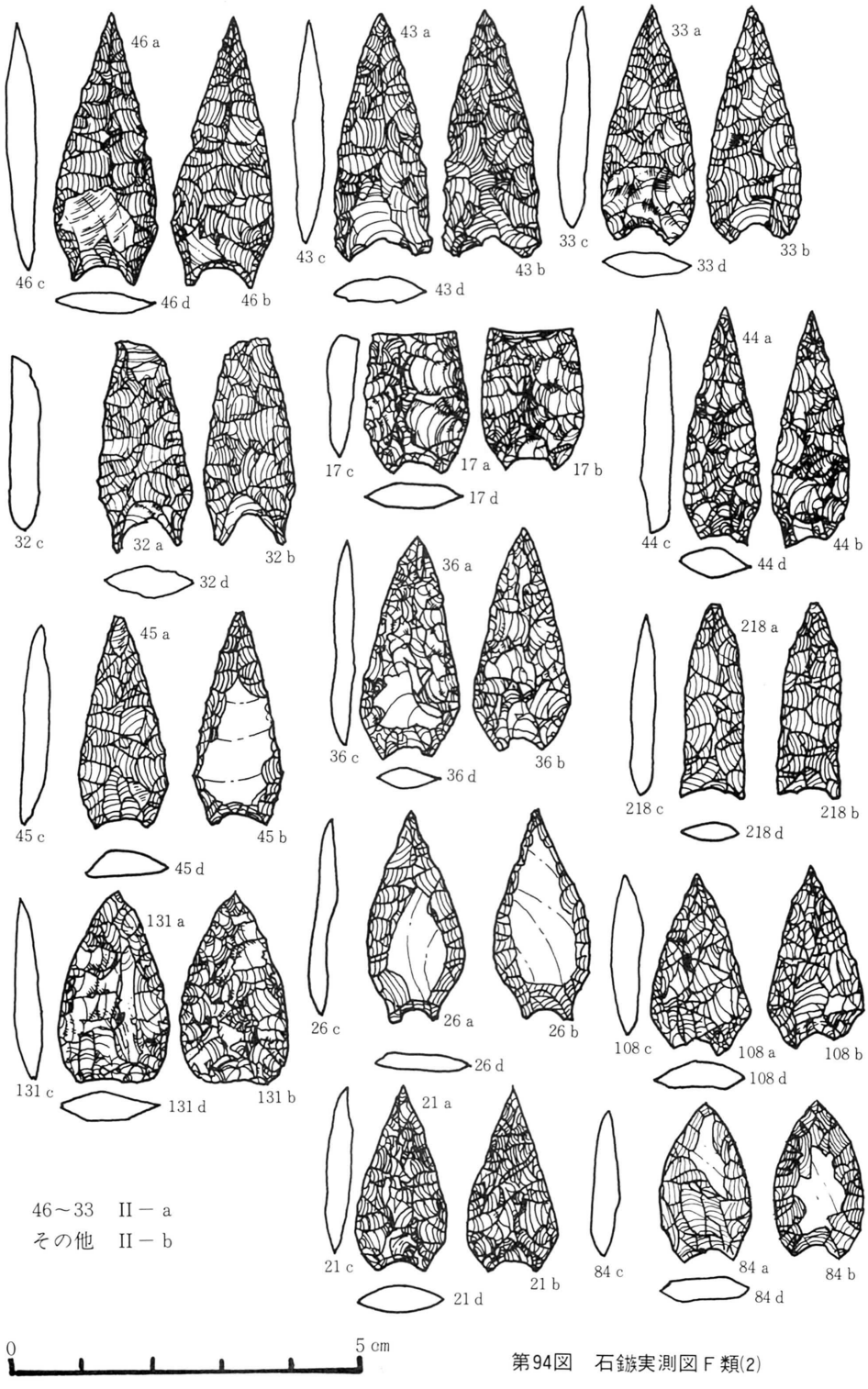
(3)　破損状況をみると、完全品は 25％を占め、少なくはない。225 の破損現象をまとめると先端部･体部上半関連が 60％近くを、側縁端部関連が 34％をしめる。(c)が多いことは、いわゆる片脚鏃的なものが多いということになる。この原因は不明であるが、着柄・材質との関連を考慮すべきであろうか。notch 風のものは少ない。

(4)　アスファルトの付着例は 16 点（7.1％）であり、少なくはないであろう。それはすべて㋐であり、当然と思われるが、1 例のみ先端部近くまで付着したものがあり、着柄状況復元の好資料といえるであろう。

石材とサブタイプの関係は以下の通りである。



第93図　石鏃実測図 F 類(I)



第94図　石鏃実測図F類(2)

第29表　石鏃F類材質一覧

素　材　名	数	比　率	I	II	III	IV
硬質泥岩質凝灰岩	21	9.2%	2	10	4	4
赤色めのう	37	16.2%	3	24	3	4
フリント質珪質凝灰岩	34	14.9%		29	1	4
玉 髄	22	9.6%	1	15	2	5
硬質泥岩	86	37.7%		58	12	15
チャート質粘　板岩	9	3.9%		8		2
珪質白色細凝灰岩	10	4.4%	2	4		
黒よう岩	5	2.2%	3	2		
珪質白色凝灰岩	4	1.8%		3		5
合　　計	228					

※石鏃破片

破片のため形態不明のものを以下にまとめた。その破損状況も検討に値するが、その一部は各タイプの個別説明で行なっており、ここでは省略する。

○石鏃破片の材質は以下のとおりである。

第30表　石鏃破片材質一覧

素　材　名	数	比率
フリント質珪質凝灰岩	40	19.9%
硬質泥岩質　〃	31	15.4
輝　　緑　〃	6	3.0
硬化泥岩	67	33.3
（珪化した）緑色岩	1	0.5
黒よう石	2	1.0
蛋白石	2	1.0
玉　　髄 24	11.9	
めのう	28	13.9
合計	201	

ⓕ　**石錐**　（第96～100図、図版43・44）　いわゆる石錐はその形態により三大別した。即ち、いわゆるつまみのあるもの二種、（I・II）つまみが無く両端の尖るもの一種（III）である。つまみあるものはそれと錐部の比率（a：b）で分離した。aが大なるものI、小なるものIIである。以下にはI～IIIを個別に説明する。計測値等は第75表以下に一括した。

1　**石錐I類について**　I類については第31表のような基準を設けた。以下その項目順に見ていく（第97・98図、図版43）。

(1)　つまみによる形態の細別。　つまみの特徴により三大別しうる。A_1－入念な剥離が行なわれ、定形性の強いもの。A_2－入念ではあるが顕著な定形性は示さないもの。B－とくに剥離の認められないもの、である。A_1はさらにその定形性の形状によりア～エと四種に細分出来る。その数量比は次のとおりである。$A_1$35.2%、$A_2$16.9%、計52.1%、B 47.9%。二大別すればほぼ同率を示す。またA_1：A_2＝35.2：16.9となり、ほぼ2：1で前者が多い。しかし、これを以てA_2を「未製品」と断定するわけにはいかず、これも独立したタイプとして扱うこととした。同様にBについても「未製品」と見なす立場がありうるが、これにおいても破損品が多く

第31表　石錐、大別・Ⅰ類細別模式図・集計表

〔大別〕　〔Ⅰ〕 a b　〔Ⅱ〕 a' b'　〔Ⅲ〕

〔Ⅰのつまみによる細別〕　A_1　入念に剥離し定形性の強いものに仕上げる　ア　イ　ウ　エ

A_2　入念に調整するも定形性弱し　Ⓑ　特に剥離なし

〔つまみ横断面形〕 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7)

〔つまみ縦断面形〕 (1) (2) (3) (4) (5)

〔大きさ〕 a．大　b．中　c．小

タイプ	つまみ横断面						同縦断面					破損				若干の技法		その他
												完	a	b	c	fluting	背面 trim.	
5 A_1－a－イ	1	3	1				2	2	1			2			1	1		
1　　ウ			1							1				1				
⑥　小計	①	③	②				②	②	①	①		②		①	①	①		
1 A_1－b－ア			1						1									
5　　イ	1	2	1	1				2	2	1		1	2	2		1		
4　　ウ		3		1			2		2			2		1		1		
5　　エ		4		1				4	1			3		2		1		
⑭　小計	①	⑨	②	③			②	⑥	⑥	①		⑦46.7	③20.0	⑤33.3		③20.0		
1 A_1－c－イ		1					1							1				
1　　ウ					1		1					1						
2　　エ		2						2				1	1					
④　小計		③			①		②	②				②	①					
㉙■　A_1計	② 8.0	㉑60.0	④16.0	③12.0	①4.0		⑥24.0	⑭40.0	⑦ 28.0	②8.0		⑪44.0	④16.0	⑥24.0	①4.0	④16.0		
5 A_2－a		4		1			1		2		2	1			4		2	
7　　b		2	3	2					2	1	4	2		4	1			
⑫　A_2計		⑥50.0	③25.0	③25.0			①8.3		④33.3	①8.3	⑥50.0	③		④	⑤		②	
52.1㉑　A計	②5.4	㉑56.8	⑦18.9	⑥16.2	①2.7		⑦18.9	⑭27.0	㉑29.7	③8.1	⑥16.2	㉑37.8	④10.8	⑭27.0	⑥16.2	④10.8	㉒5.4	
		75.7		21.6				56.8		24.3								
11 B－a			3		7	1	4			5	2	1	1	2	6			
15　b	4	3	4	2	1	1	4	4		6	1	5	1	3	6			
8　c	1		2	2	2	1	3	3		1	1		2	3	3			
47.9㉔　B計	⑤14.7	③8.8	⑨26.5	④11.8	⑭29.4	③8.8	㉑32.4	⑦20.6		㉒35.3	④11.8	⑥17.6	④11.8	⑧23.5	㉑44.1			
		20.6		55.9				20.6		47.1								
㉛総計	⑦9.9	㉔33.8	㉔22.5	⑭14.1	㉑15.5	③4.2	㉔25.4	㉒23.9	㉑15.5	㉔21.1	⑭14.1	⑭28.2	⑧11.3	㉔25.4	㉑29.6	④5.6	②2.8	
		47.9		38.0				39.4		35.2								

	A_1	A_2	B	計	%
a	6	5	11	22	31.0
b	15	7	15	37	52.1
c	4		8	12	16.9
計	25	12	34	71	
%	35.2	16.9	47.9		
	52.1				

（後述）、しかもその様相がAに共通するものであることから、これも独立したタイプとして扱うこととした。したがってA_1：A_2：Bの三種タイプの併存を常態と考えておく。

次にA_1内におけるつまみ形態細別は以下のようになる。ア：イ：ウ：エ＝1：11：6：7でイ・ウ・エが主体的に併存している。なおアはエ乃至ウのヴァリエイションとすることも出来る。したがって、前述のイ・ウ・エが基本形態となろう。

(2)　大小の形状について　これは、大・中・小＝a・b・cと簡単に分けるに留めた。その比率はa：b：c＝29.2：53.8：16.9(%)となり、bを主体とし、a・cが続く。cの16.9%も無視してよい数ではない。したがって三種併存を常態と見なす。これは、それぞれの用途に応じた大きさの分化と見なすべきものであろう。

(3)　つまみの横断面形について　これについては模式図の如き7種のタイプを設け区分した。その結果は次のとおりである。

タイプ(2)と(4)、同(3)と(5)はそれぞれ同種のものと考えてよいと思われるので、それを合計した数も示した。A・Bのいずれにおいても(1)・(6)は例外的な存在であり、それ以外で主体を構成していることは明らかである。ただしAにおいては(2)・(4)が(3)・(5)に優越し、Bにおいてはその逆の結果が出ているとも見える。これはかなりの特徴と見なしうる。これはつまみの成形技法の反映であり当然といえば当然の結果ではある。

	1	2	4	3	5	6	計
A_1	2 8.0	15 60.0	3 12.0	4 16.0	1 4.0		25
		72.0		20.0			
A_2		6 50.0	3 25.0	3 25.0			12
		75.0		25.0			
B	5 14.7	3 8.8	4 11.8	9 26.5	10 29.4	3 8.8	34
		20.6		55.9			

(4)　同縦断面形　同様に縦断面形にも5種の類型を設け区分した。その結果は次のとおりである。(2)と(3)、(4)と(5)はそれぞれ同種のものと見なしてよいと思われる。A_1においては、(2)・(3)が半数を越え、A_2とBにおいては逆に(4)・(5)が半数に近い。横断面と同様の傾向がここにおいてもいいうる。これもつまみの調整技法の反映と見なされ、当然ではあろう。

	1	2	3	4	5	計
A_1	6 24.0	10 40.0	7 28.0	2 8.0		25
		68.0		8.0		
A_2	1 8.3		4 33.3	1 8.3	6 50	12
		33.3		58.3		
B	11 32.4	7 20.6		12 35.3	4 11.8	34
		20.6		47.1		

以上の結果をまとめるとA（横）2・4（縦）2・3、B（横）3・5（縦）4・5がそれぞれ主体をなすことになろう。

(5) 破損状状況について　破損についてはa・b・cの三類型と完全品の計四種を設けた。それによると　左表の如くである。

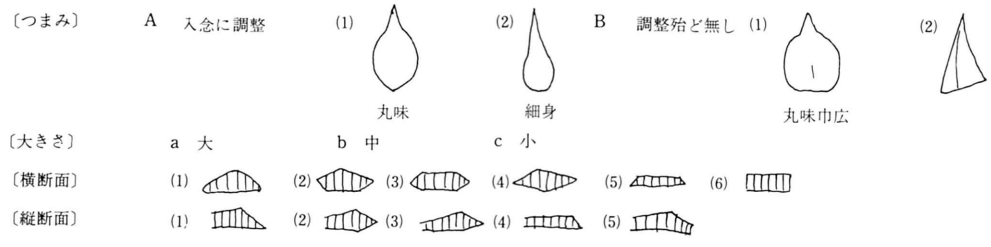
	完全	a	b	c
A	41.9	12.9	29.0	9.1
B	17.6	11.8	23.5	44.1

Aにおける完全品の多さが特に顕著である。

これは、先の「未製品」伝々の想定とも密接に関連してくる問題である。即ち、Bの破損の多さを石器製作途上のミスと見なせば、B自体が未製品的性格を強くもつこととなろうし、逆に、それを使用の結果をも含むと見なせば、完成品で、多少の用途のちがいを想定すべきことになろう。ここでは一応後者の立場をとっていることは既に述べたところである。錐部の根元・中間・先端の順に破損しかなり特徴的であるが、これはまさに使用の反映であろう。なお、先端が磨耗している例についてはとくに図示はしないが、相当数存在する。

2　**石錐II類について**(第98・99図、図版43)これらについても、つまみ形成のための調整技法と

第32表　石錐II類模式図



その形態の相違を考慮して、四種に細分した。即ちA入念、B調整殆ど見られないものの二大別と(1)、基部に丸味と(2)、細身の二細別の組みあわせである。その他はすべて先に同一である(第33表)。

(1)　形態と大小について　この二種をまとめると次のとおりである。AとBの二大別からみると、前者40.7%、後者59.3%となり、後者が若干多いが、両者の併存が正常と見なされてよい。また細別タイプ毎の比率をみると、B_1：A_2：A_1：B_2＝45.3：23.3：17.4：14.0となる。

	A_1	A_2	B_1	B_2	計
a	14.3 6.7	626.1 30	1252.2 30.8	417.4 33.3	23 100
b	718.4 46.7	821.1 40	1847.4 46.2	513.2 41.7	38 44.2
C	728.0 46.7	624.0 30	936.0 23.1	312.0 25.0	25 29.1
計	1517.4 100	2023.3 100	3945.3 100	1214.0 100	86
	40.7		59.3		

これからすると、剝離・加工の見られないものから順に存在していることになる。この現象の解釈も「未製品」と見なされるべきものがこの中に多く存在する可能性を示すともいえよう。

大きさはb：c：a＝44.2：29.1：26.7となり、bがもっとも基本的であり、後二者がそれを補いつつ併存しているといっておく。

第33表　石錐II類集計表

	タイプ	横断面						縦断面					その他
1	A, a						1					1	⑤1
7	A, b	1	2	3	1			1	2	3	1		②7　⑦1
7	A, c	2		1	2	2		6		2			②7　◎1　両端1
69	A, d	3　20.0	2　13.0	4　26.7	3　20.0	2　13.3	1　6.7	7	2	5	1	1	②7　⑤1　⑥8　⑦1　＊1
6	A, e	1	3	1		1		2	2	1		1	▲6
8	A, f	2	2	2	1	1		4	1	2		1	◎1　▲4　⑤1　②2　obsi 1
6	A, g		1	1	3	1		1	1	2	2		▲2　⑤2　②2
20	A, d	3　15.0	6　30.0	4　20.0	4　20.0	3　15.0		7	4	5	2	2	②1　◎12　⑤3　⑥4　obsi 1
35	A, d	6　17.1	8　22.9	8　22.9	7　20.0	5　14.3	1　2.9	14　40.0	6　17.1	10　28.6	3　8.6	3　8.6	②8　◎12　⑤4　⑥12　⑦1　obsi 1
12	B, a	2		7		7	1	3	1	2	3	3	②1　▲2　⑤2　②7
18	B, b	8		1	4	3	2	3	2	4	9		②4　▲8　⑤1　②4
9	B, c	4		2	1	2		3	2		4		▲4　②5
20	B, d	14　35.9		5　12.8	5　12.8	12　30.8	3　7.7	9	5	6	10	3	②5　◎14　⑤3　⑥16
4	B, e	2			1	1		3			1		◎1　▲3
5	B, f	2				3				1	3	1	▲2　⑤1　②2
3	B, g	1				2		1			1	1	②1　▲1　②1
12	B, d	5　41.7			1　8.3	6　50.0		4		1	5	2	②2　◎6　⑤1　⑥3
51	B, d	19　37.3		5　9.8	6　11.8	18　35.3	3　5.9	13　21.5	5　9.8	7　13.7	21　41.2	5　9.8	②7　◎20　⑤4　⑥19
69	縦, d	25　29.1	8　9.3	13　15.1	12　15.1	23　26.7	4　4.7	27	11	17	24	8	②15　◎32　⑤8　⑥21　⑦1　obsi 1

(2)　つまみについて　これをまとめると以下のようになる。横断面(2)・(3)・(4)などのbi-facialな加工に対応しそうなものがAに多く、Bに少なく、(1)・(5)といったuni-facial乃至trimming的な加工に対応しそうなものがBに多い。これも技法の反映を正確に示しているものとして当然の結果であろう。

		1	2	3	4	5	6
横断面	A	17.1	22.9	22.9	20.0	14.3	2.9
			65.8				
	B	37.3		9.8	11.8	35.3	5.9
			21.6				
縦断面	A	40.0	17.1	28.6	8.6	8.6	
			45.7		17.0		
	B	25.5	9.8	13.7	41.2	9.5	
			23.5		51.0		

縦断面においてもAに(2)・(3)が多く、Bには(4)・(5)が主体的に存在する傾向を示す。

(3)　破損状況　完全品、a～gに細分した。その結果は、以下のようになる。完全品の比率は、

完全品	a	b	c	f
17.4	37.2	9.3	36.0	1.2

%

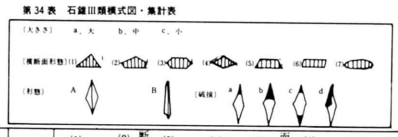
I－Bなどに共通するが、他には(a)・(c)が多く、(b)が後続する。これも形態と機能のしからしむるところであろう。つまみが破損するようなfが稀ということは、錐のつまみは破損する可能性が少ない用いられかたをしていたことを正確に反映しているのであろう。

3　**石錐III類について**　(第100図、図版44)　III類はつまみの無い、両端の尖るものである。形態により二大別した。即ちA、その中央部がやや太くなる狭長な菱形をなすもの。B、棒状のものの二種である。大小・断面形・破損などの区分基準は他に同じである。なお類似した鏃との区別は、体部の稜の二者に(菱形他の四稜のうち)、細砕の見られるものを錐とした(第34表)。

(1)　大小と形態について　この二点を整理すると次のようになる。形態ではBが主体的である。大・小はb：c：a＝54.8%：35.7%：9.5%で、中・小型のものが主体的で、大型は従の存在形態のようである。

	A	B	計
a	1	3	4　9.5
b	9	14	23　54.8
c	5	10	15　35.7
計	15　35.7	27　64.3	42

第34表　石鏃III類模式図・集計表



	タイプ	断面 (1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	破損 a	b	c	d		完	その他
1	磨 －a							1							1	
1	A －a				1										1	
9	b				9					7	1		1			
5	c				5					3		2				
⑮	A 計				⑮ 100					⑩ 66.7	① 0.7	② 13.3	① 6.7		① 6.7	
										72.3		86.7				
3	B －a				3					2	1					
14	b	3	2	2	7					4	4	1	1		4	
10	c			1	9					5		1			4	
27	B 計	③ 11.1	② 7.4	③ 11.1	⑲ 70.4					⑪ 40.7	⑤ 18.5	② 7.4	① 3.7		⑧ 29.6	
										59.3		66.7				
42	総計 A＋B	③ 7.1	② 4.8	③ 7.1	㉞ 81.0					㉑ 50.0	⑥ 14.3	④ 9.5	② 4.8		⑨ 21.4	
										64.3						
												73.8				

(2)　断面形態　A・Bともに(4)が100%、81%とその大部分を占め、(4)が基本形といってよい。(1)・(2)・(3)には未製品乃至他器種の混入があるのかもしれない。

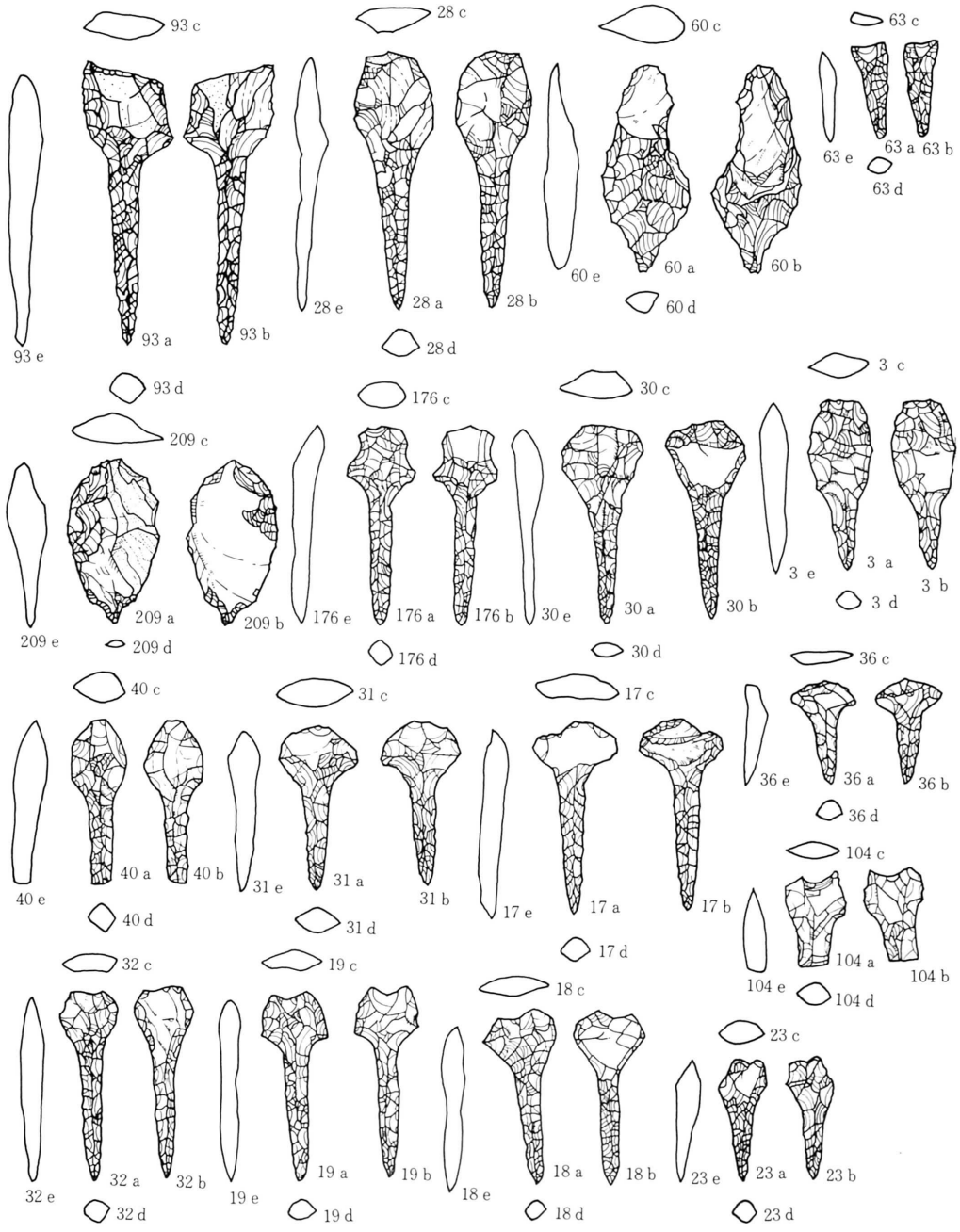
(3)　破損状況　完全品21.4%と若干多いようにも思われるが、大勢は他例に通じよう。A・Bともに破損a・b・cが多く見られ、機能からして当然かとも思われる。

4　**要約**　石鏃のタイプ別個数比を出すと大略次のとおりである。つまみのあるもの約80%、無いもの20%の全般的傾向下にあること、つまみのあるものでは、つまみの部分の大きめのものと小さめのもの（錐部の短かいものと長いもの）がほぼ同比率で存在したことがわかる。また既に示したとおり、タイプ別に個有の技法も伴ない、それなりの定形性下のもとにあったともいえる。

石材とサブタイプとの関係は次のとおりである。比較的顕著な対応関係があると見ることができる。

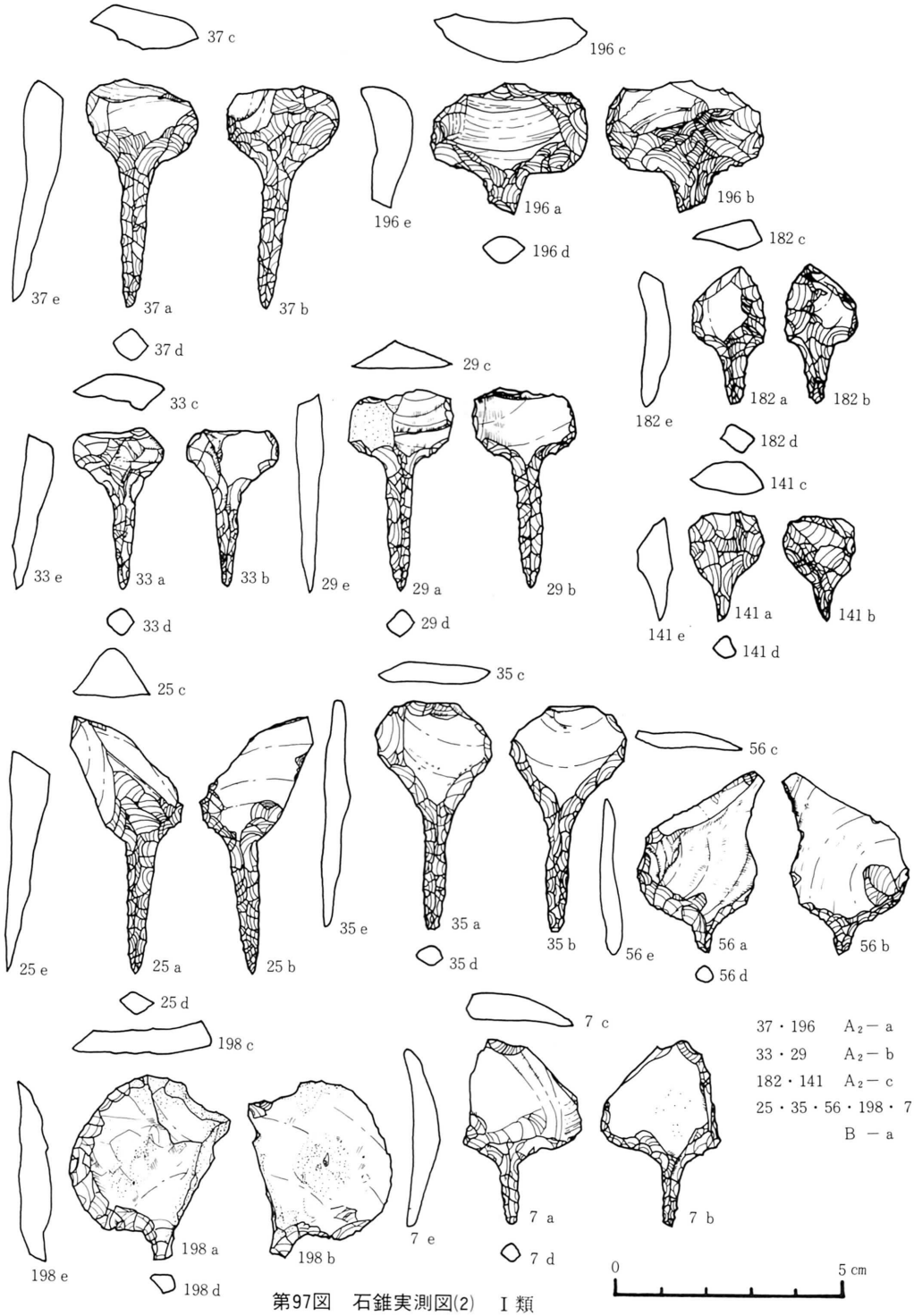
第35表・石鏃材質一覧

材　質	I	II	III	計	比率	材　質	I	II	III	計	比率
硬質泥岩	$31^{49.2}$	$22^{34.9}$	$10^{15.9}$	63	28.4	めのう		2^{100}		2	0.9
珪質泥岩	$22^{64.7}$		$12^{35.3}$	34	15.3	輝緑凝灰岩		$8^{53.3}$	$7^{46.7}$	15	6.8
赤色めのう	$11^{91.7}$	$1^{8.3}$		12	5.4	硬質凝灰質泥岩		$1^{8.3}$	$11^{91.7}$	12	5.4
フリント凝灰岩	$5^{20.8}$	$16^{66.7}$	$3^{12.5}$	24	10.8	黒色粘板岩		1^{100}		1	0.5
珪質凝灰岩	$6^{75.0}$		$2^{25.0}$	8	3.6	凝灰質珪質泥岩		7^{100}		7	3.2
玉　髄	$2^{11.1}$	$7^{38.9}$	$9^{50.0}$	18	8.1	黒耀岩		1^{50}	1^{50}	2	0.9
チャート		$18^{94.7}$	$1^{5.3}$	19	8.6	松脂岩			1^{100}	1	0.5
赤色フリント質凝灰岩		3^{100}		3	1.4	硬砂岩			1^{100}	1	
						計	77	87	58	222	

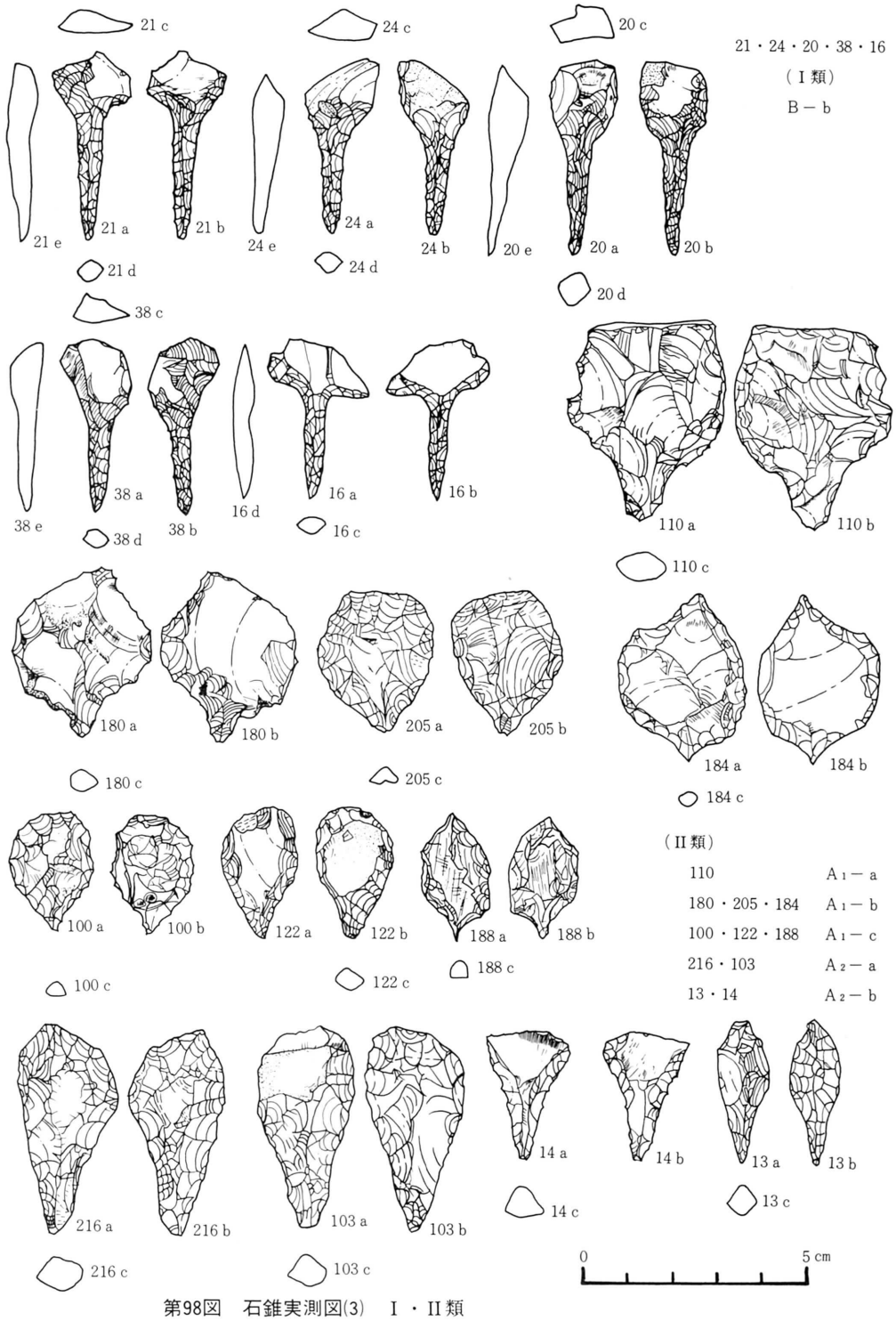


93・28・60・209	A₁－a－イ	32・19・18・104	A₁－b－エ
176	A₁－b－ア	36	A₁－c－ウ
30・3・40	A₁－b－イ	23・63	A₁－c－エ
31・17	A₁－b－ウ		

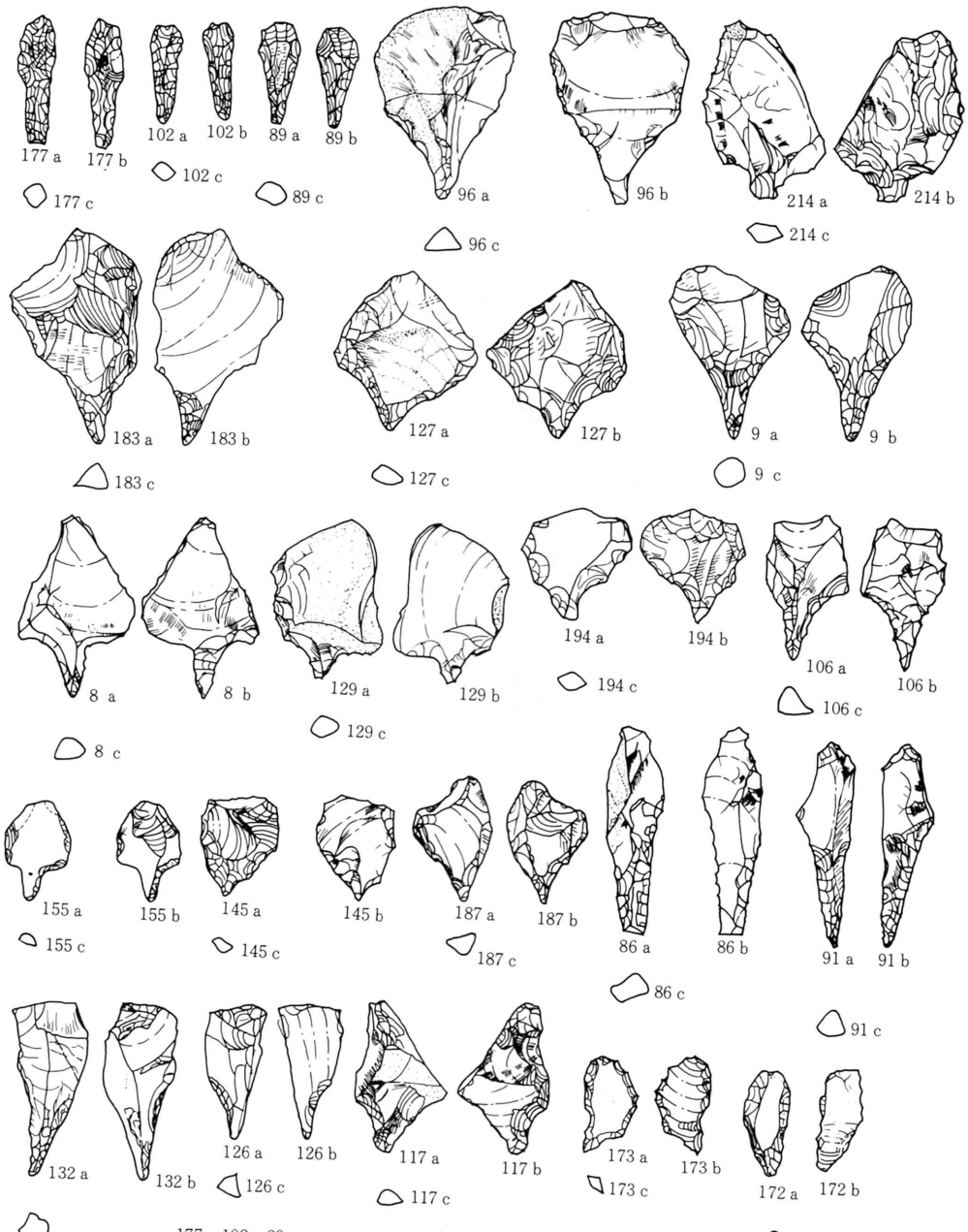
第96図　石錐実測図(1)　Ⅰ類



第97図　石錐実測図(2)　Ⅰ類



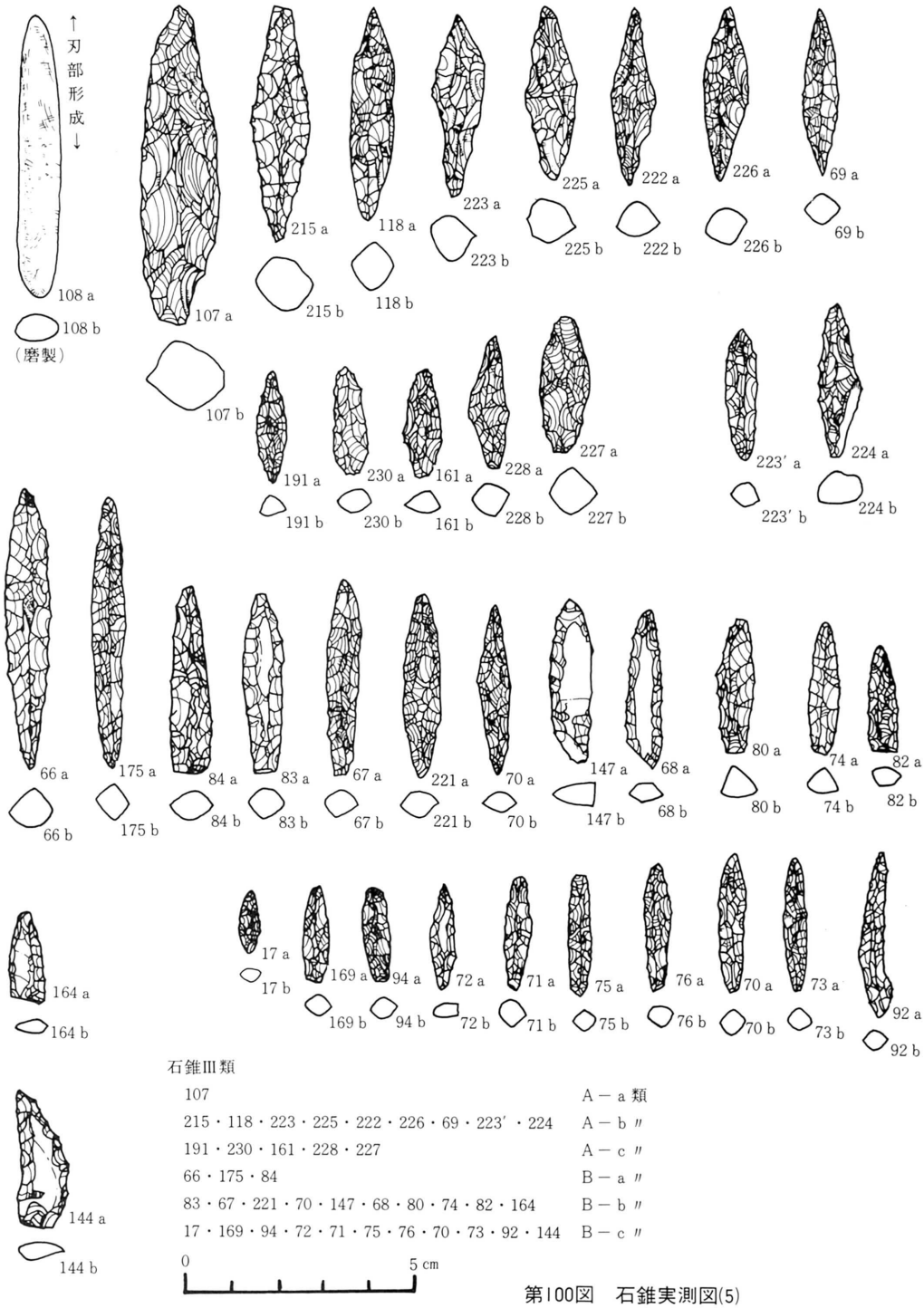
第98図　石錐実測図(3)　Ⅰ・Ⅱ類



177・102・89	A_2－c	155・145・187	B_1－c	
96・214・183	B_1－a	86・91・132	B_2－a	
127・9・8・129・194・106	B_1－b	126・117	B_2－b	
		173・172	B_2－c	

0　5 cm

第99図　石錐実測図(4)　II類



石錐Ⅲ類

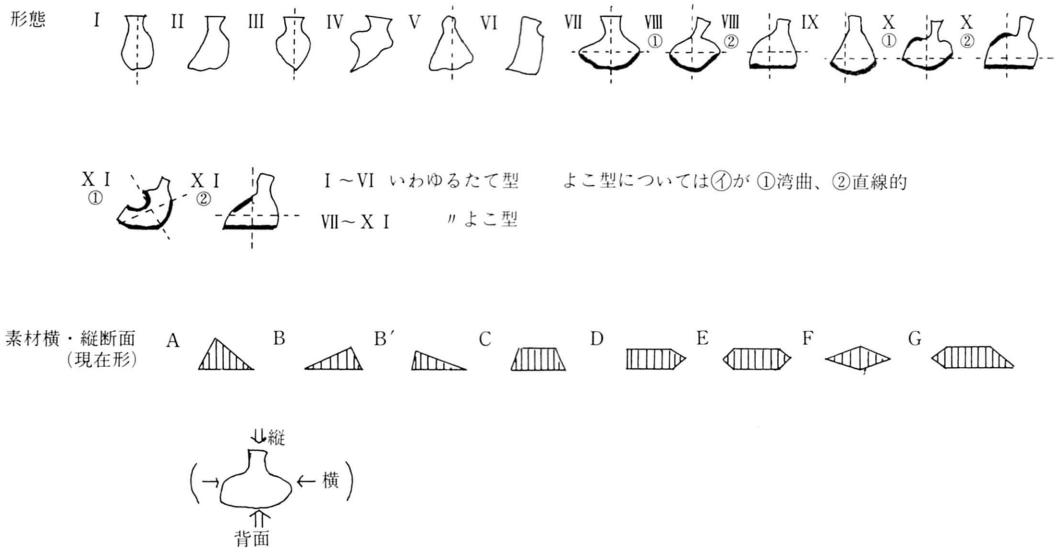
107	A－a 類
215・118・223・225・222・226・69・223′・224	A－b 〃
191・230・161・228・227	A－c 〃
66・175・84	B－a 〃
83・67・221・70・147・68・80・74・82・164	B－b 〃
17・169・94・72・71・75・76・70・73・92・144	B－c 〃

第100図　石錐実測図(5)

ⓖ 石匙　（第 101～107 図、図版 48・49）　いわゆる石匙（皮はぎ）である。形態にはⅠ～XIの類型を設定した。うちⅠ～VIがいわゆる縦型、それ以外が同横型である。横型については部位㈠の形状（直線と湾曲）を重視した。

これらについて以下の観察を行なった（第 36 表）。(1)　素材の縦・断面形態、三角形・菱形

第 36 表　石匙模式図



のそれぞれのブァリエーションが存在する。

(2) 刃部形成部位、いわゆるつまみの両側とその対辺をイ・ロ・ハと仮にした。

(3) 刃部形成状況、 つまみ形成剥離以外のものを見た。uni-facial なものと bi-facial なものに二大別出来、後者は同一縁辺に行なうものと、異縁辺に行なうものの二種がある。

(4) いわゆるつまみと加撃点の関係、両者が一致するものとしないものがある。打面の判明するものには非調整打面、調整打面、入念な剥離により不明になったものの三種がある。最後者はそのために先端がうすくなっているものが多い。

(5) アスファルト様のものの付着状況

この結果は第37表のとおりである。これによって若干の説明を行なう。

〔タイプ別個体数〕 縦型：横型＝39(40.6%)：57(59.4%)となり後者が若干多い。前者の中ではIIIとVがやや多く、後者においてはVIII～XIが多い。VIIIでは①、Xでは②、XIでは①が多いが①と②の総数を比較するとほぼ同数に近い。したがって二種の併存が常態とみなされてよいものと思われる。いずれにしても、上記の六種が石匙の代表的形態ということになろう。

〔素材断面形態〕 いわゆる縦型においてはA、B、B′など三角形のヴァリエイションが多い。同横型においては、横断面は三角形：台形＝31.4：68.7%、縦断面は同じく 22.3：77.5%となり台形のブァリエイションが主体をなす。したがって両者の相違はかなり顕著といえる。

〔刃部形成について〕 いわゆる縦型からみると、(甲)一側縁のみのもの、(乙)二側縁のもの、(丙)全周のものなどがあり、さらに(a)片面加工、(b_1)腹背面ともに同一縁辺のもの、(b_2)腹背異縁辺などの細分が可能である。これらとタイプの対関係は次のとおりである。

I・IV類にはb類のみが見られるが、縦型全体として見ればa：b_1：b_2＝37.9：37.9：24.1%と、何らかの形で両面加工的なものが多いことになる。また一側縁だけに刃部が形成されるものが圧倒的に多いことも特徴的である。

同横型について見ると、剥離が有無の部位については、(イ)は未製品的可能性が(ロ)・(ハ)よりも

	I			II			III			IV			V			VI		
	甲	乙	丙	甲	乙	丙	甲	乙	丙	甲	乙	丙	甲	乙	片	甲	乙	丙
a				1	1		1	3	2				2			1		
b_1			1	2			4			1		1	1			1		
b_2	3		1					1	1	1								

a計	11	甲	18
b_1	11	乙	5
b_2	7	丙	6

高いと見なした。理由は、横型で刃部が形成されるべき位置（それは細破砕痕の顕著な残存部位と一致する）は(イ)であると考えられるからである。刃部形成の見られるものにおいては、a：b＝62.5：37.5%と前者が多い。(ロ)・(ハ)については無がかなりの比率を占めており、これらは

形態		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII①	VIII②	IX	X①	X②	XI①	XI②
素材形態(断面)たてこと	A	1	1	9	3	3	1		1	1 1					
	B	2		4		2	1	2	1 2	2		1	2		
	B′	1	2	1		3		2	1 1	1 1		1 1	3 5		
	C	1	1			1		1	3 2		1	3 1	7 3	1 1	1 2
	D			1		1		2	2 5	1 3	1	1	1 2	2 2	2
	E							1	1	1			2 2	1 1	1
	F							2						1	
	G								1 1	1	1	3	1 6	1 2	
									3		1	1	1		
刃部	無			2		7		1							
	a_1		2	6		2	1								
	b_1	1	2	5		1	1								
	b_2	4		2	3										
イ	無								1	2			3		
	a							3	9	3	1	3	7	3	1
	b							1	2	1	1	2	6	3	2
ロ	無								7	2		3	8	4	3
	a							2		1	1		4	1	
	b							2	3	3		2	3	1	
ハ	無								5	3		5	11	3	1
	a							2	1				3	1	1
	b							2	5	3	1	1	2	2	1
つまみ あ	1	1				2							1		
	2	1	1			1			4	1			3		
	3		1					2	5	1	1(?)	1	8	2	3
つまみ い	1												1		
	2	3	2	8	2	5	2	3	1	3	1	2	4	4	
	3			7	1	2			2			3			
	不明									1					
pitch							1	1	1	2		1	1	3	1

第 37 表　石匙集計表

剝離・刃部形成が必ずしも期待されなかった可能性が高い。なお(b)についてはXIなどのように意図的に未加工のままに残す場合もあるらしい。

〔つまみと加撃点について〕　同縦型においては、両者一致するもの(あ)：しないもの(い)＝17.9％：82.0％と圧倒的に後者が多い。これはこの種石器出現以来の傾向であり当然であろう。(い)については(2)：(3)＝68.8％：31.2％と(2)がかなり多い。(あ)についても同様の傾向を看取出来る。したがって縦長の素材は(い)－(2)的なものを基本形とすると考えてよい。

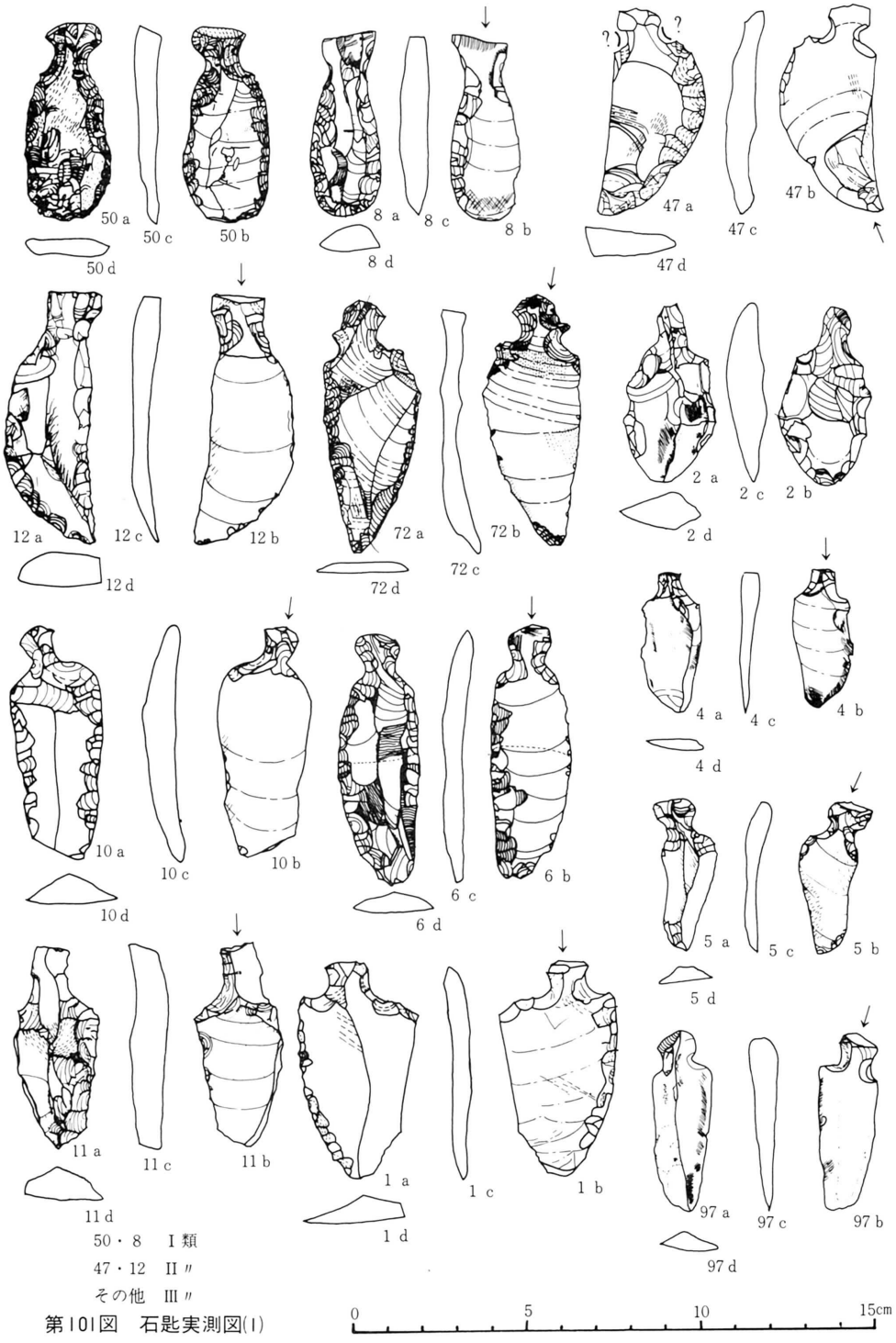
同横型において(あ)：(い)＝56.1％：43.9％と(あ)が半数を越え、縦型に比し、横型の一特徴と見しうる。(あ)の中では部位(イ)の方向からの加撃（したがって、つまみの延長方向と直交する）がもっとも基本的な形であるらしい。決して横長剝片だけではなく、縦長のそれも多く用いられていたことになる。(あ)については(1)：(2)：(3)＝3.1：25.0：71.0となり(3)が基本形、(い)については同様に4.0％：72.0％：20.0％となり(2)が主体をなす。

〔アスファルト類の付着について〕　同縦型：横型＝9.1％：90.9％と後者に圧倒的に多い。前者の1例も疑問無しとしないものである。したがって本遺跡においてはこの措置は横型に本来的対応関係をもつものと見なしておく。それが〝着柄〟の反映であるならば、横型と着柄に対応関係があると見なせよう。横型の中では、加撃点の形状(2)的：同(3)的＝7：3の割合となる。これがつまみの形状とアスファルト類残存にはあまり相関関係は無い、さらには、(3)的加工が着柄を意識した上でのものではなかったとする想定に否定的判然を下すべき資料か否かは、今後の検討をまつべきであろう。

石材は以下のとおりである。

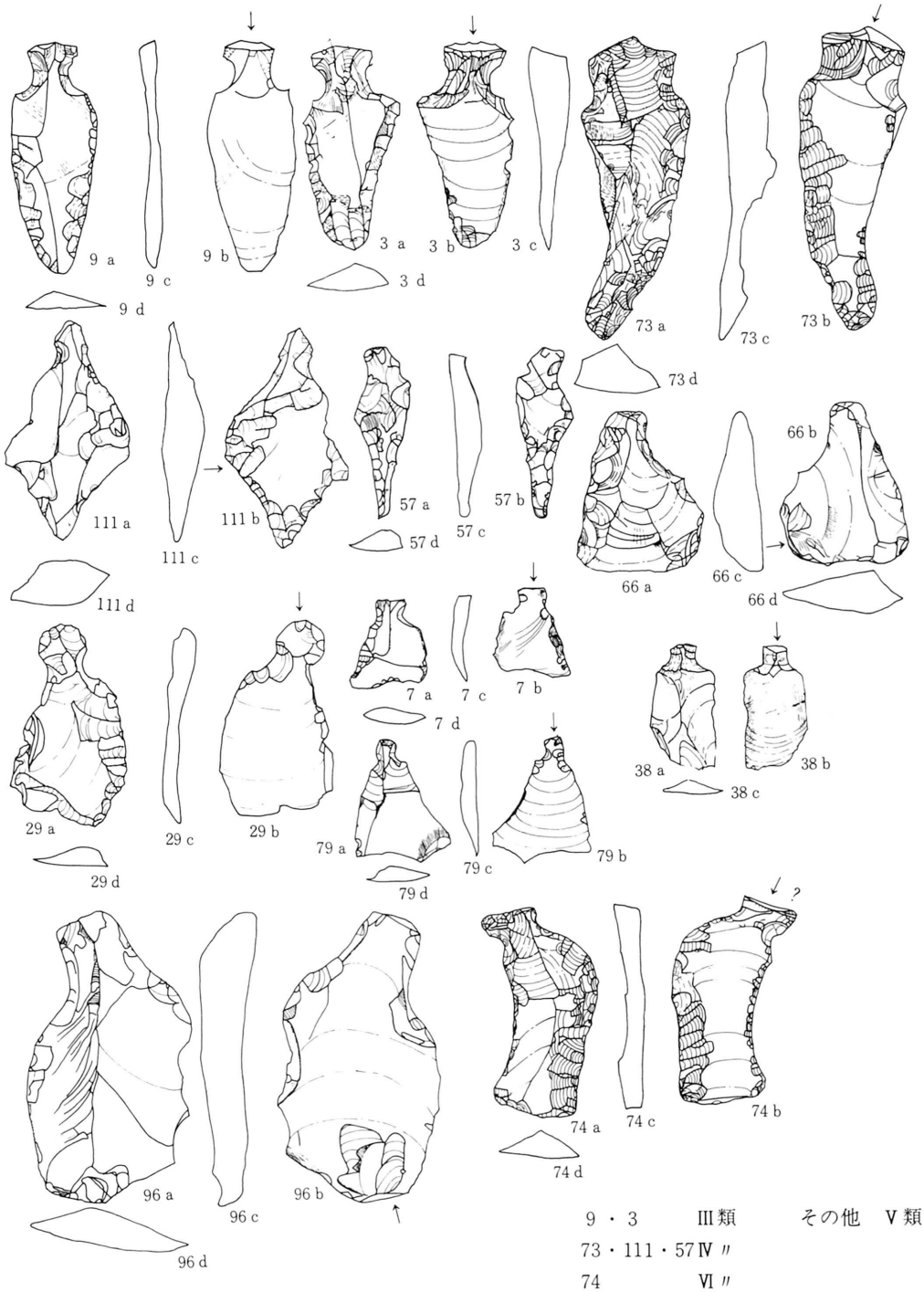
第38表　石匙石材一覧

素　材　名	模型		たて型	
	数	比率	数	比率
珪質淡緑色凝灰岩	2	3.2		
〃細粒　〃	3	4.8		
泥質チャート	2	3.2		
凝灰岩質チャート（北上山地）	2	3.2		
凝灰質珪質泥岩	14	22.6	6	14.0
松脂岩	3	4.8		
硬質泥質凝灰岩	2	3.2		
玉　髄	1	1.6		
珪質泥岩	22	35.5	16	37.2
ホルンフェルス化した粘板岩	1	1.6		
めのう	2	3.2		
輝緑凝灰岩	1	1.6	3	7.0
硬質泥岩	7	11.3	5	11.6
珪質フリント質凝灰岩			10	23.2
粘板岩			1	2.3
硬砂岩			2	4.7
計	62		43	

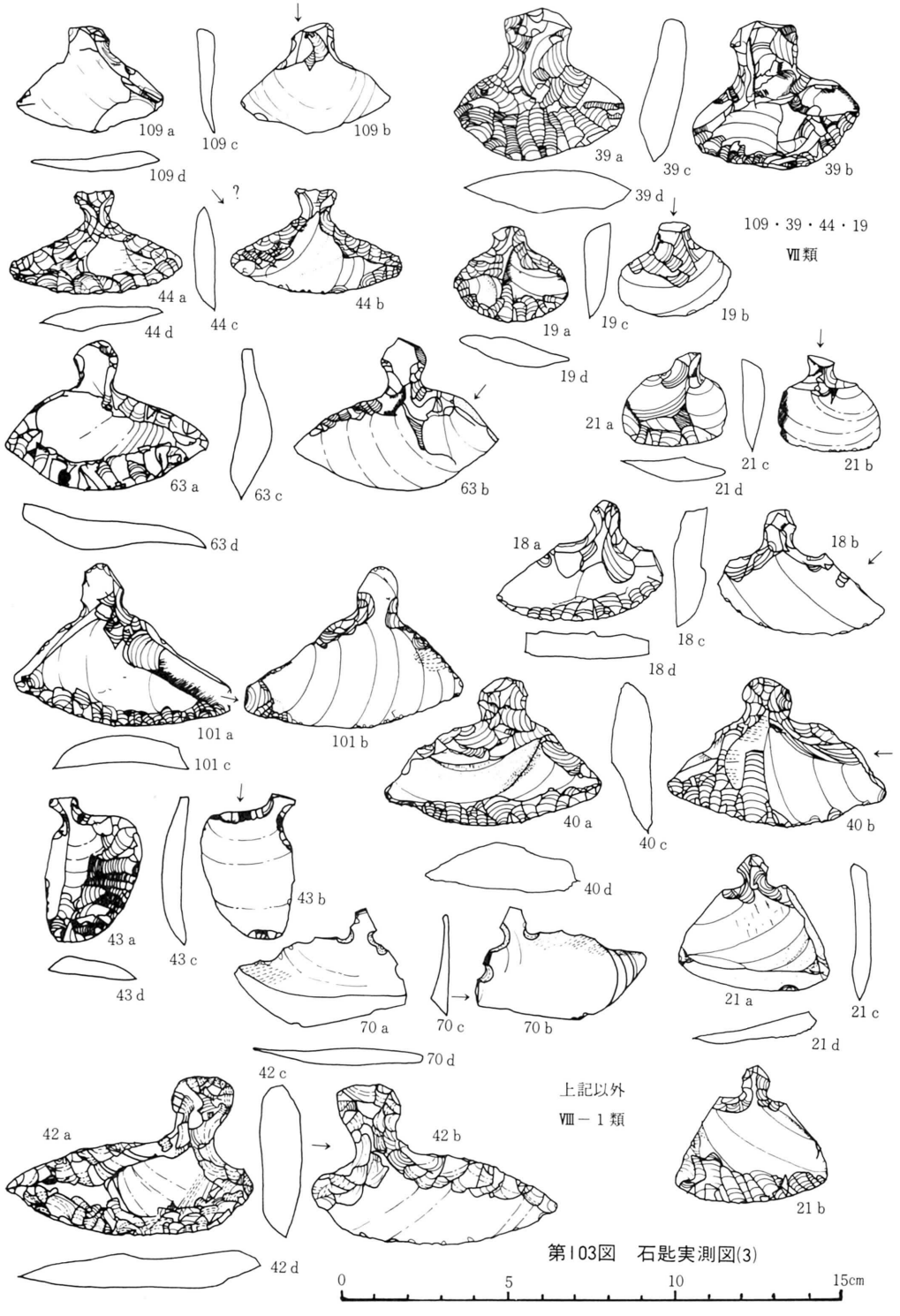


50・8　I 類
47・12　II 〃
その他　III 〃

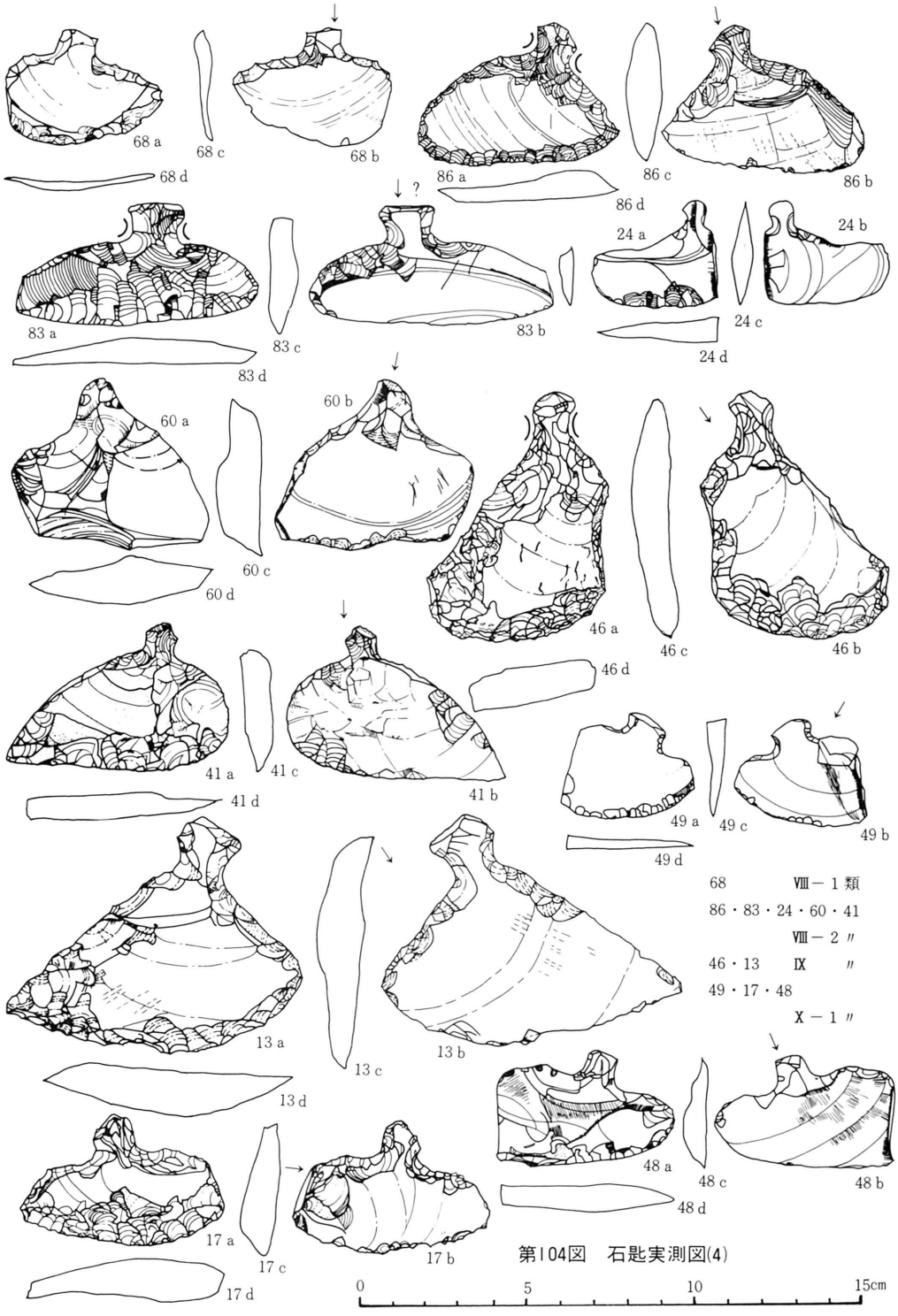
第101図　石匙実測図(1)



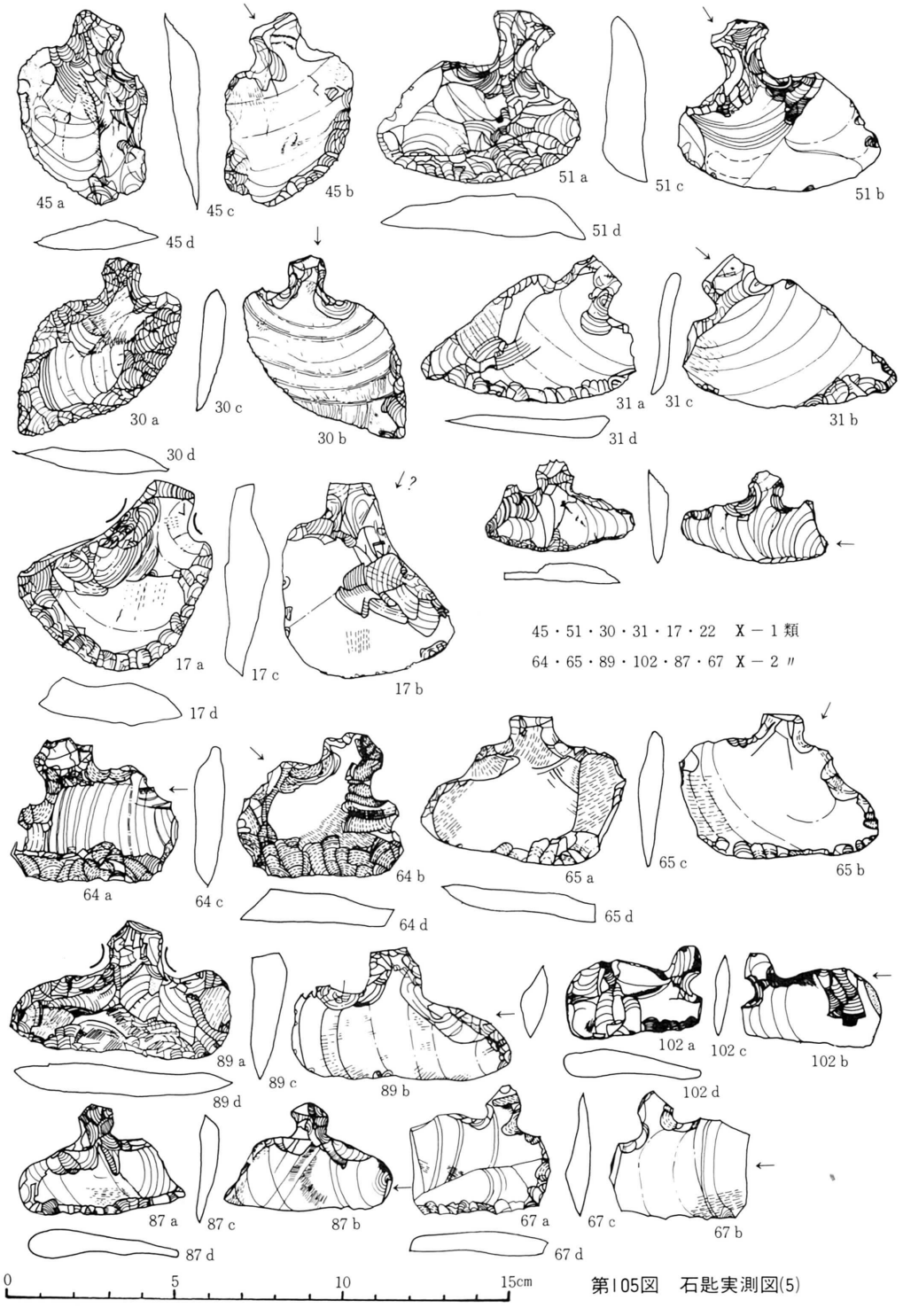
第102図　石匙実測図(2)



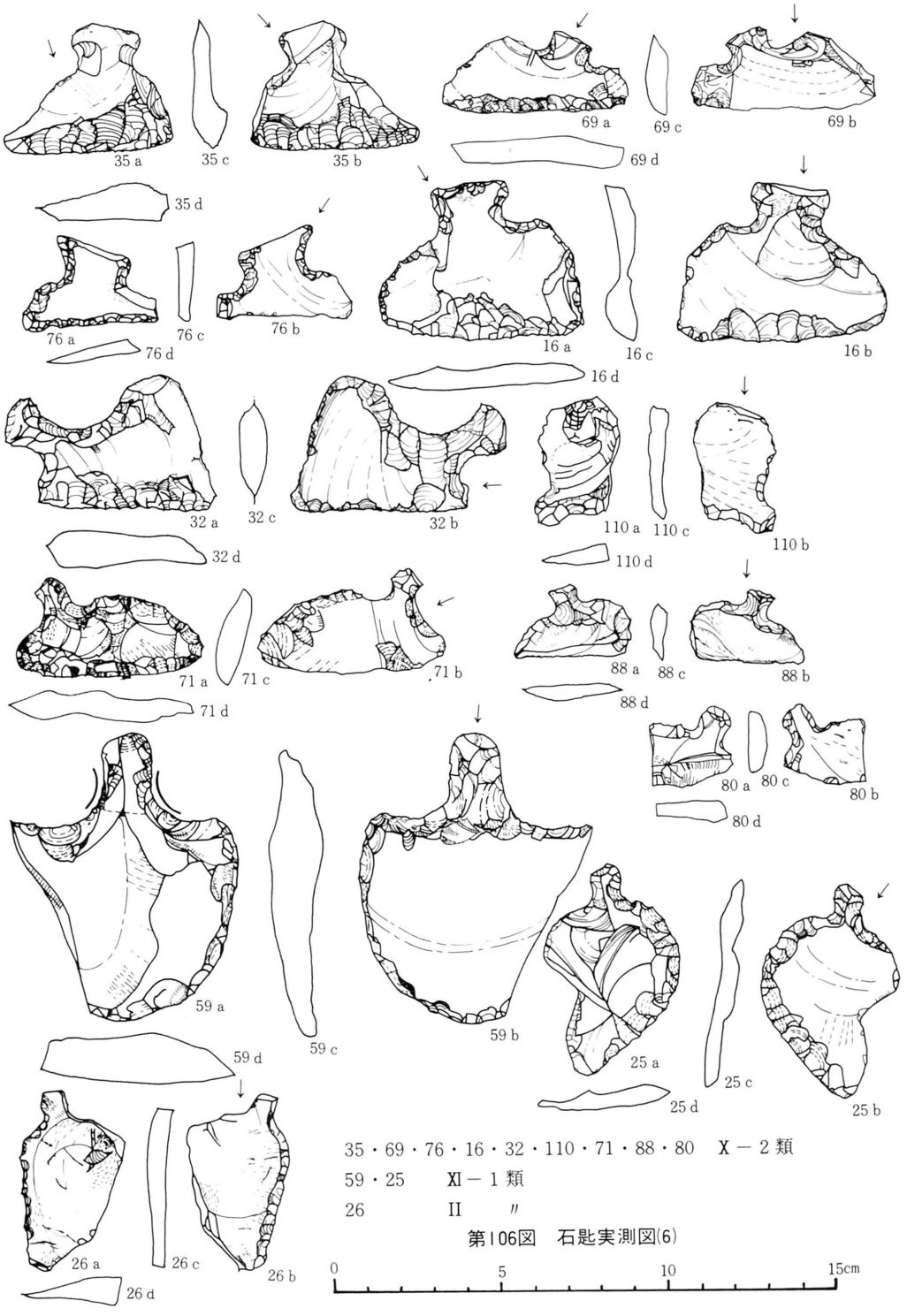
第103図　石匙実測図(3)



第104図　石匙実測図(4)

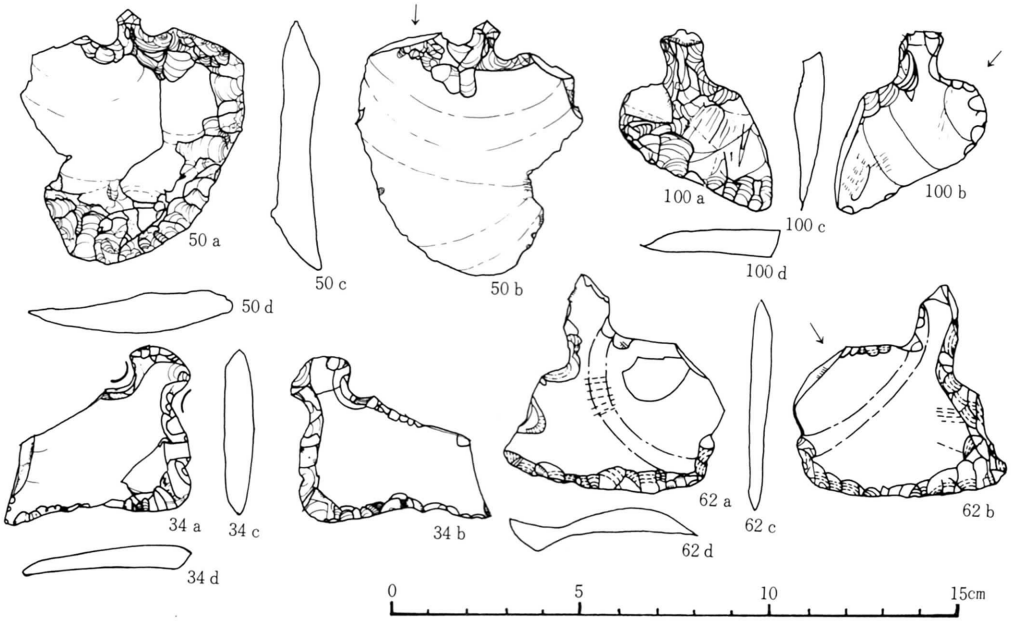


第105図　石匙実測図(5)



35・69・76・16・32・110・71・88・80　X－2類
59・25　XI－1類
26　II　〃

第106図　石匙実測図(6)



50　　XI－1類
100・34・62　XI－2〃

第107図　石匙実測図(7)

h　**掻器**　（第108～110図、図版50）　素材の縁辺の一部に若干の刃部をつくり出したものを仮にこう区分した。これについて若干の観察を試みた（第39表）。それは次のとおりである。

(1)　技法　I　片面加工的、II　両面加工的、の両者がある。これらは個別に扱かうべきかとも思われるが、ここでは一括した。

(2)　形態（手面形）A　長方形など若干長目のもの、B　楕円形、C　不整形の三大別である。

(3)　断面形態　7種の類型を設定した。他と同様、剥離技法のそれに対応する二大別に整理出来るのであろう。

(4)　大きさ　大・中・小の三種ある。

(5)　細破砕痕　刃部に一致とその他の二類型。

(6)　素材の打面　coatingの特徴などである。これらの具体相とその結果は第39表に示した。なおタイプ細分は、(1)･(2)･(4)によるだけで十分と思われ、それに従がって実施した。I：II＝104（38.4%）：167（61.6%）となり、後者が倍近くを占める。

〔Iについて〕　平面形はA：B：C＝21.2%：25.0%：53.8%となり、不定形的なものが多く、若干定形的なものがそれに次ぐ。断面形態はA・B・Cともにイとロがほとんどを占め、三角形に近いものが基本的なることがわかる。刃部形成部位は、(1)・(2)がほとんどを占めており、これは当然であろう。A・B・Cともに、その圧倒的多数は(2)、即ち主要剥離面の反対側

第39表　掻器模式図・集計表

〔技法〕　I 片面加工　II 両面加工　〔刃部形成部位〕　(1)主要剥離面側　(2)主要剥離面以外　(3)(1)と(2) ― a．同一縁辺の表裏　b．異縁辺

〔形態〕　A．長方形的な若干長め、細め　B．惰剰形　C．不整形　〔大きさ〕　a．大　b．中　c．小

〔素材〕 ― 剥片　(イ)　(ロ)　(ハ)　(ニ)　その他　〔細破砕〕　あ．刃部に一致　い．その他

〔打面〕　(1) prepared (& 多く plain)　(2) unprepared　〔coating〕　(1)残　(2)無

タイプ	断面							他	刃部部位				細破砕痕			打面		coating		その他
									(1)	(2)	3 a	3 b	あ	い		(1)	(2)	(1)	(2)	
4 I－A－a	2	2								4			3			1	1	1		粘板岩 2
12 b	3	7		1	1				4	7			12			2	3	6		横長 1
6 c		4		1	1				1	5			6			2		2		〃 4　obsidian 1
22 計	⑤	⑬		②	②				⑤	⑯			㉑	①		⑤	④	⑨		粘板岩②　横長 f ⑤　obsi ①
5 I－B－a	3	1							1	4			5			2	4	4		〃 2
14 b	4	8		1	1				5	8			10	3		9	1	2		〃 8　たて長 2
10 c	2	5		2	1				1	6		1	5	3		3	1	3		〃 1　〃 1
29 計	⑨	⑭		③	③				⑦	⑱		①	⑳	⑥		⑭	⑥	⑨		横長 f ⑪　たて長 f ③
2 I－C－a				1	1					2			2			2				横長 f　たて長 f 2
15 b	3	8		3	1				6	7		2	11	4		8	2	4		〃 4　〃 5
39 c	6	22		5	6				1	37		1	35	4		11	3	2		〃 7　〃 12
56 計	⑨	㉚		⑨	⑧				⑦	㊻		③	㊽	⑧		㉑	⑤	⑥		横長 f ⑪　たて長 f ⑲
104 I 計	23	57		14	13				19	80		4	89	15		40	15	24		〃 ㉗　〃 ㉒
4 II－A－a		3		1							2	2	3			2	2	1		横長 f 1　たて長 f 3
24 b		7	4	2	2	8	1				19	5	23	1		3	4	5		〃 3　〃 9
7 c		2	2	1	1	1					6	1	3	4		1				〃 1
35 計		⑫	⑥	④	③	⑨	①				㉗	⑧	㉙	⑤		⑥	⑥	⑥		〃 ④　〃 ⑬
5 II－B－a	1	3		1							3	2	5			4		1		〃 2　〃 2
11 b	2	4	2	1	1	1					8	3	11			6		3		〃 3　〃 3
18 c	1	7	2	1	1	6					10	7	13	4		4				〃 2　〃 4
34 計	④	⑭	④	③	②	⑦					㉑	⑫	㉙	④		⑭		④		〃 ⑦　〃 ⑨
II－C－a																				
b																				
㊽ c	11	40	5	8	6	28					74	24	77	20		6	1	6		〃 10　〃 10
計	⑪	㊵	⑤	⑧	⑥	㉘					㉔	㉔	㊼	⑳		⑥	①	⑥		〃 ⑩　〃 ⑩
167 II 計	15	66	15	15	11	14	1				122	44	135	29		26	7	1		〃 ㉑　〃 ㉜
273 I ＋ II	38	123	15	29	24	44	1		19	80	122	48	224	44		66	22	40		48　54

（背面）に刃部がつくり出されている。

打面を残す側が全体の半数程度あるが、その中では、(1)が(2)の倍程度の率で存在する。これはcoreの部分でも述べたが、この期の剥離技法にいわゆる調整打面をつくり出すものが目立つ傾向にあるらしいことの反映ともいえよう。

coatingを残す例が23%程度ある。これは少ないとはいえないであろう。これはこの種石器が刃部形成のみを第一義としたもっとも実質的利器であることを考慮すると当然ともいえるが、観点を変えると、concaved scraperでも述べるが如く、一種のblunting的性格を想定することも出来る。その場合はある種の定形性をもつことになろう。

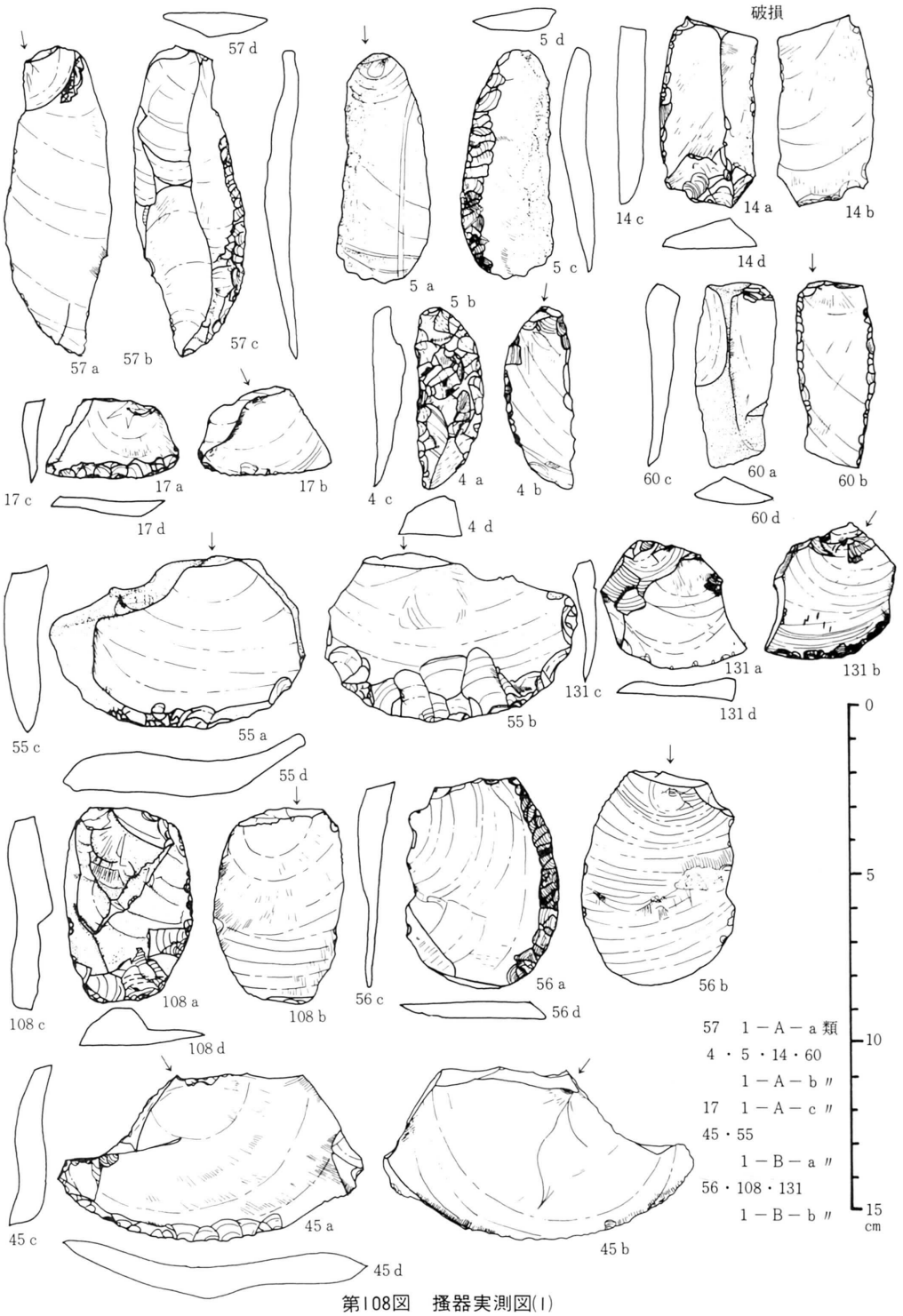
素材の形態は、縦長・横長が同数程度存在する。

〔IIについて〕　A：B：C＝20.6%：21.8%：57.6%となり、C（とりわけCの小形のもの）が主体をなし、他がこれに次ぐ。先と同様である。断面形態は、三角形の変種と菱形の変種の両者が大略同率で存在する。したがって素材の形態に関係なく両面加工的剥離を加えたこととなる。刃部形成部位は当然(3)のみであるが、A・B・Cともに(3)－aが70%前後を占め、同一縁辺を表裏両面から加撃し刃部を付すものが一般的である。coating残存例はIに比し少ない。これが何を意味するかは不明である。その他はIに共通する。

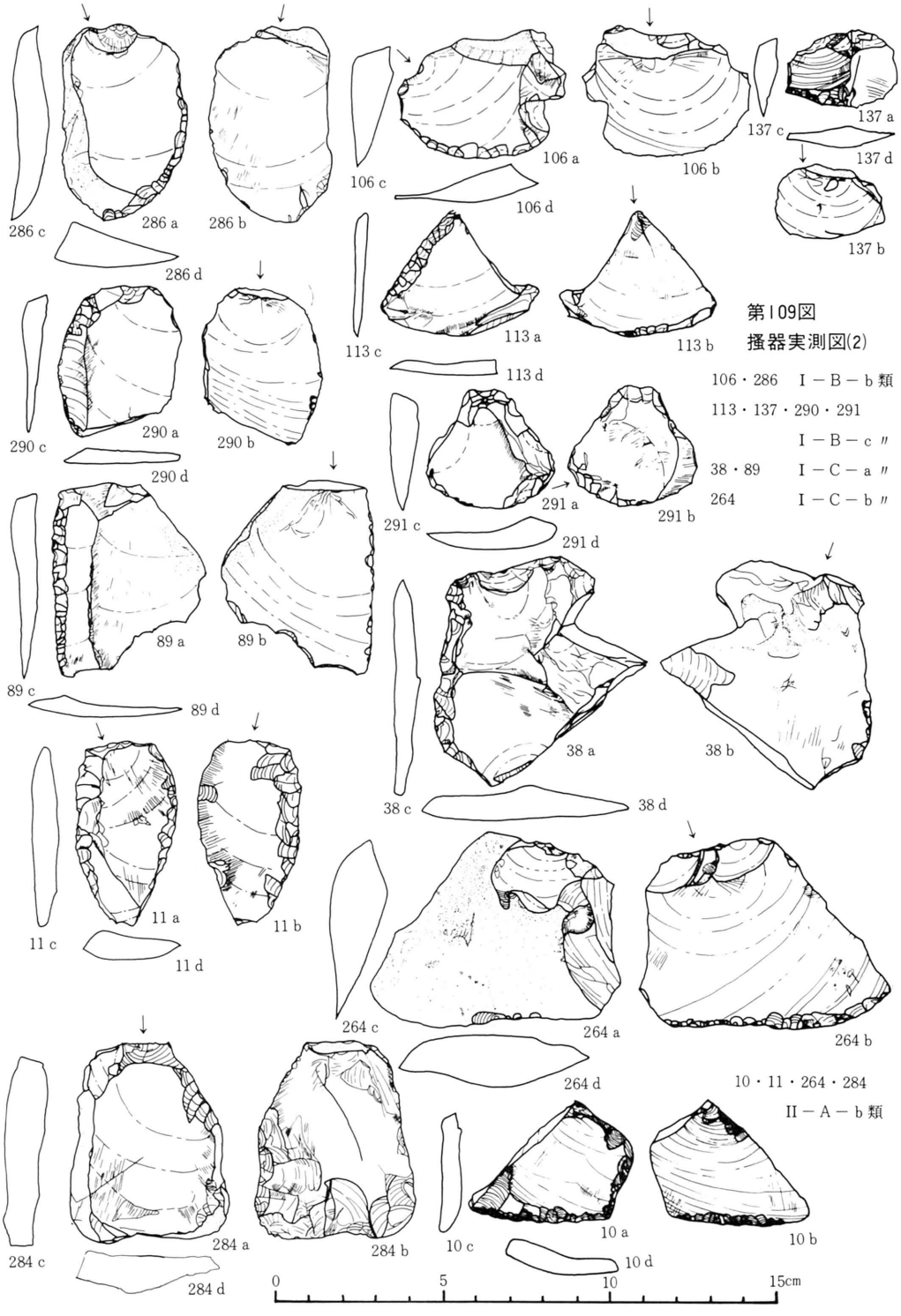
大略以上のようになる。これは小刀などの掻器・削器と仲間とみなされてよいものと思われる。　石材は以下のとおりである。I・IIに顕著な異同が見られる。

第40表　掻器石材一覧

素材名	I		II		計	
	数	比率	数	比率	数	比率
珪質凝灰岩	21	19.1	5	2.8	26	9.0
珪質泥岩	24	21.8	37	20.6	61	21.0
泥質細粒凝灰岩	11	10.0			11	3.8
凝灰質硬質泥岩	25	22.7			25	8.6
硬質泥岩	5	4.5	23	12.8	28	9.7
黒耀岩	1	0.9			1	0.3
フリント質凝灰岩	8	7.3	13	7.2	21	7.2
珪　　岩	1	0.9			1	0.3
珪質輝緑凝灰岩	1	0.9			1	0.3
輝緑凝灰岩	7	6.4	19	10.6	26	9.0
粘板岩ホルンフェルス	6	5.5			6	2.1
チャート質輝緑凝灰岩			1	0.6	1	0.3
松脂岩			2	1.1	2	0.7
凝灰質泥岩			18	10.0	18	6.2
硬質凝灰質泥岩			16	8.9	16	5.5
珪質細粒凝灰岩			23	12.8	23	7.9
流紋岩			1	0.6	1	0.3
玉　　髄			5	2.8	5	1.7
粘板岩			2	1.1	2	0.7
チャート			9	5.0	9	3.1
硬砂岩			1	0.6	1	0.3
赤色めのう			5	2.8	5	1.7
計	110		180		290	



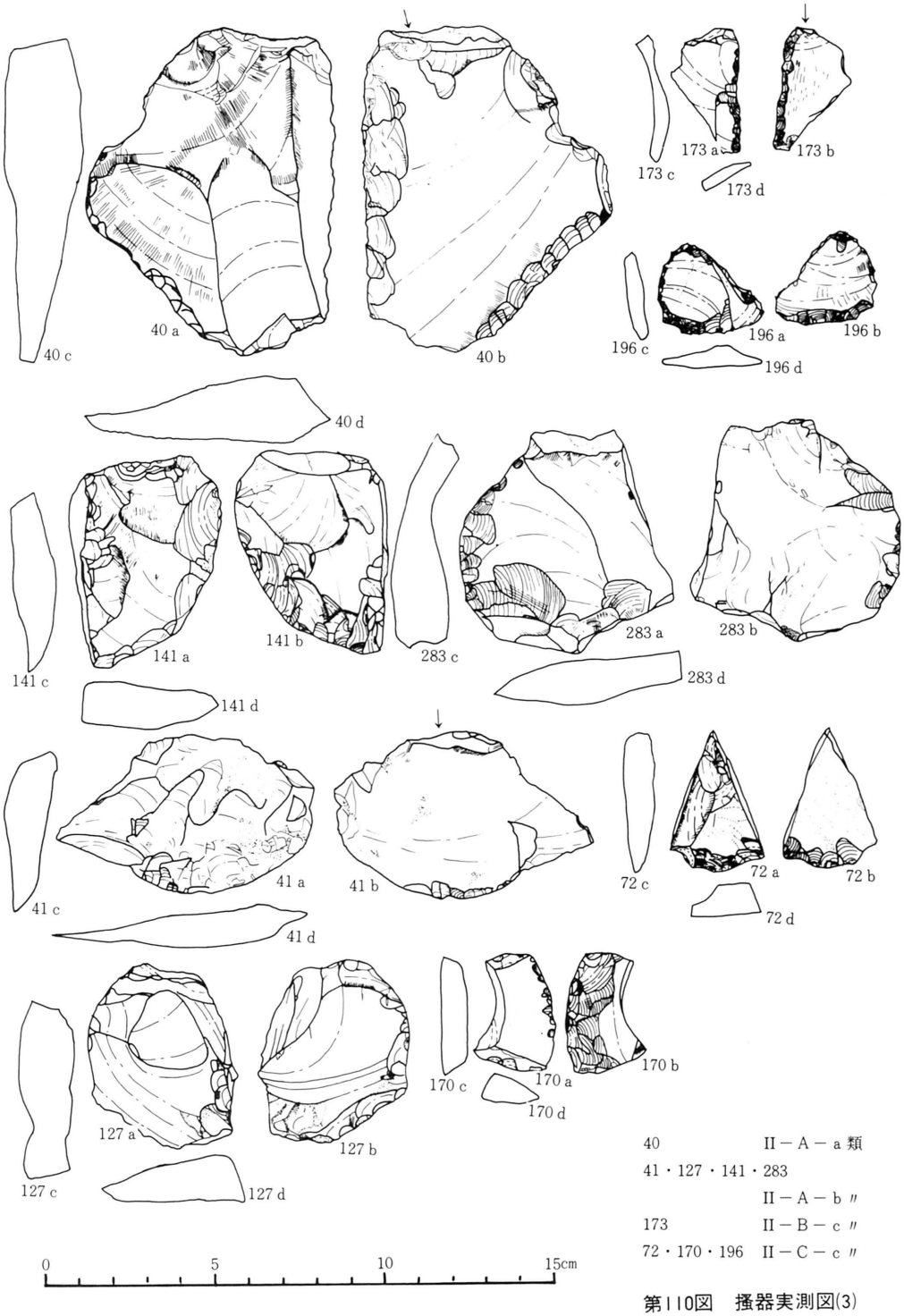
第108図　掻器実測図(1)



第109図
掻器実測図(2)

106・286　I－B－b類
113・137・290・291
I－B－c 〃
38・89　I－C－a 〃
264　I－C－b 〃

10・11・264・284
II－A－b類



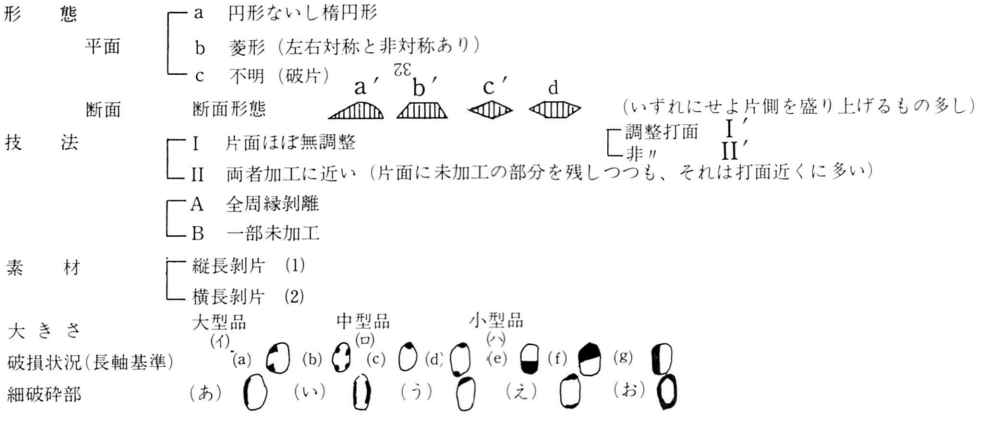
40　　II－A－a 類
41・127・141・283
　　II－A－b 〃
173　　II－B－c 〃
72・170・196　II－C－c 〃

第110図　掻器実測図(3)

i　**楕円形掻器**　（第 111～114 図、図版 50・51）　適切な名称を知らないので仮にこう呼ぶ。片面が平担、他面が極端に盛り上がる不均整な断面形態を有し、平面形態にはかなりの定形性を示し、周縁の広範な部分に剥離が行なわれるものである。そのもっとも定形性の強いものは両端が尖り、菱形を呈すものである。その稜線部に、blunting などではない細破砕痕をもつものが多い。それは使用痕と思われる。この点からこの種資料、とりわけ両端の尖るものも刺突具とは見做さなかった。しかし、これらを「鏃の未製品」とする観点もなお説得力をもっている（後述）。したがって、組成比率を検討する場合（別項）においては、これを掻器と刺突具の両者に編入した場合の数字をそれぞれ示した。

これらに対し、上の如き観点からする観察を試み、その結果は第 42 表のようになる。それに

第 41 表　楕円形掻器模式図



よると

(1)　平面形態、a　円形乃至楕円形、b　菱形（右左相称と非相称あり）、c　破片のため不明、の三類型、とりわけ a・b の二類型がある。a：b＝36.7％：63.3％の比率で存在し、b が圧倒的に多いが、a も無視しえない。したがって、b を主としながら a・b の併存を常態と考えておく。

(2)　断面形態　三角形の変種と見做せる(a′)･(b′)と、菱形のそれたる(c′)･(d)に二大別出来る。しかし、いずれにしても片面を他面より高く盛り上げる形状に仕上げるものが多い特徴をもつ。

(3)　技法　I　片面加工的なものと、II 両面加工に近いものに二大別でき、さらに、全周縁加工のものと一部未加工のままに残すもの、に細別出来る。断面形態 a・b と I には当然ながら対応関係がある。II にはすべての形態が対応するが、c がもっとも多い。

剥離方法は表裏ともに似るが、一部に未加工面を残すものが全面加工のものの約 2 倍存在する。これはこの種のものが未製品である可能性を示すとともに、意図的な残存（技法）でもある可能性を示すものである。

第 42 表　楕円形掻器集計表

	断面				打面			範囲			素材			大きさ			破損								破砕						
	a′	b′	c′	d′	I′	II′	不明	A	B	不明	1	2	不明	イ	ロ	ハ	完全	a	b	c	d	e	f	g	あ	い	う	え	お	不明	l
I－a 大		1						1					1	1			1								1						1
I－a 中	1	4			3		2	1	3	1	3		2		5		3					1		1		1					5
I－b 大	2	5			2	2	3	5	2		3	1	3	7			5					1		1	2	4			1		7
中	2	6			2	1	5	1	7		3	3	2		8		7	1								2			6		8
小	8	4			5	2	5	2	9	1	6	3	3			12	7		1	2				1	8	1		1	2		12
								表 裏	表 裏																						
II－a 大		3	1		1	1	2	1 0	3 4			1	3	4			2					2							4		4
中	7	8	30	16	18	5	38	16 14	56 58		22	11	29		61		48	4		1		6	2	1	5	12		1	44		61
小	11	6	35	14	15	9	42	19 17	46 47		20	11	35			66	57	1			2	3	3		5	10			49		66
II－b 大	1		9	5	8		7	2 6	12 9			8	7	15			13				1			1		2		1	11	1	15
中	18	6	79	13	19	2	95	56 47	59 68		20	48	48		117		82	5		5	1	14	5	3	3	11	1		84	15	116
小	6	7	55	19	18	3	73	41 39	45 47		12	43	39			95	63	2	1	7		6	5	2	1	13			64	12	89
	58	50	209	67	91	25	272	135 123	221 233	2	89	129	172	27	191	173	288	13	2	15	4	33	15	10	25	56	1	3	265	28	385

(4) 打面・素材、(1) 縦長、(2) 横長、(3) 不明品とあるが、(1)は少ない。不明は横長である可能性がある。バルブを思わせる盛り上がり部をもつ例も多い。打面は何らかの形での調整打面であることが基本らしい。打面不明は調整剥離のためである。plain platform を残すものが少なからずある。これは意図的な残存の可能性と、未製品なることの可能性の両者がある。後者の立場に立つと、打面を残さないものは「完成品」的な色彩が強いことになる。

(5) 大きさ　大・中・小の三種あるが、中・小型が主体をなす。

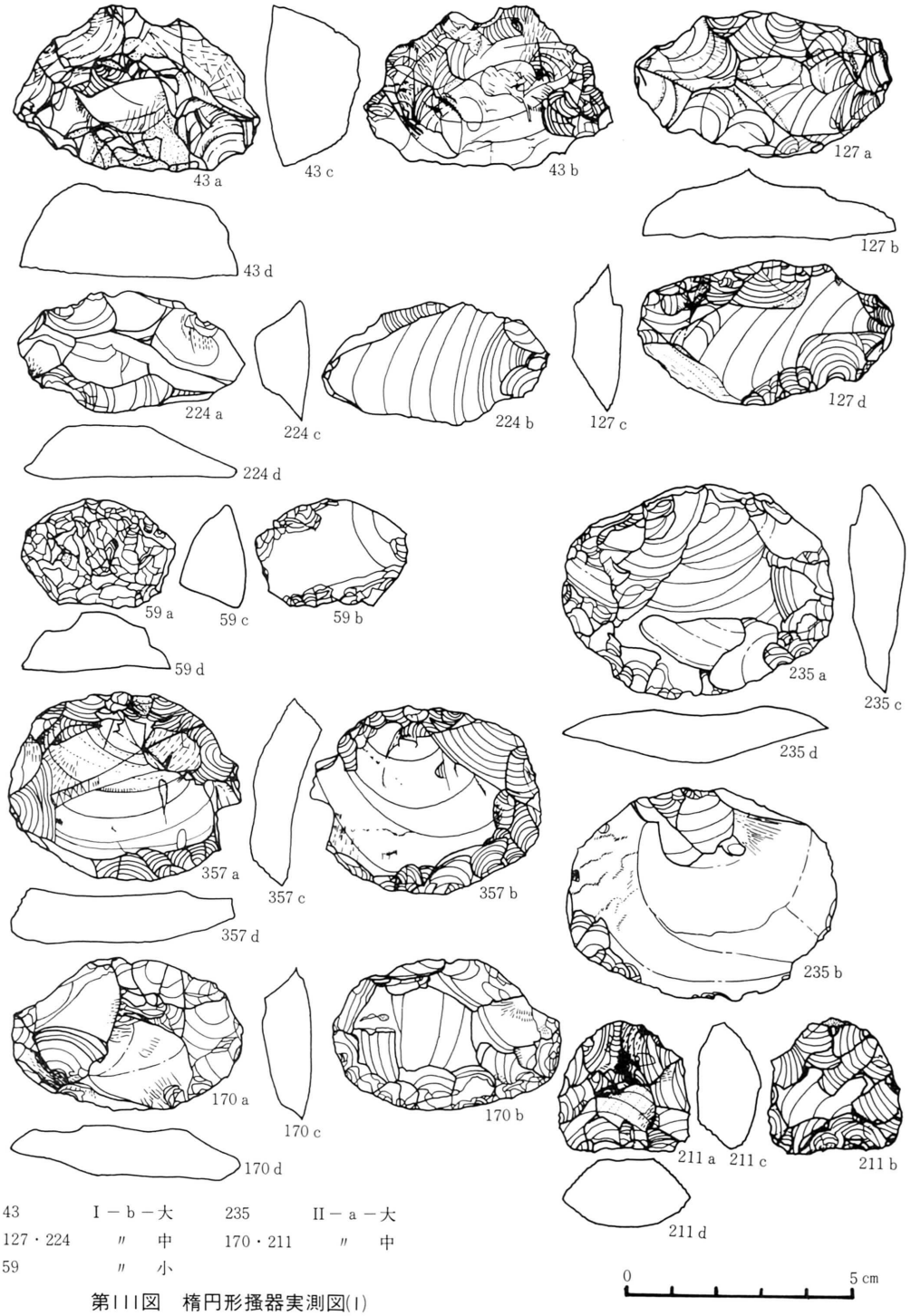
(6) 破損状況　完全品を含めて8類型があるが、完全品が多く、また、c・e・f・gが多いと思われる。このような破損は各種の石器に共通する。f・gの如き破損がいかなる状況下に生じうるかは何らかの方法で確認すべきである（材質の検討とともに）。

(7) 細破砕痕の残存部位には5類型があるが、(お)が圧倒的に多く、(い)・(あ)などが少数で後続する。このように全周に破砕痕（使用痕と思われる）を有するものが多く存在することからこの石器に刺突具以外の用途を想定したものである。ただこれが blunting と見做されるべきならば、その形態からして刺突具に含めるにやぶさかではない。

石材は以下のとおりである。I～II－b へと選択のが拡大していく如くである。

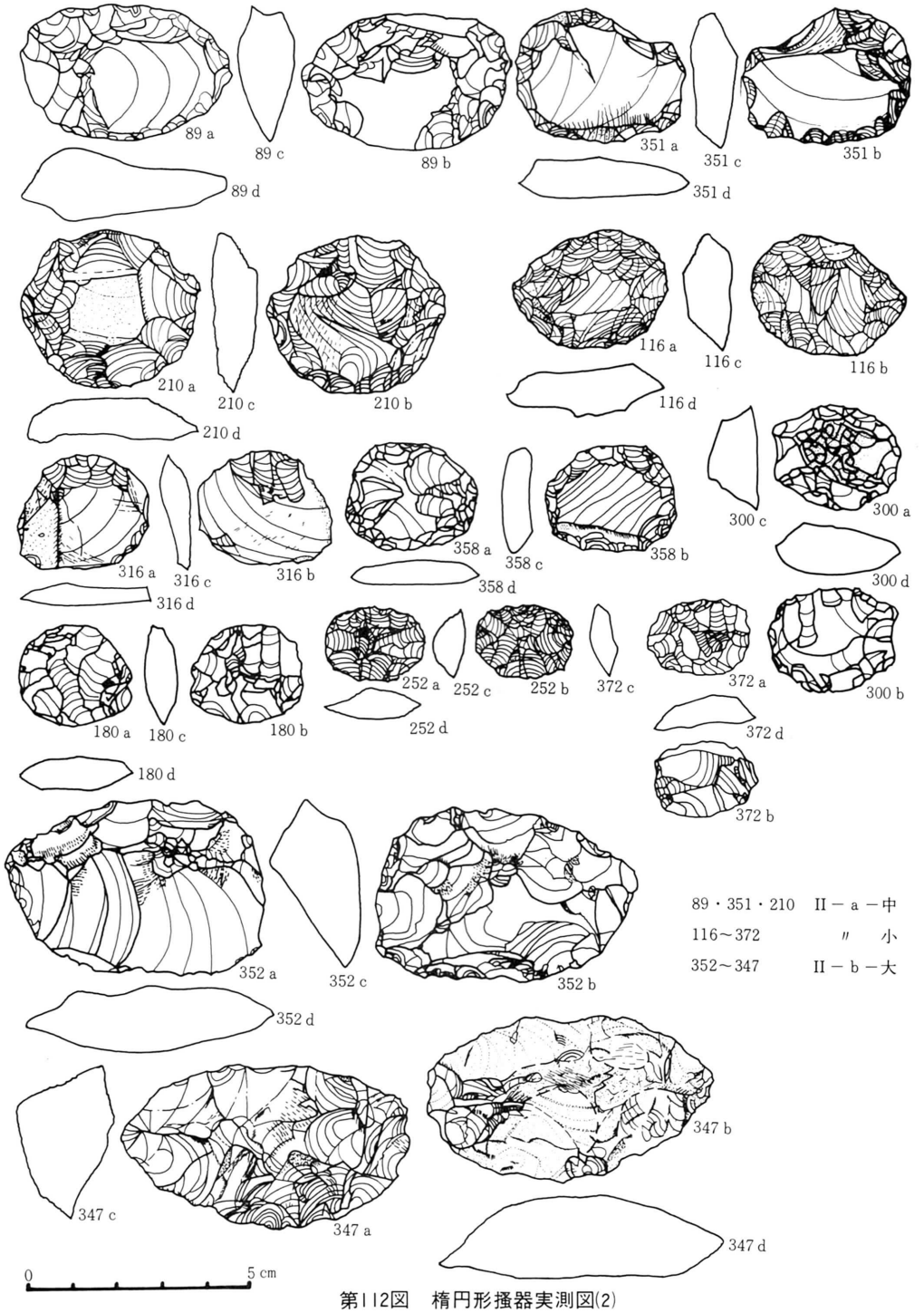
材　質　名	I		II－a		II－b		計	
流紋岩	2	5.9	11	7.1			13	3.2
凝灰質珪質泥岩	11	32.4	51	33.1	29	12.9	91	22.1
チャート質粘板岩	1	2.9	6	3.9			7	1.7
輝緑凝灰岩	8	23.5	11	7.1	6	2.7	25	6.1
珪質凝灰岩	2	5.9	2	1.3	23	10.3	27	6.6
チャート	4	11.8	22	14.3	45	20.1	71	7.2
硬質泥岩	2	5.9	9	5.8	10	4.5	21	5.1
珪質泥岩	2	5.9	1	0.6	21	9.4	24	5.8
めのう	1	2.9	13	8.4			14	3.4
蛇紋岩	1	2.9					1	0.2
チャート質輝緑凝灰岩			2	1.3	21	9.4	23	5.6
フリント質凝灰岩			19	12.3	9	4.0	28	6.8
蛋白石			1	0.6			1	0.2
鉄石英			2	1.3	1	0.4	3	0.7
輝緑凝灰岩質チャート			2	1.3			2	0.5
珪質粘板岩			2	1.3			2	0.5
硬質凝灰質泥岩					25	11.2	25	6.1
フリント質珪質凝灰岩					11	4.9	11	2.7
泥質凝灰岩					12	5.4	12	2.9
珪質輝緑凝灰岩					3	1.3	3	0.7
泥質輝緑凝灰岩					5	2.2	5	1.2
玉　髄					3	1.3	3	0.7
計	34		154		224		412	

第43表　楕円形掻器石材一覧



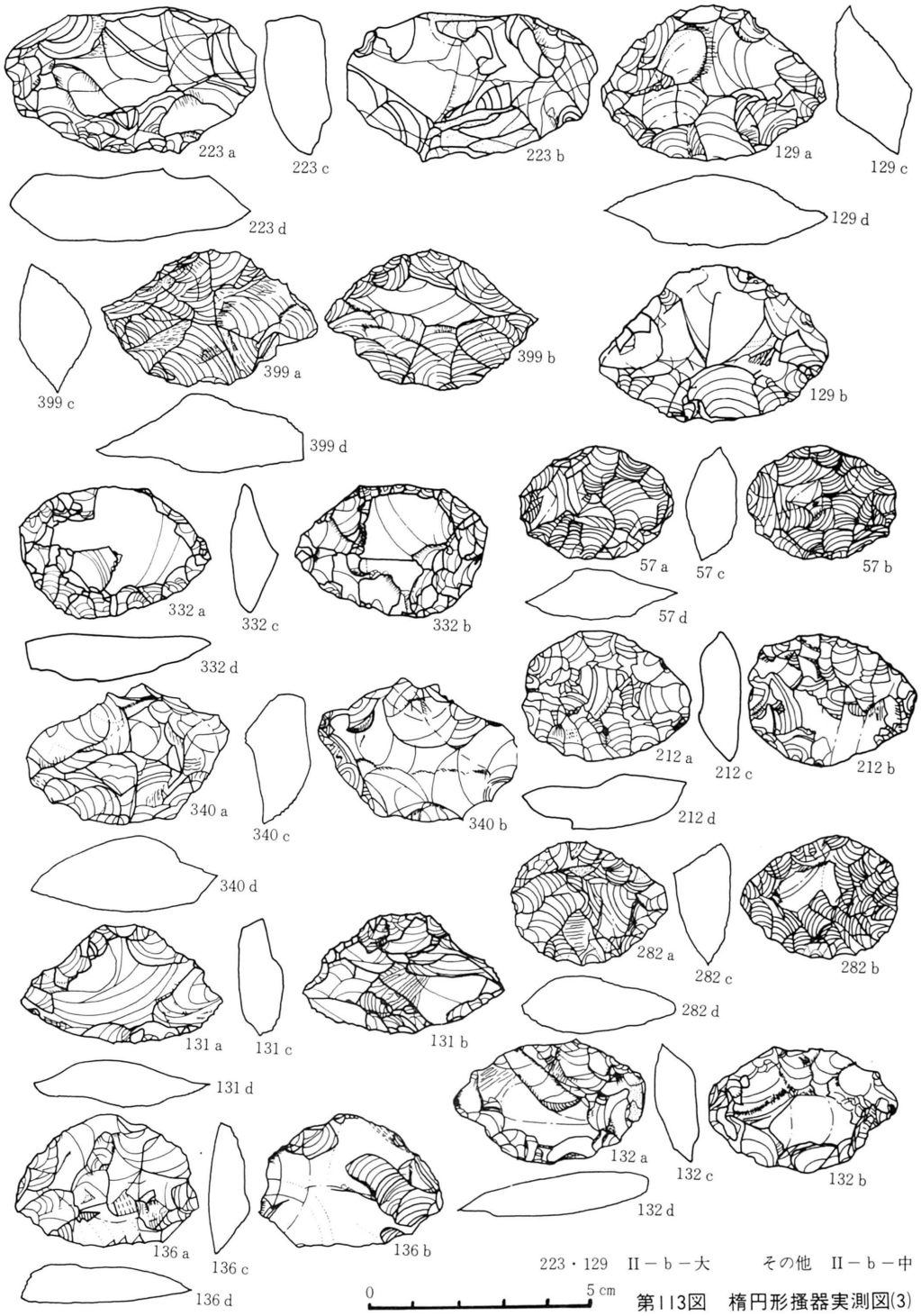
43	I－b－大	235	II－a－大
127・224	〃　中	170・211	〃　中
59	〃　小		

第111図　楕円形掻器実測図(1)

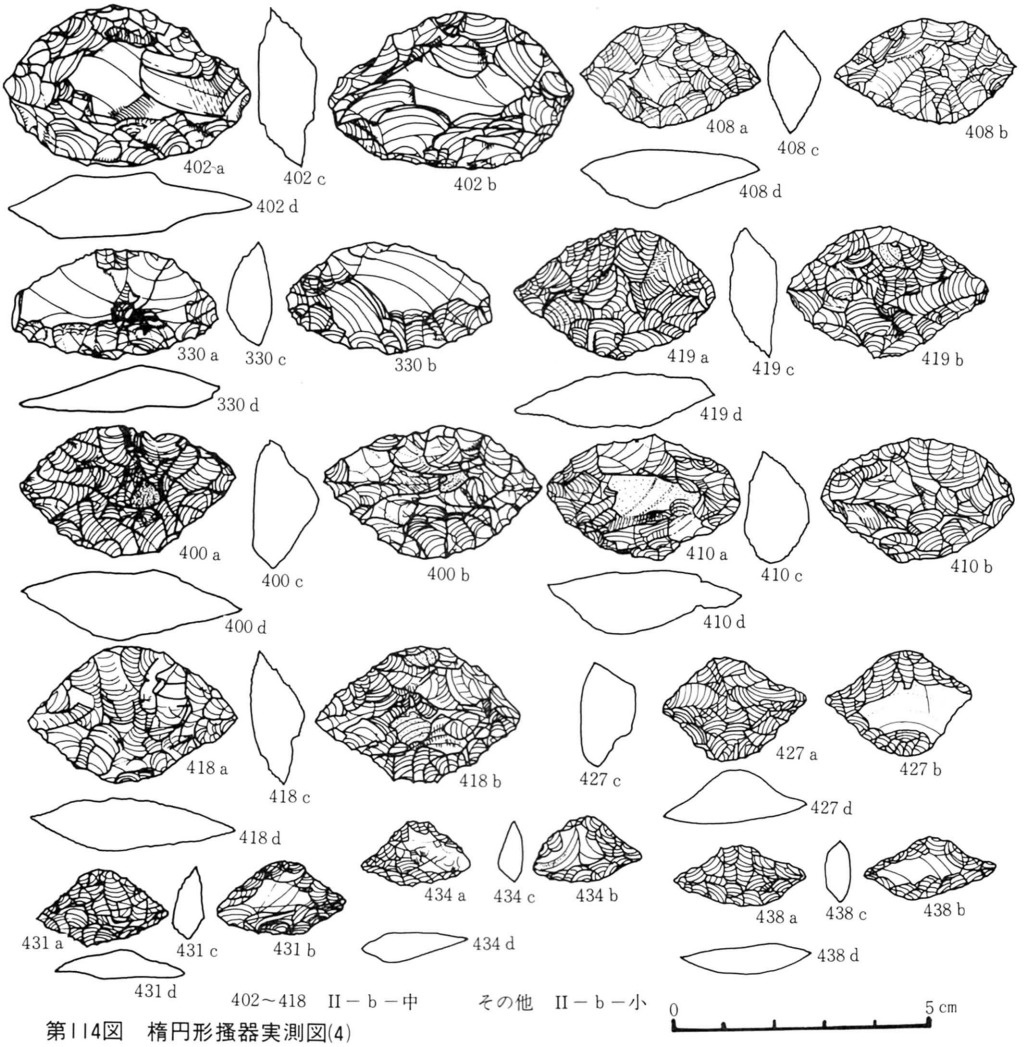


89・351・210　II－a－中
116～372　〃　小
352～347　II－b－大

第112図　楕円形掻器実測図(2)



第113図　楕円形掻器実測図(3)



第114図　楕円形掻器実測図(4)

j　**湾入部ある掻器**（第115～116図）　素材の一辺に凹部をつくり、そこに刃部形成と思われる剥離を施したものを仮にこう呼ぶ。道具の「柄」などの成形に用いられたものと思われる。この種遺物について、第44表の項目の観察を行なった。

第44表　湾入部ある掻器模式図

基本的特徴　素材縁辺に凹部を有し、そこに刃部様のものが付される

形　　態　若干長めの印象を与えるものが基本的形態
Ⓐ素材の長軸縁辺に刃部が付されるもの　Ⓑ　短軸〃　Ⓒ　三角形に近いもの

使用素材　Ⓘ剥片利用　ⅡⒾ剥片以外のcoreなど利用　ⓐ　coating残存　ⓑ　coating無し

素材断面形（刃部を通るprofile）(1)　(2)　(3)　(4)　(5)　(6)

刃部加工　㋑片面加工　㋺両面加工

細破砕部位　㋐刃部に一致　㋑刃部＋その他の縁片　㋒その他のみ

(1)　基本的形態　やや長目の印衆を与えるものが多い。具体的にはA　素材の長軸縁辺に刃部が付されるもの、B　短軸方向に付されるもの、C　三角形に近いものの三種がある。

(2)　使用素材　I　剥片利用のもの、II　剥片以外のcoreに近いものなどを利用したもの。さらに、ⓐ　素材にcoatingが残存するもの、ⓑ　coatingの見られないもの、に区別される。

(3)　素材断面形態（刃部を通る線での形態）　模式図の如き6類型を認めた。

(4)　刃部形成技法　イ　片面加工的なもの、ロ　両面加工的なもの。

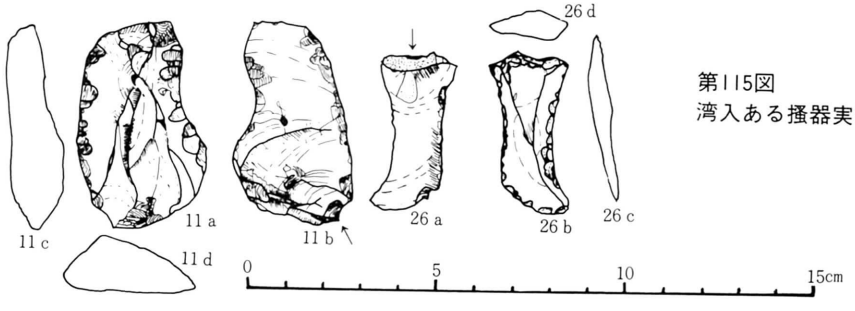
(5)　細破砕痕残存部位　㋐　刃部に一致、㋑　刃部＋その他の縁辺、㋒　その他部位

これらをまとめると次のようになる。(1)については、A・71%、B・16%、C・13%とAが圧倒的多数を占め、これが基本的形態をなそう。(2)については、Ⅰa－29%、Ⅰb 61%、Ⅱb－9.7%となり、Ⅰの利用が基本型であり、coatingの残存は両様が存在することがうかがわれる。(3)については、(1)･(2)で71%、(3)～(6)が29%となり、三角形と菱形の二大ヴァリエイションが存在するものと解しうる。(4)はイが71%、ロが29%と両様存在するが、前者が基本形と見做しうる。(5)は(あ)・(い)がすべてであり、すべてが使用に供された可能性を示している。

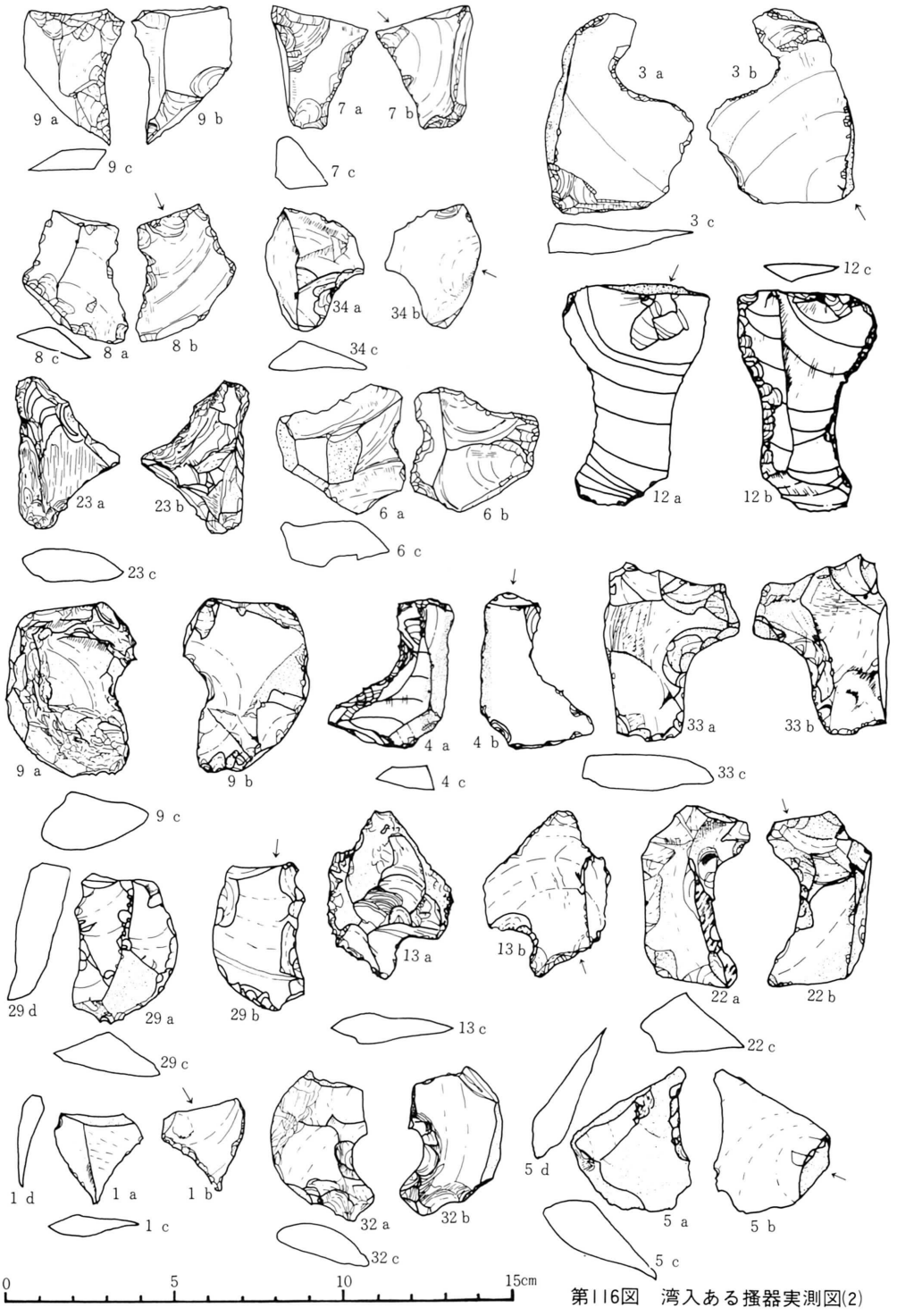
以上をまとめると、この種石器は、剥片を主に利用し、その素材の長辺に刃部を形成する。素材断面形はほぼ三角形のカテゴリーにおさまるものが多く、刃部の対辺にcoatingを残し、しかも三角形の一頂点がcoatingの一部に合致する例が多い。この　coating　と最厚部の一致現衆は、この石器使用上の有効化をはかる意図の現われかと思われる。つまり、coatingは刃攪し(blunting) 的な意味があるとも見える。刃部形成は片面加工によるものが多く、その面は背面であることが多い。

以上のように、湾入部ある掻器としたものにも、それなりの「定形性」を認めることが出来よう。したがって広義の掻器に含まれるが、一応分離して扱かうべき種類とも思われる。

石材は第45表のとおりである。



第115図
湾入ある掻器実測図(1)



第116図　湾入ある掻器実測図(2)

k　**石篦状石器**　（第117～118図、図版47）　いわゆる石篦状といわれるものを集めた。広義の掻器の中に含められるべきものであろう。ただし、大型品は、斧・片刃石器・両刃石器などと同様の機能を想定されるべきかもしれない。したがって、組成比に若干の修正を施こすべき必要もあろう。これらについて模式図の如き観察を加え、その結果を第46表に示した。

平面形態は上端部の尖るもの（Ⅰ）と平担になるもの（Ⅱ）の二種存在する。ただし後者には〝台形〟的なものと〝長方形〟に近いものの二種を一括してある。Ⅰ・Ⅱがほぼ同率で存在する。

大きさは、四種の類型がほぼ平均的に存在するが、cがもっとも多い。dが最少である。

横断面形態は(1)とそれ以外のものに二大別出来ると思われる。(1)には技法(A)が、それ以外には(B)が対応すると考えられるからである。(4)にB－1が、(2)・(3)・(5)・(6)にB－2、3が対応することもまた多い。(4)がそれ程多くない点が特徴ともいえよう。

縦断面形態は、それが判明した資料による比率をみると、(1)・(2)のいわゆる片刃的なもの91.3%、(3)の両刃的なもの8.7%と、前者が圧倒的に多い。(a)のみを見れば両者がほぼ同率をなすが、それ以外では前二者が主体をなすか、あるいは後者が存在しない。この点からすると(a)と(b)・(c)・(d)とはその用途を異にしていたと考えるべきかもしれない。これは既述の大型品についてのコメントとも関連するものであり、この種の大型品を〝打製石斧的〟なものと見做すべき根拠としてもよいと思われる。

技法は、A：B＝16.4%：83.6%とbi－facial的なものが圧倒的に多い。後者の中では(2)＋(3)＝70.9%となり、trimming的処理に留める点が若干目立つとも思われる。この事実は早期の技法に比較すればかなり大きな相違である。早期は両面ともに全面剥離に近いものが常態である。後述の細破砕痕の存在などからして、trimming的なものに未製品的性格を強いて求める必要は無かろう。

素材をみると、(1)：(2)：(3)＝29.0：12.7：58.2(%)となり(3)がもっとも多い。しかし、(2)よりは(1)が多い事実を拡大解釈すれば、(1)が主体であったとすることも出来よう。

打面の調整状況は(2)が1.8%にしかすぎないことから、prepaed platformが一般的であったとしてさしつかえない。これはcoreの後元例から見ても矛盾ない。

破損状況は完全品が56.4%を占め、かなり多い特徴をもつ。これは材質もさることながら完全品の形で残りうる使用状況下にあったことの反映とすることも出来る。(1)＋(2)＝40.9%、(3)～(5)＝36.0%、(6)～(8)＝24.0%の比率で存在し、それぞれ平均的な様相を示しているといえる。(1)・(2)の先端部関連と、それ以外の側縁部関連のものの二種に区分すれば、両者がほぼ同比率となる。後者の存在がこの種石器の側縁も使用に供された可能性を示すものである。

細破砕痕はかなり分散するが、(c)・(g)・(f)・(b)などが若干多いと思われる。これらからすれば周縁各部が平均的に用いられたと考えてよいと思われる。ただし(f)・(g)の如く、一部縁辺が

第46表　石筬状石器模式図・集計表

〔平面形〕I　II

〔大きさ〕a. 大　10㎝以上　b. 7～9㎝前後　c. 6㎝前後　d. 5㎝前後とそれ以下
ただし、(a)大としたものは、斧 choppers, chopping tools などと同様の用途を考えるべきではあろう

〔横断面〕(1)　(2)　(3)　(4)　(5)　(6)

〔縦断面〕(1)（片刃）　(2)（若干片刃）　(3)（両刃）　(4)不明（破片）

〔技法〕(A) uni-facial　(B) bi-facial　(1)両面全面加工　(2)片面 trmming 的　(3)両面 triming 的

〔素材〕(1)縦長 flahe, (2)横長 flake　(3)不明　〔打面〕(1)prepared platform　(2)unprepared platfyrm　(3)(1)のうち plain platform　(4)不明

〔破損〕(1)　(2)　(3)　(4)　(5)　(6)　(7)　(8)　(9)　完

〔破砕部〕(a)　(b)　(c)　(d)　(e)　(f)　(g)

	a	b	c	d	
	9.1	7 12.7	9 16.4	4 7.3	
II	8 14.5	6 10.9	11 20.0	5 9.1	30 54.5
計	13 23.6	53 23.6	20 36.4	9 16.4	㊾

タイプ	横断面 1	2	3	4	5	6	縦断面 1	2	3	不明	技法 uni A	B(1)	B(2)	B(3)	素材 (1)	(2)	(3)	打面 (1)	(2)	(3)	(4)	破損 (1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	完	破砕 a	b	c	d	e	f	g	不明	その他
⑤L－a		1	2	1	1		1		1	3		1	3	1			5				5					3					2			1	1		3			◇片面 flat
⑦b	1	1	2		3		2	3		2	1			6	1		6				7					2		1			4			6					1	未3
⑨c	1		3		5		6	3			2		1	6	1	5	3	2		2	7	2						3			5	2	1	3			3			
④d	1		1	1	1			4				2		2			4				4										4			2			2			
㊾小計	③	②	⑧	②	㊾		⑨ 36.0	㊾ 40.0	① 4.0	⑤ 20.0	③ 12.0	③ 12.0	④ 16.0	㊾ 60.0	② 8.0	⑤ 20.0	㊾ 72.0	② 8.0		② 92.0	㊾	② 18.2			⑤ 45.5		④ 36.4				㊾ 60.0	② 8.0	① 4.0	㊾ 48.0	① 4.0		⑧ 32.0		① 4.0	未③ ㊾
																															㊾									
⑧II－a	3	1	1	1	1	1	3		2	3	3			5	5		3	3		3	5		3			3					2	1	4		1			2	
⑥b		1	1	3	1		1	3	1	1		1	3	2	2	1	3	1	1	1	4		1			1					4		2	1				2	1	◇片面 flat 未1
⑪c	2	3	3		3		6	5			3		4	4	6	1	4	5		5	6		2					1			8	1	1	1		1	1	6		未2
⑤d		2		4	3		1	4				3	1	1	1		4	1		1	4		2				1				2			1				3	1	
㊾小計	⑤	⑦	⑤	⑥	⑥	①	㊾ 36.7	㊾ 40.0	③ 10.0	④ 13.3	⑥ 20.0	④ 13.3	⑧ 26.7	㊾ 40.0	㊾ 46.7	② 6.7	㊾ 46.7	㊾ 33.3	①3.3	㊾ 63.3	㊾	⑧ 26.7	⑧26.7	④3.3	3.3 ④3.3		① 3.3	① 3.3 ②6.6			㊾ 53.3	② 6.7	⑦ 23.3	③ 10.0		② 6.7	① 3.3	㊾ 36.7	④ 13.3	未4 ㊾
総計	⑧	⑨	㊾	⑧	㊾	①	㊾ 36.4	㊾ 40.0	④ 7.3	⑨ 16.4	㊾ 16.4	⑦ 12.7	㊾ 21.8	㊾ 49.1	㊾ 29.0	⑦ 12.7	㊾ 58.2	㊾ 21.8	① 1.8	㊾ 21.8	㊾ 76.4	② ㊾	⑧ 40.0		㊾ 36.0		① 24.0	⑤ 6			㊾ 56.4	④ 7.3	⑧ 14.5	㊾ 27.3	① 1.8	② 3.6	⑨ 16.4	㊾ 20.0	⑤ 9.1	未⑦
							76.4						70.9																		㊾									

用いられなかった可能性をもっものも存在する点には留意すべきであろう。

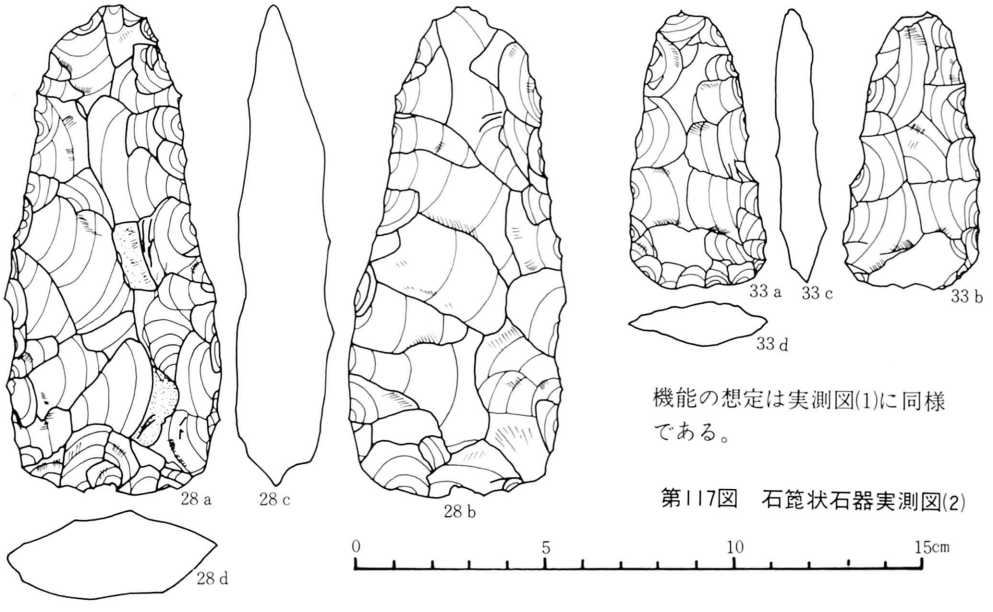
以上の如くにこの種石器はその縁辺を掻器的にも用いられた、しかも基底辺が「手斧的」な角度で用いられた可能性を強く示すものである。 石材は以下のとおりである。

第47表　石篦状(大)石材一覧

	I	II	計	比率
泥質チャート		1	1	7.7
赤色めのう				
流紋岩	2		2	15.3
粘板岩ホルンフェルス		2	2	15.3
砂質粘板岩				
輝石安山岩	1		1	7.7
硬砂岩	1		1	7.7
細粒硬砂岩		2	2	15.3
硬質泥岩				
珪質泥岩		1	1	7.7
硬質凝灰質泥岩	1		1	7.7
珪質凝灰岩				
フリント質凝灰岩				
濃緑色珪質細粒　〃				
珪質細粒　〃		2	2	15.3
泥質珪質　〃				
泥質　〃				
石質　〃				
フリント(珪化木？)				
計	5	8	13	

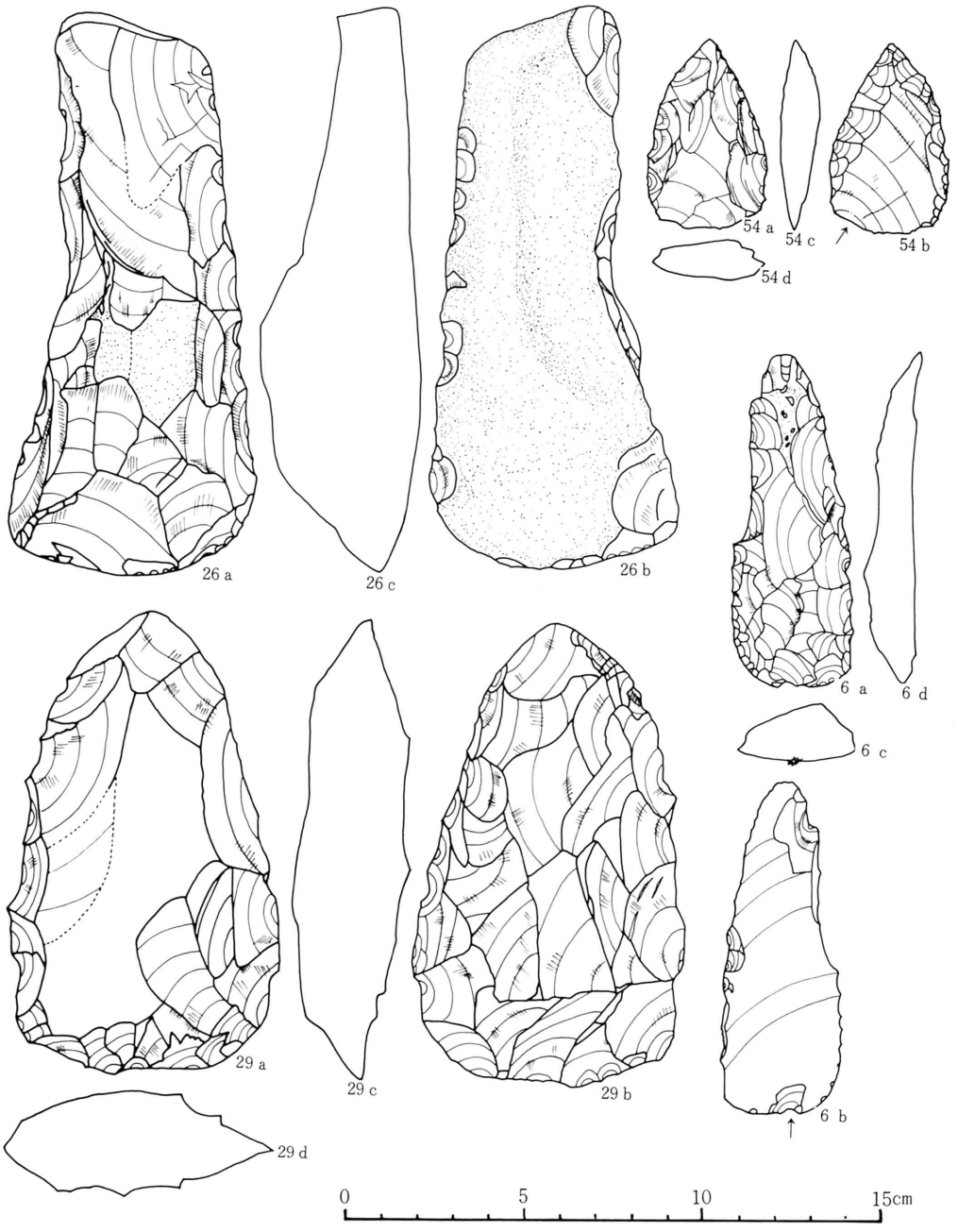
第48表　同中・小石材一覧

	I	II	修正後	
チャート	1		1	2.7
泥質チャート		1	1	2.7
赤色めのう	2		2	5.4
流紋岩		2	2	5.4
粘板岩ホルンフェルス	1		1	2.7
砂質粘板岩	1		1	2.7
輝石安山岩				0
硬砂岩				0
細粒硬砂岩				0
硬質泥岩	1		1	2.7
珪質泥岩		2	2	5.4
硬質凝灰質泥岩		1	1	2.7
珪質凝灰岩	1	1	2	5.4
フリント質　〃	2		2	5.4
濃緑色珪質細粒　〃	1	1	2	5.4
珪質細粒　〃		7	7	18.9
泥質珪質	9		9	24.3
泥質　〃		5	5	13.5
石質　〃	1		1	2.7
フリント（珪化木？）		1	1	2.7
計	20	22	42	



機能の想定は実測図(1)に同様である。

第117図　石篦状石器実測図(2)



26・29など大型品は打割具（打製石斧）的性格と思われる。
その他の中・小型品は掻具その他の通常の利器的性格と思われる。

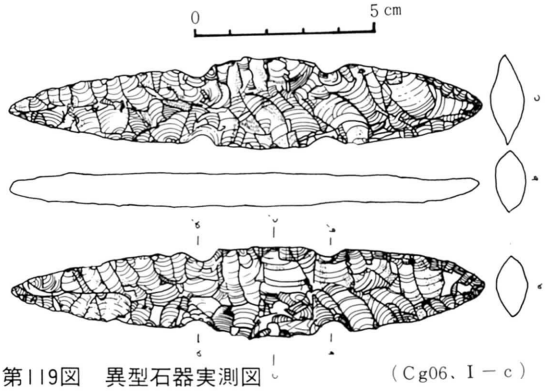
第118図　石篦状石器実測図(1)

l　**使用痕ある剝片**　使用痕と思われる細破砕痕を有する剝片類である。意図的な加工は認められないが、先の現象から使用には供されたものであろう。なお一部には、加工のごく初期の段階のものが混じている可能性もあろう。定形性他の傾向性は当然認められない。広義の掻・削器の仲間であろう。縦長・横長などの区分は省略した。

使用石材は以下のとおりである。　**第49表　使用痕ある剝片材質一覧**

素　材　名	数	比率	素　材　名	数	比率
砂質粘板岩	1	0.7	松脂岩	1	0.7
粘板岩	1	0.7	硬質泥岩	7	5.1
流紋岩	2	1.4	珪質泥岩	28	20.3
チャート	6	4.3	フリント質凝灰岩	2	1.4
玉　髄	2	1.4	珪質石質凝灰岩	14	10.1
赤色めのう	11	8.0	珪質濃緑色細粒凝灰岩	2	1.4
輝緑凝灰岩	7	5.1	珪質細粒凝灰岩	53	38.4
鉄（質）石英		0.7	計	138	

m　**異型の石器**　（第119図）　適当な名称を知らないので仮にこう呼ぶ。柳葉形の両側縁に2ケ所抉りを入れたものである。両面とも入念な押圧剝離が施されている。あたかも縦型の石匙を2ケ接合させた如き形状をしているが、これが完成時の姿とみなしておく。その先端部ないし側縁を刃部として用いる利器であろう。珪質泥岩である。



第119図　異型石器実測図　（Cg06、I－c）

以下には打割具他を集めた。

n　**片刃石器**　（第120･121図、図版44）最広義には打製石斧のカテゴリーに含まれるべきものであろうが、顕著な定形性を示さないもので、刃部がいわゆる片刃のものをこう名付けた。

基本形は、礫乃至大型flakeの縁辺に、粗い刃部を付したもので、当然全面近くにcoatingを残す。したがってその形状は素材のそれに制約されることになるが、あえて区分すれば、概ね

円形・楕円形・長方形などの種別がある。なお他に大・小の区別も存すると見える。形態の異同は刃部の形成部位によって決定されるといってよい。即ち、I　素材の短軸辺に付されるもの、II　長軸縁辺に付されるものの異同である。なお、素材の厚さにより、刃部厚にも厚・薄のちがいが生じる。破損状況は完全品の他に、上・下端部が斜位に割れるもの、長軸方向に半截的に割れるものの二種が若干目立つ。これは素材の質に加えて、用いられ方を反映するものであろうか。使用痕とも思われる細破砕痕は、ほとんどすべてが刃部に合致している。

o　**両刃石器**　(第121～122図、図版44･45)　これも最広義には打製石斧のカテゴリーに含められるであろうが、先と同様の理由から独立させた。いわゆる両刃のものである。

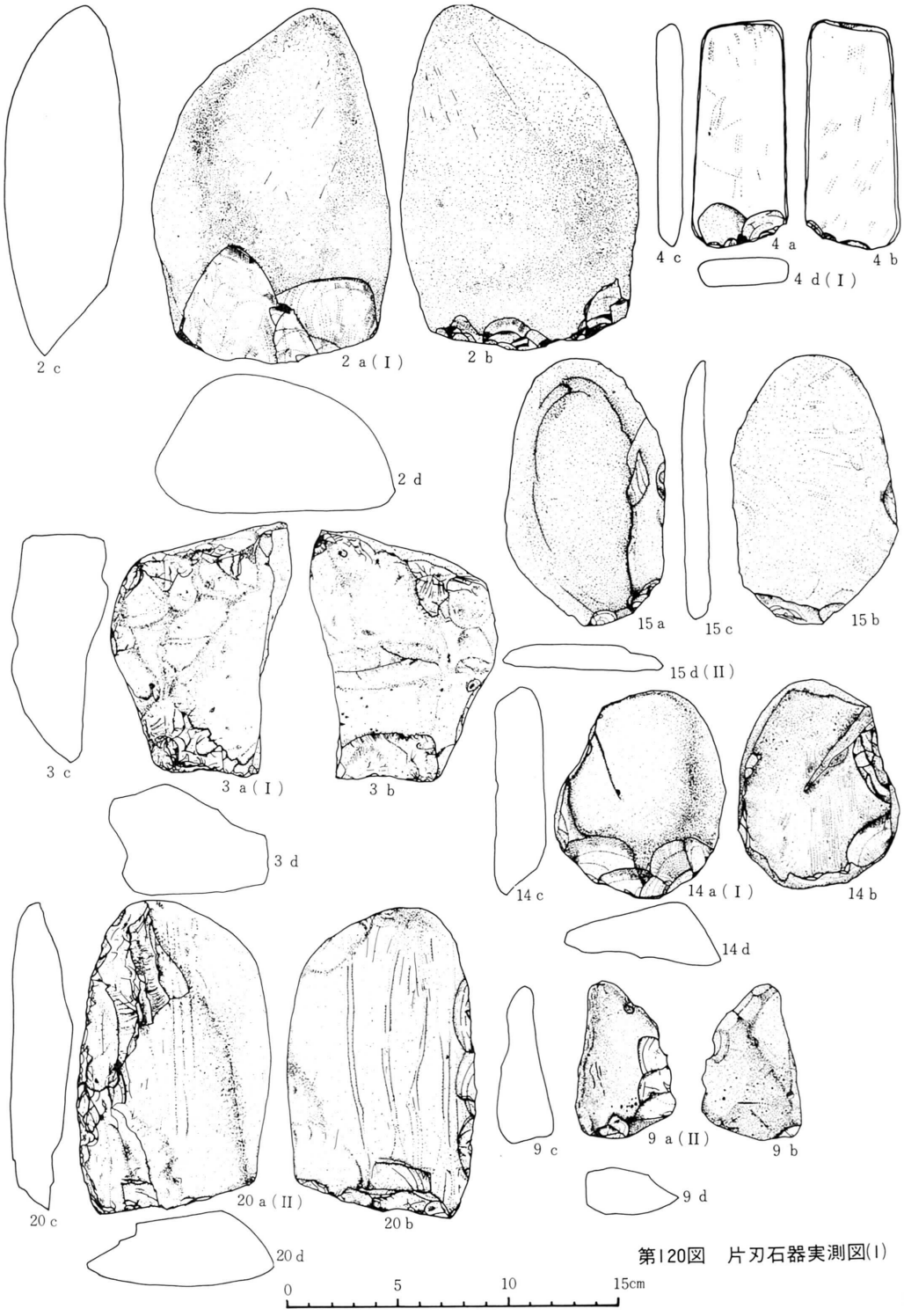
基本的特徴を記すと、礫乃至大型剝片の縁辺に両刃の刃部のみを付し、coatingを広範囲に残す。素材の形状に制約されるが、塊状・やや薄手のものの別、円形・楕円形・方形・長方形などの別、大・小の区別などが存在する。長めの素材の長軸方向の縁辺に刃部を付すものと、その一端部(短軸方向縁辺)にのみ付されるものの二種がある。前者5に対し後者は17と圧倒的に後者が多く、この種の基本形は後者になると思われる。破損状況は、完全品の他に刃部のみがわずかに割れるもの、半截品的に割れるもの、斜位に割れるものの三類型からなる。細破砕痕は刃部に一致する例が殆どであるが、稀に刃部の対辺に残存するものもある。

以上の二種は、その形態の類似のみを云々すれば、古く旧石器時代より存在し続けてきたもっとも実質的な利器の一種である。それを詳細に見れば上述の如き細かい特徴を指摘しうるが、ここでは、縄文時代晩期においても、この種石器が組成の中にきちんと組み込まれていること、そしてそれは、打割・打ち削りなどのそのある程度以上の重量を前提とした用途に用いられたであろうことのみを特にのべるに留めておく。

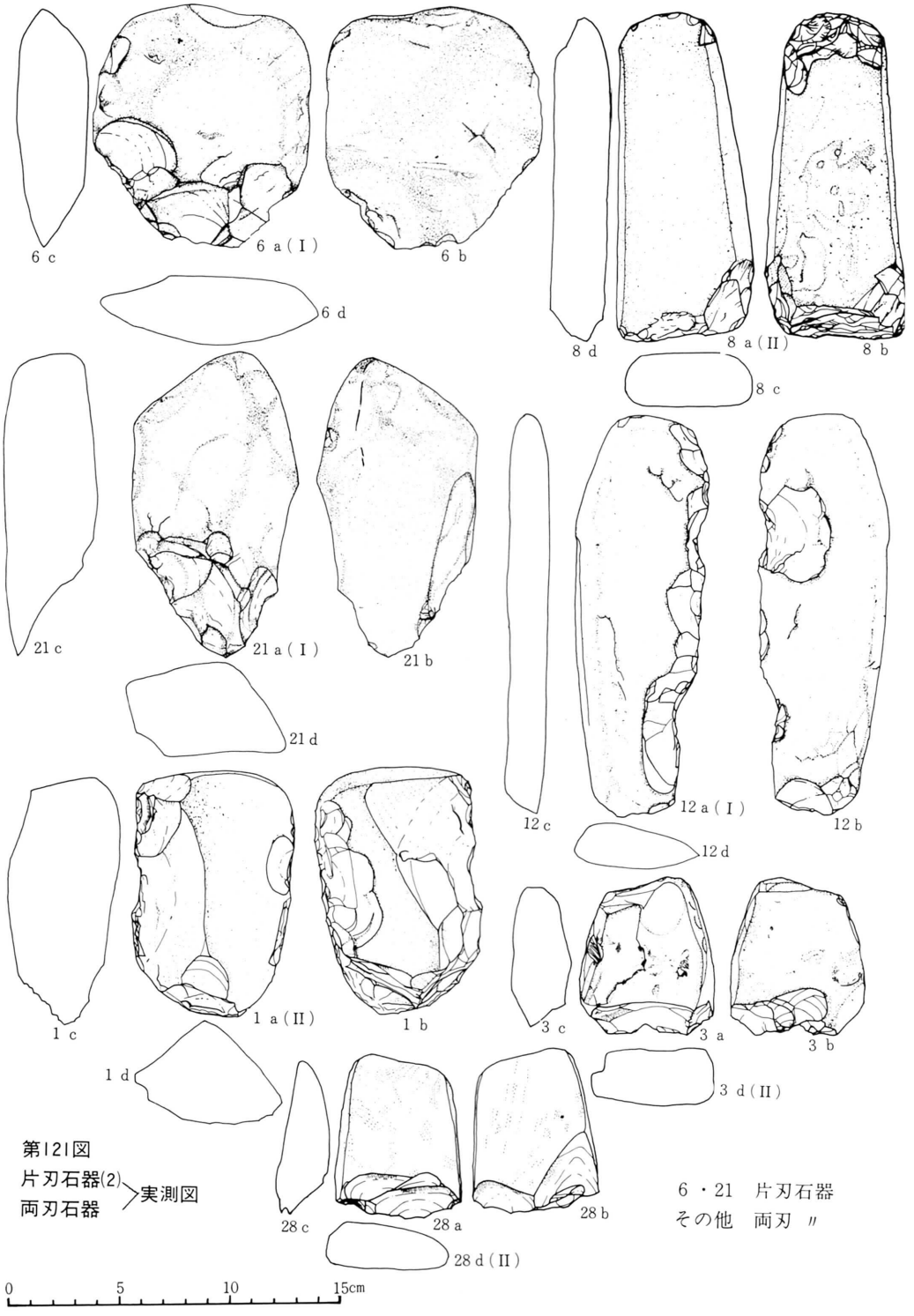
材質は以下のとおりである。粘板岩系統をものをきわめて集中的に選択していることが明白である。

第50表　片刃・両刃石器材質一覧

素　材　名	数	比率	安山岩	1	1.6
粘板岩ホルンフェルス	33	51.6	フリント質凝灰岩	7	10.9
石灰質粘板岩	3	4.7	石灰質凝灰岩	1	1.6
粘板岩	3	4.7	細粒硬砂岩	1	1.6
凝灰質粘板岩	3	4.7	流紋岩	1	1/6
砂質粘板岩	3	4.7	珪化木	7	10.9
変朽安山岩	1	1.6	計	64	

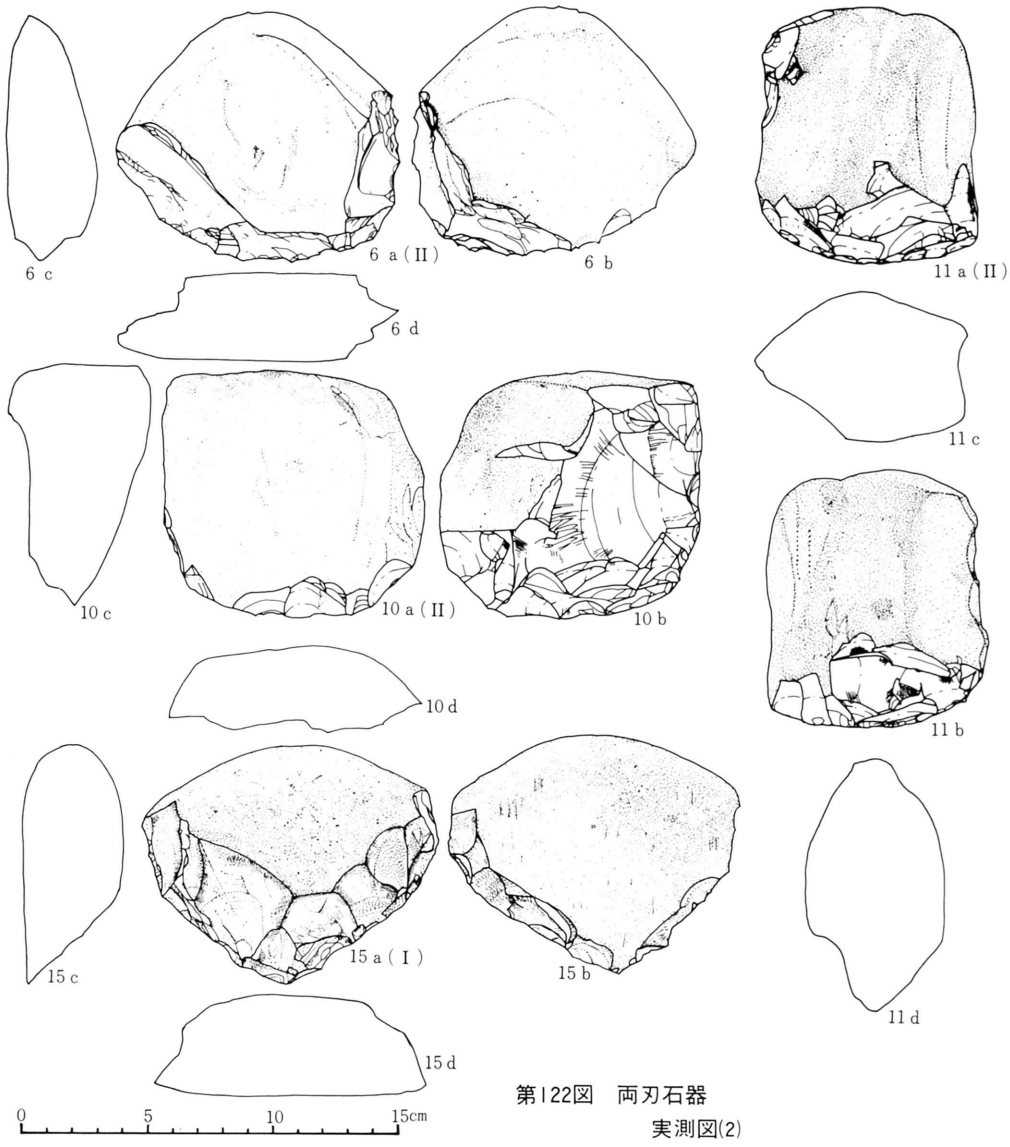


第120図　片刃石器実測図(1)



第121図
片刃石器(2)
両刃石器 ＞実測図

6・21　片刃石器
その他　両刃　〃

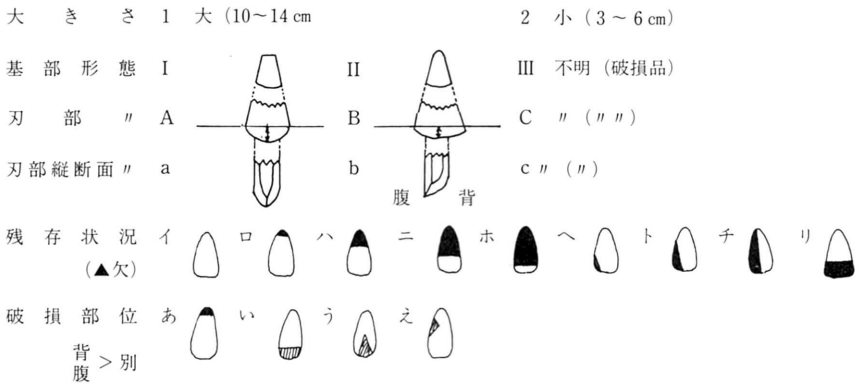


第122図　両刃石器
実測図(2)

p　**磨製石斧**　（第 123～124 図、図版 47）　磨製石斧はいわゆる定角式のカテゴリーにおさまるものばかりである。計 22 点得た。観察項目として次の諸点を設定し、それによる結果を第 51 表に示した。

(1)　大小について　1　大型（10～14 cm）と 2　小型（6 cm以下）の二種類がある。ただし、(1)は通常型乃至一般型と見做すべきかとも思われるが、「相対」評価的に記すと、大小となる。

第51表　石斧模式図



(2)　基部（刃部の反対側）の平面形態　I　角型のもの、II　尖るものの二種類と、III　不明（破片のため）のものとなる。

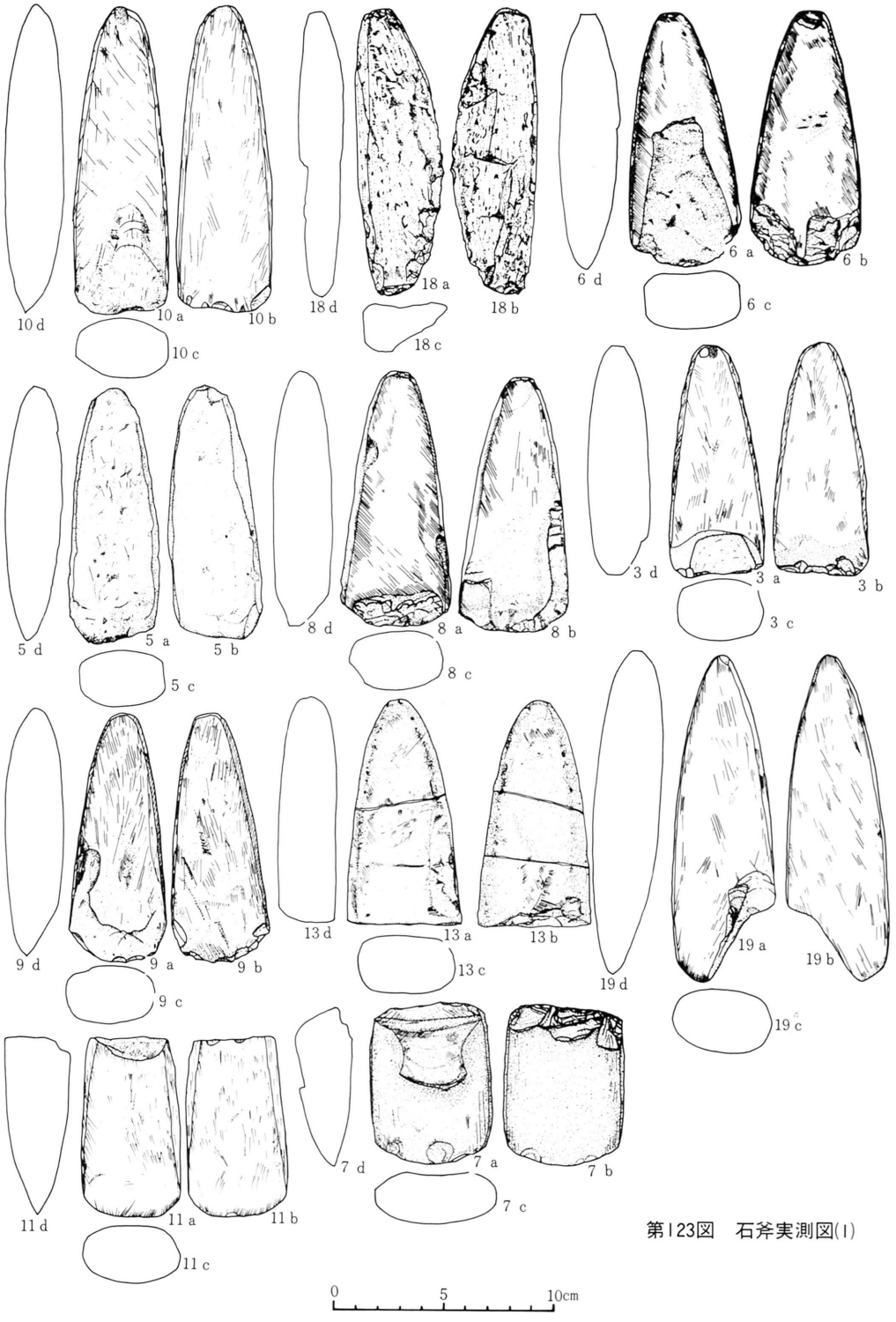
(3)　刃部の平面形態　A　湾曲の度合の大きいもの、B　それの小さいもの、C　破片のため不明のもの、の三種ある。あまり大きな意味は無いと思うが、一応区分した。

(4)　刃部の縦断面形態　a　刃部が断面の中心に来るもの、b　それが一方に寄るもの　c　同様に不明のものの三種を区分した。aはいわゆる「両刃」的な色彩が強いと見ることも出来るし、bは「片刃」的なものと見ることが出来る。これはひいては前者に「斧、axe」的な、後者に「手斧、adze」的な機能を想定せしめるものである。この点は、後述の破損部位の観点と対応させると、その可能性がさらに増す。即ち、bと破損類型（う）とにはかなり強い対応関係を指摘出来るのである。なおbにおいては、湾曲度の少ない面を腹面、その強い他面を背面と称している。

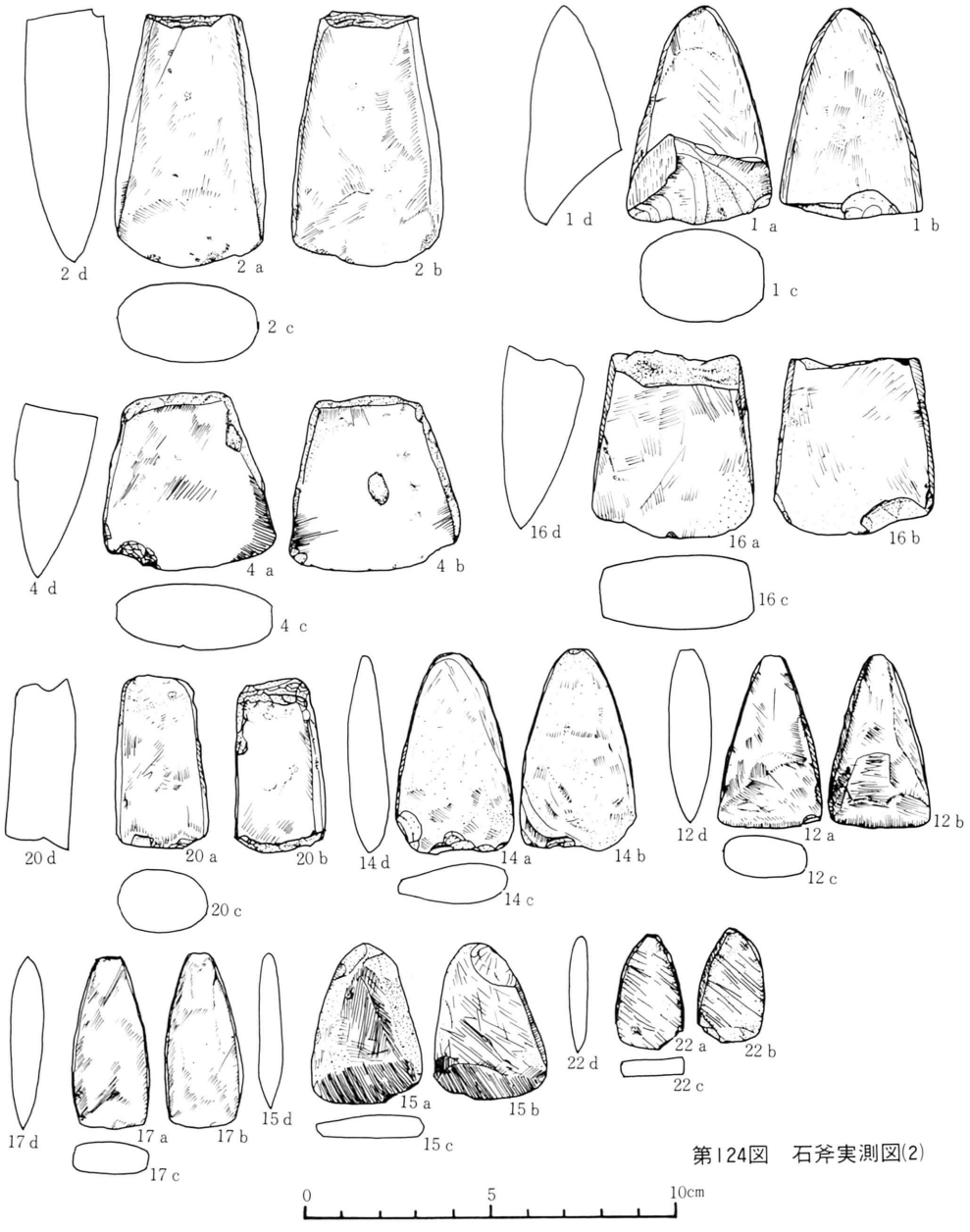
(5)　破損（残存）状況について　これについては、一応9組の類型を用意した。ただし、これらの中には、たとえばニ→リの如くに「表裏」の関係にあるものを含んでおり、その数どおりの類型が存在するとは限らない。その数（のべ数）を示す。

イ－10、ハ－3、ニ－3、ヘ－2、ト－2、リ－3である。意外に原型を保つ例が多い。その他の特徴としては、体部が半割乃至横断されている例と、それが縦断されている例の二種が存在することであろうか。これは、そのような破損を生ぜしめる力の加わり方を反映するものと見ることも出来るが、材質・石理などの条件も当然考慮に加えねばならないであろう。ちなみに、刃部縦断面bにトの2例が、同aにはトが皆無、という結果も指摘出来る。これらが使用方法の差を反映する可能性もあろうか。

(6)　細破砕痕の部位について、　これについてはあ～えの4類型を用意した。そのうち、い



第123図　石斧実測図(1)



第124図　石斧実測図(2)

は使用に供せられれば必然的と生ずるものであり、とくにとりあげては扱かわない。

あ　は基部残存例の中にかなり高い比率で見られる。したがって斧の基部は細破砕痕が形成されるような用いられかたをしたということはいえよう。それは即ち、基部は叩かれる頻度が高いということであり、それは具体的には着柄との関係、　あるいはノミ的な用いられ方などの可能性の検討を必要としょう。

既に一部述べたが、う　と断面形態bとの間には極めて高い相関関係が存在する。したがってこれは、使用法のかなり強い反映があると思われ、具体的には「手斧的」なものを想定させるに十分である。

(7)　小型品2について　小型品の刃部形成は、大型品と同様に、体部から刃部へ滑らかに移行するものと、体部・刃部境界に明白な区別の見られるものの二種がある。この種の小型品は大型品とは異なる機能が想定される必要もあろう。その場合は、「彫刻刀」乃至「ノミ」的なものが考えられないであろうか？

以上であるが、操作にあたっては、晩期前半と後半を区別せずに扱かった。基本的に相違を指摘出来なかったからである。

石材は以下のとおりである。安山岩・粘板岩・凝灰岩の各変種に限定される。

第52表　石斧材質一覧

素材名	数	比率	素材名	数	比率
珪質濃緑色細粒凝灰岩	1	5.0	安山岩	3	15.0
珪線石ホルンフェルス	1	5.0	片状ホルンフェルスと千枚岩の互層	1	5.0
変朽安山岩	7	35.0	粘板岩	3	15.0
緑色凝灰岩	3	15.0	砂質粘板岩	1	5.0
			計	20	

q　**石鍬**　（第125～127図、図版45・46）　いわゆる石鍬と呼ばれる形状・材質のものを一応一括した。形状は異なるが、材類の類似から加えたものもある。

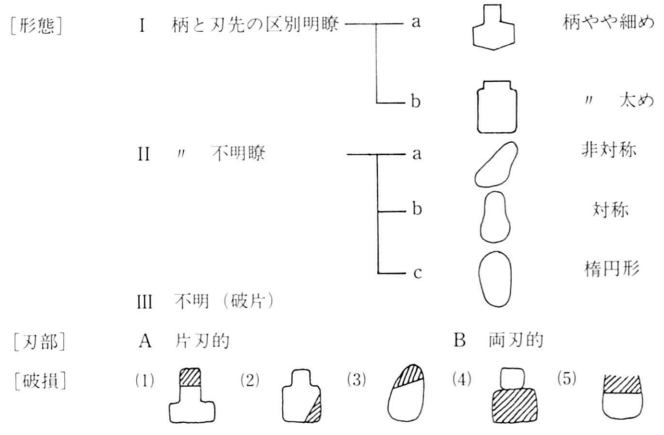
観察項目として次のものを設けた。（53表）

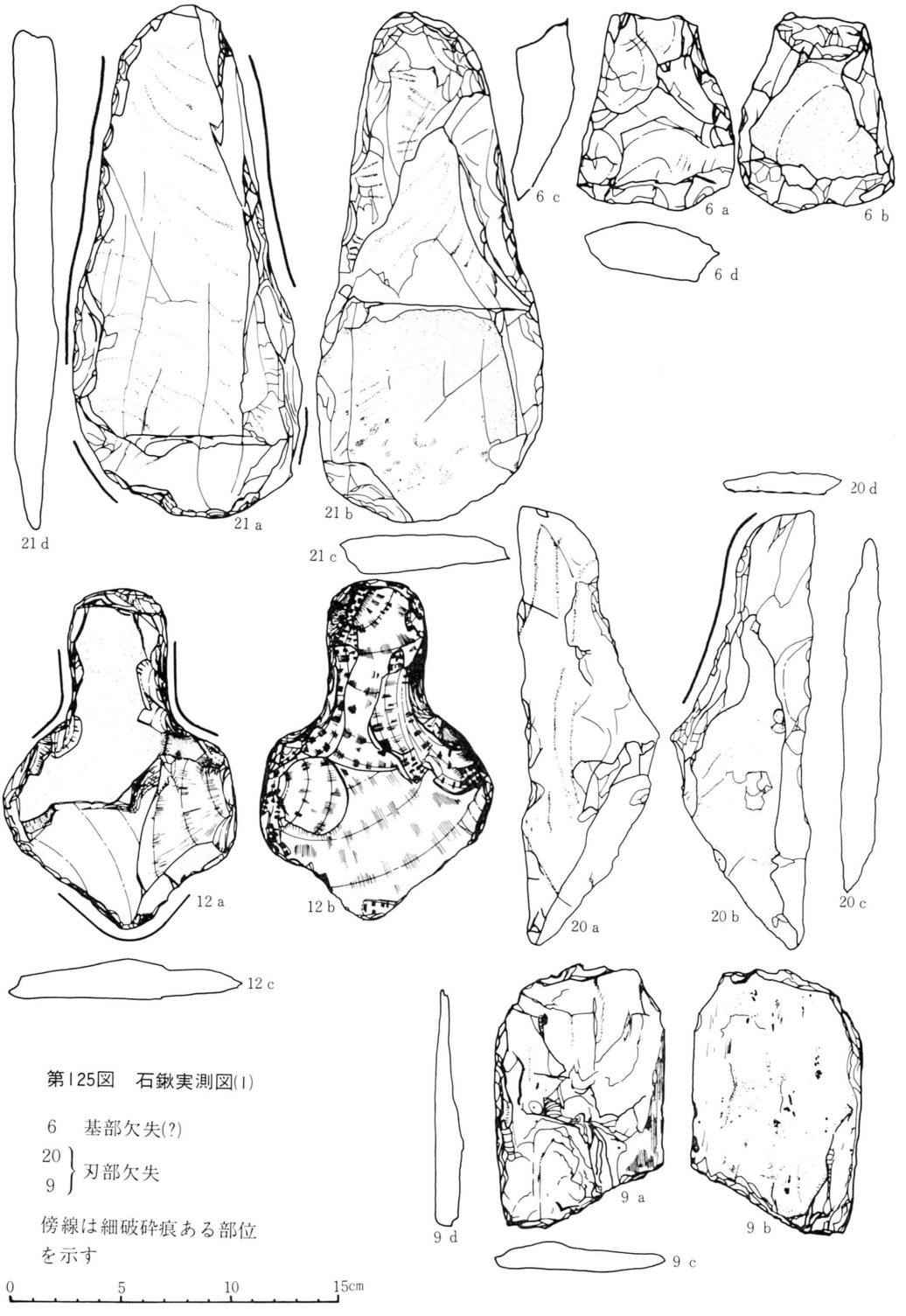
(1)　形態　I　柄と刃先の区別の明瞭なもの、a　柄がやや細めのもの、b　太目のもの、II　両者の区別が不明瞭なもの、a　平面形が左右非相称のもの、b　相称のもの、c　楕円形に近いもの、III　（破片のために）不明のもの、の三種である。

(2)　刃部形状　A　いわゆる片刃的なもの、B　同様に両片的なもの、の二種である。

(3)　破損状況　模式図のとおりの6類型

第53表　石鍬模式図





第125図　石鏃実測図(1)

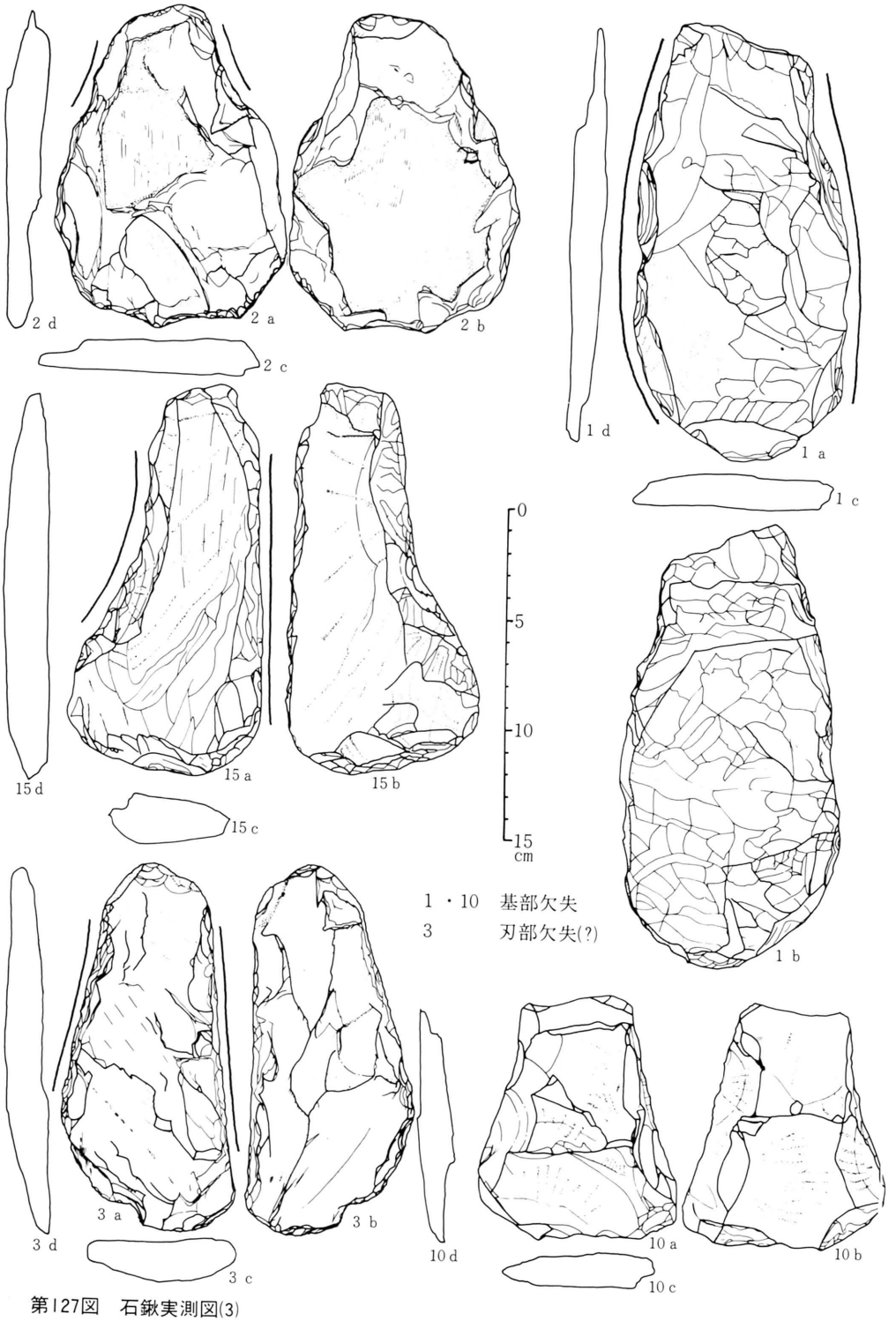
6　基部欠失(?)

20
9 } 刃部欠失

傍線は細破砕痕ある部位を示す

5・7・14
刃部欠失

第126図　石鏃実測図(2)



第127図　石鏃実測図(3)

以上をまとめると、Ⅰ－ｂ－Ａが９例ともっとも多く、Ⅰ－ａをも加えると10となる。Ⅱは６である。したがって、柄と刃先の区別の明瞭なものが基本形をなすことは明らかである。刃先と何らかの区別が存在するものをとれば、Ⅱ－ａ、ｂもⅠに近いことになり、それも加えると両者の差はさらに大きくなる。また刃部はＢが２例のみで、他はすべてＡである。これからすると、この種石器の刃先は、片刃的なものであるのが本来の姿であった可能性が極めて大きくなる。これを敷衍すれば、この種石器の用いられ方、とりわけ着柄状況にもある程度の確率の高い推定が可能となってくる。破損部位は、柄の部分と、刃の部分に二大別すると、ほぼ半々で存在する。このようなことから、この石器は、手斧的な着柄を施こされ、柄と刃とが同じ程度に破損するような用いられ方をしたことになろう。その材質からして鋭利性は期待出来ないのであり、しかし板状に割れる点が考慮されていると、その対象として「土」（地面）が存在した可能性は当然高い。従がって通説どおり、この種石器は「土掘り具」的なものであったろう。

この種石器の縄文時代における変遷、とくにその数量比の変遷は、岩手県においては殆ど明らかではない。今後追求されるべき確題である。

石材は以下のとおりである。粘板岩の変種と輝緑凝灰岩が大半を占め、この種においても意図的選択の反映を見ることができる。

第54表　石鏃材質一覧

素材名	数	比率	素材名	数	比率
粘板岩	24	52.2	白色細粒凝灰岩	1	2.2
砂質粘板岩	4	8.7	フリント質凝灰岩	1	2.2
粘板岩ホルンフェルス	1	2.2	安山岩	2	4.3
輝緑凝灰岩	11	23.9	珪化木	2	4.3
			計	46	（可能性あるものを含む）

ｒ　**粉粋具類**　以下には、粉砕具関連と思われるものを一括して示す。

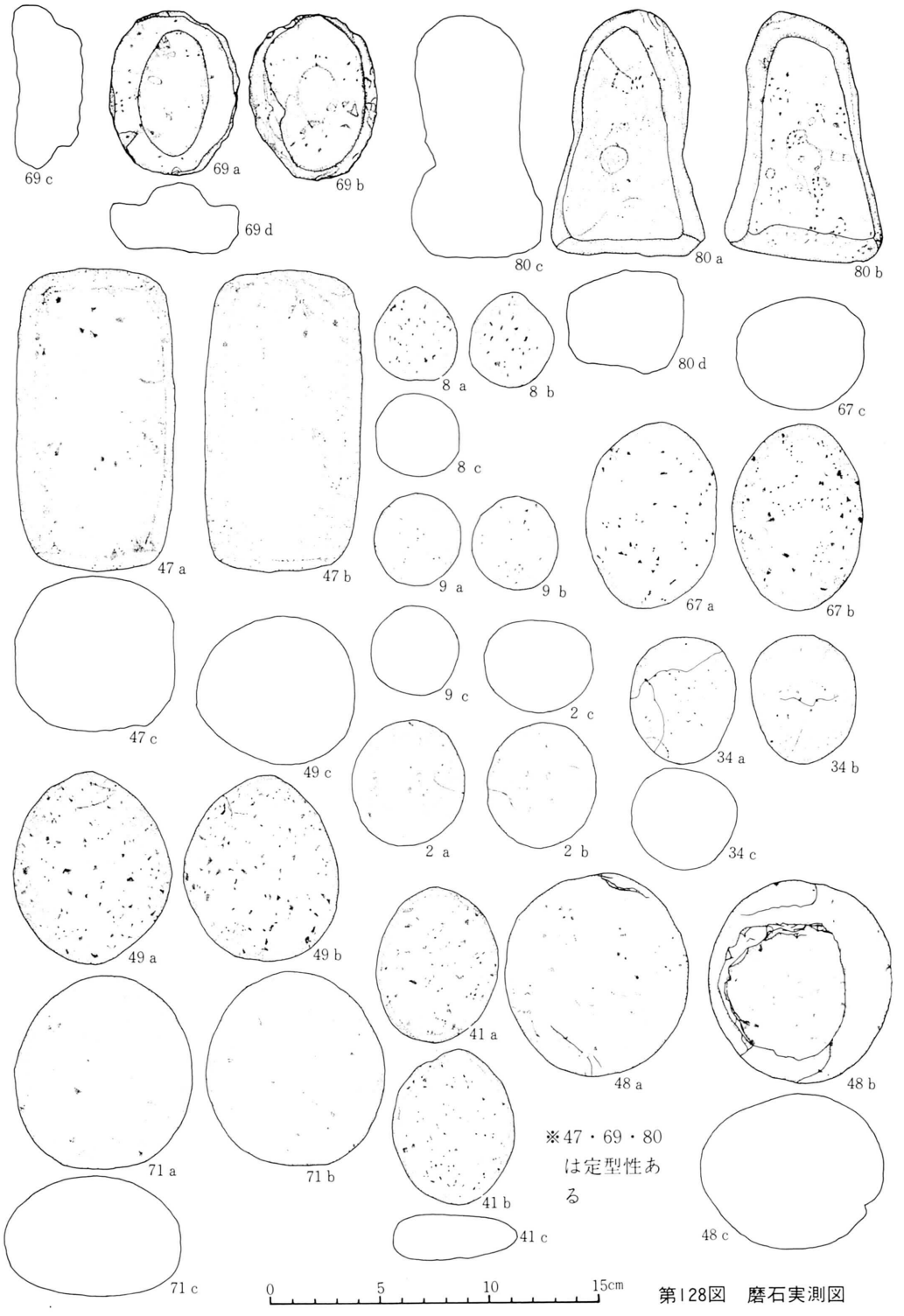
(1)　凹み石　礫の一面に１ケ乃至数個の凹みを有するものである。形態は卵状、球状、板状に近いものなどがある（第75表以下参照）。

(2)　すり石　（第128図）　球状乃至卵状をなすものである。これの詳細は省略する。第75表以下参照のこと。

(3)　石皿と思われるもの　明らかな加工部（脚など）をもたないが、その一面が平担なものを一応こう区分した。材質も均一であり、おそらく石皿として大過無いであろう。

以上は植物質などの食料の粉粋に供せられたものであろう。

それぞれの使用素材は以下のとおりである。それぞれに限定選択の痕が見られよう。


69 c
69 a
69 b
69 d
80 c
80 a
80 b
47 a
47 b
8 a
8 b
80 d
67 c
8 c
9 a
9 b
67 a
67 b
47 c
9 c
2 c
49 c
34 a
34 b
2 a
2 b
34 c
49 a
49 b
41 a
48 a
48 b
71 a
71 b
41 b
※47・69・80
は定型性あ
る
41 c
48 c
71 c
0
5
10
15cm

第128図　磨石実測図

第55表　磨り石材質

素　材　名	数	比　率	その他
凝灰質硬砂岩	1	1.3	
硬　　砂　　岩	1	1.3	
輝 石 安 山 岩	75	93.8	第4紀火山
安山岩質凝灰岩	1	1.3	
粘　　板　　岩	1	1.3	
玉　　髄	1	1.3	
計	80（可能性あるものも含む）		

第56表　石皿材質

素　材　名	数	比率
輝石安山岩	44（可能性あるものも含めてある）	88.0
輝石安山岩熔岩（第四紀火山）	3	6.0
斜長石流紋岩	1	2.0
凝灰質硬砂岩	1	2.0
アルコース砂岩	1	2.0
計	50	

第57表　凹み石材質

輝　石　安　山　岩	20	100

以下には信仰関連のものといわれるものを示す。

s　**石棒・石剣類**　（129～133図、図版51・52）　いわゆる石棒・石剣と呼ばれるものを一括した。両者の区別はその横断面形態を以ってした。即ち、前者は円形で若干太目、後者は偏平な長方形乃至菱形である。ただし、この二者の区別は便宜的なものであり、両者が本来的には同種のものである可能性を認めるにやぶさかではない（第58・59表）

(1)　石棒　完全品は無い。自然石である可能性のある資料を除外して検討すると、頭部は無く、体部と先端部になる。計側値他は第75表に示した。その破損状況に若干の特徴があろう。即ち、破損部断面が斜行する例（同一方向・反対方向）と その半截的な例が目立つ。これは材質との関連を考慮する必要があろうが、別に用いられ方の検討資料とすることも出来よう。

次に先端部（下端部）が両側より斜行し薄くなり、先細りになるものがある。それは研磨によっていると思われるが、打撃によると思われる破損も見られる。この現象もこの石器の用いられ方の一資料になるとも思われる。なおこの先端部の加工は、後述の石剣類にも見られるところである。この点もこの両者を同一のものと見做しうる根拠となる。

第58表　石棒模式図

[破損状況]					
資料No.	⑩	⑤	⑦ ② ⑯	① ⑪ ⑨	⑥
先端					
資料No.	No.③				

計10

(2)石剣　その横断面形が偏平なものを仮にこう区分したことは既にのべた。完全品は無く、A　頭部（上端）、B　先端部（下端）、C　体部（中間）のそれぞれ破片からなる。これを基礎とし、次の観察を行なった。即ち、施文の有無、破損部以外の細破砕部の有無、横断面形態（長方形、狭長楕円形、同菱形の四種、これは後三者と前者に二大別されるべきものではあろう）、折損・破損部断面（とりわけ側面観）状況等である。その結果は第59表に示した。
なおすべての資料についてアスファルト、塗料類の付着は観察出来なかった。

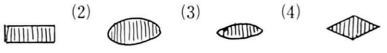
第 59 表　石剣模式図・集計表

完全品は無い、破片の部位で区別　　A　頭部（柄）　　B　先端部（刃先？）　　C　体部

・〔施文〕 I　有（沈線）　　II　無

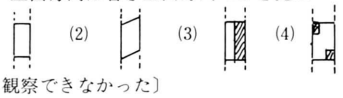
・〔折損部以外の破損（「剝離」的な可能性のあるもの）〕　(1)　有　　(2)　無

・〔横断面形態〕　(1)　(2)　(3)　(4)



・〔折損・破損状況　　正面方向は省き立面方向のみを見た

(1)　(2)　(3)　(4)

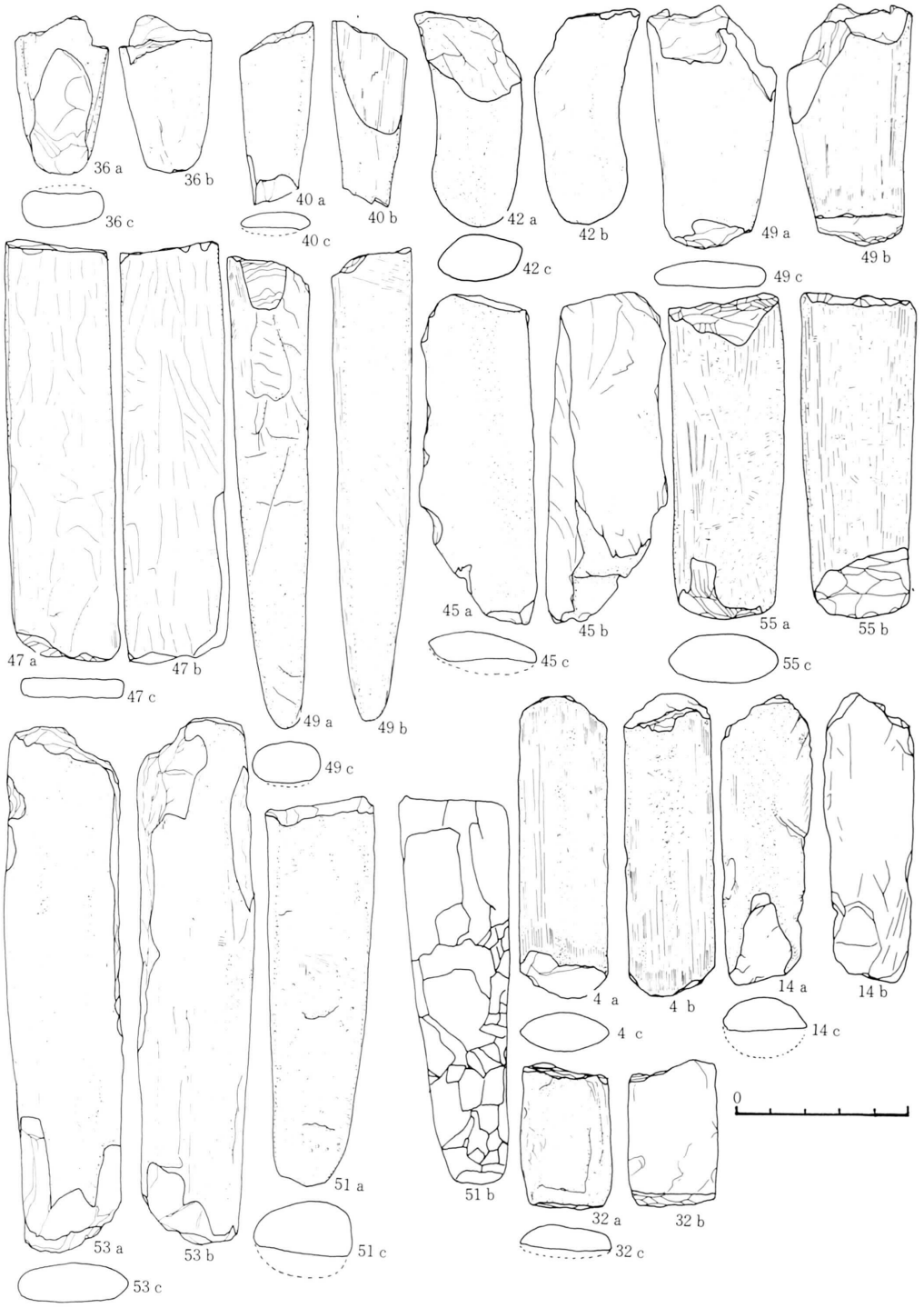


・〔Pitch・塗彩などは観察できなかった〕

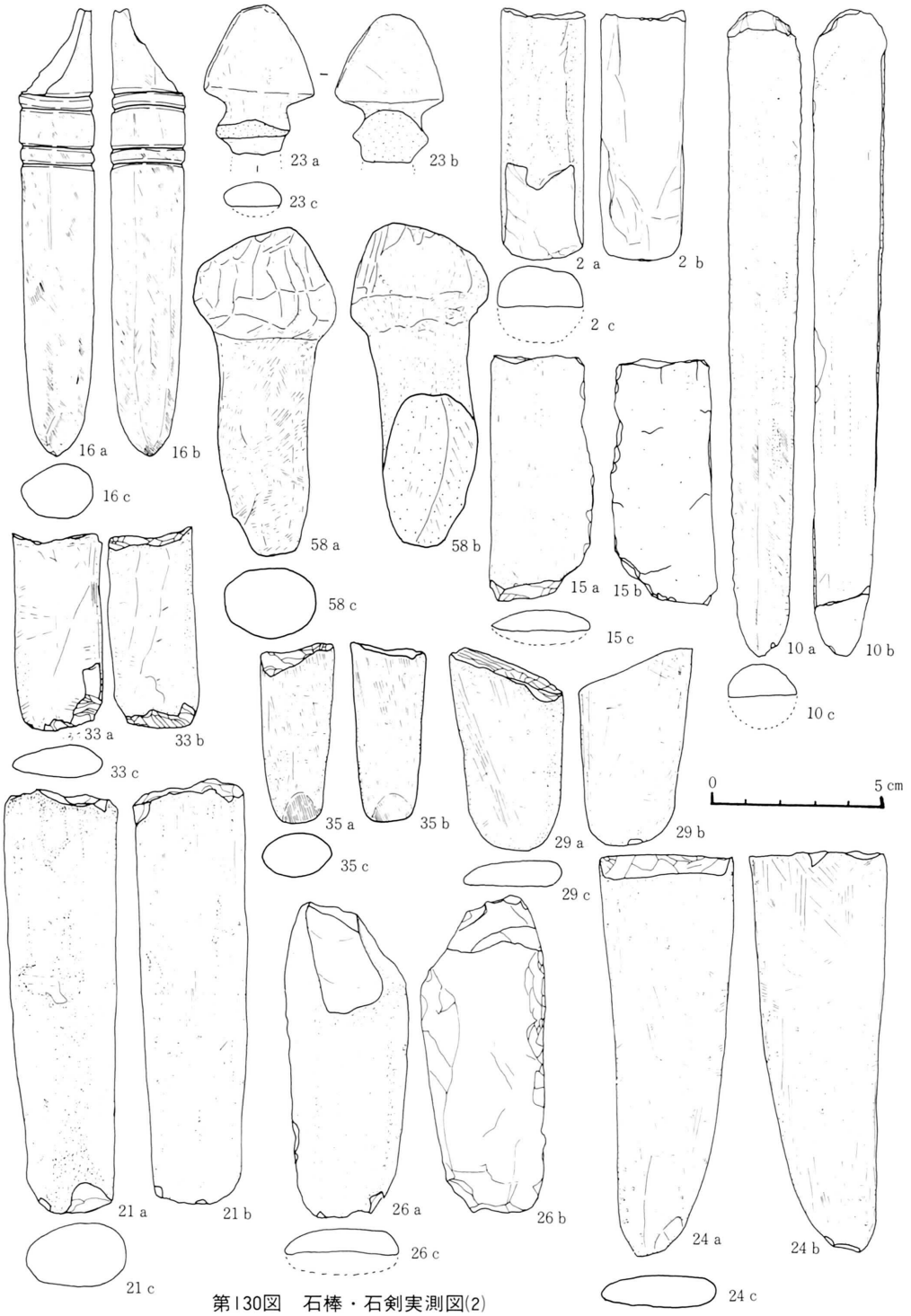
部分	施文		その他の破損		断面				破損				その他
	有	無	有	無									
(22.4) A 11	2 18.2	9 81.8	2 18.2	9 81.8	3 27.3	7 63.6	1 9.1		2 18.2	7 63.6	1 9.1	1 9.1	
(40.8) B 20		20 100	8 40.0	12 60.0	3 15.0	4 20.0	13 65		5 25.0	4 20.0	5 25.0	6 30.0	石斧様にの如くに研磨する
(36.7) C 18	1 5.6	17 94.4	6 33.3	12 66.7	5 27.8	3 16.7	9 5.0	1 5.6	2 11.1	4 22.2	9 50.0	3 16.7	
49 計	3 6.1	46 93.9	16 32.7	33 67.3	11 22.4	14 28.6	23 46.9	1 2.0	9 18.4	15 30.6	15 30.6	10 20	

A：B：C＝22.4：40.8：36.7%の比率で存在し、ほぼ類似した存在状況を示す。したがってここからは特記すべき現象は無いとしておく。ただしもう少し細かい部位の分類を行なえば何らかの傾向が出てくる可能性はある。先端部が研磨乃至打割により傾斜が付けられ、石斧の刃状に薄くつくり出してある資料がかなり多く存在する（9例）。しかも擦痕他の使用痕的とも見えるものも残存している。したがってこの種石器の先端部は何らかの機能を果たすべきことを期待されていたことは確実であろう。

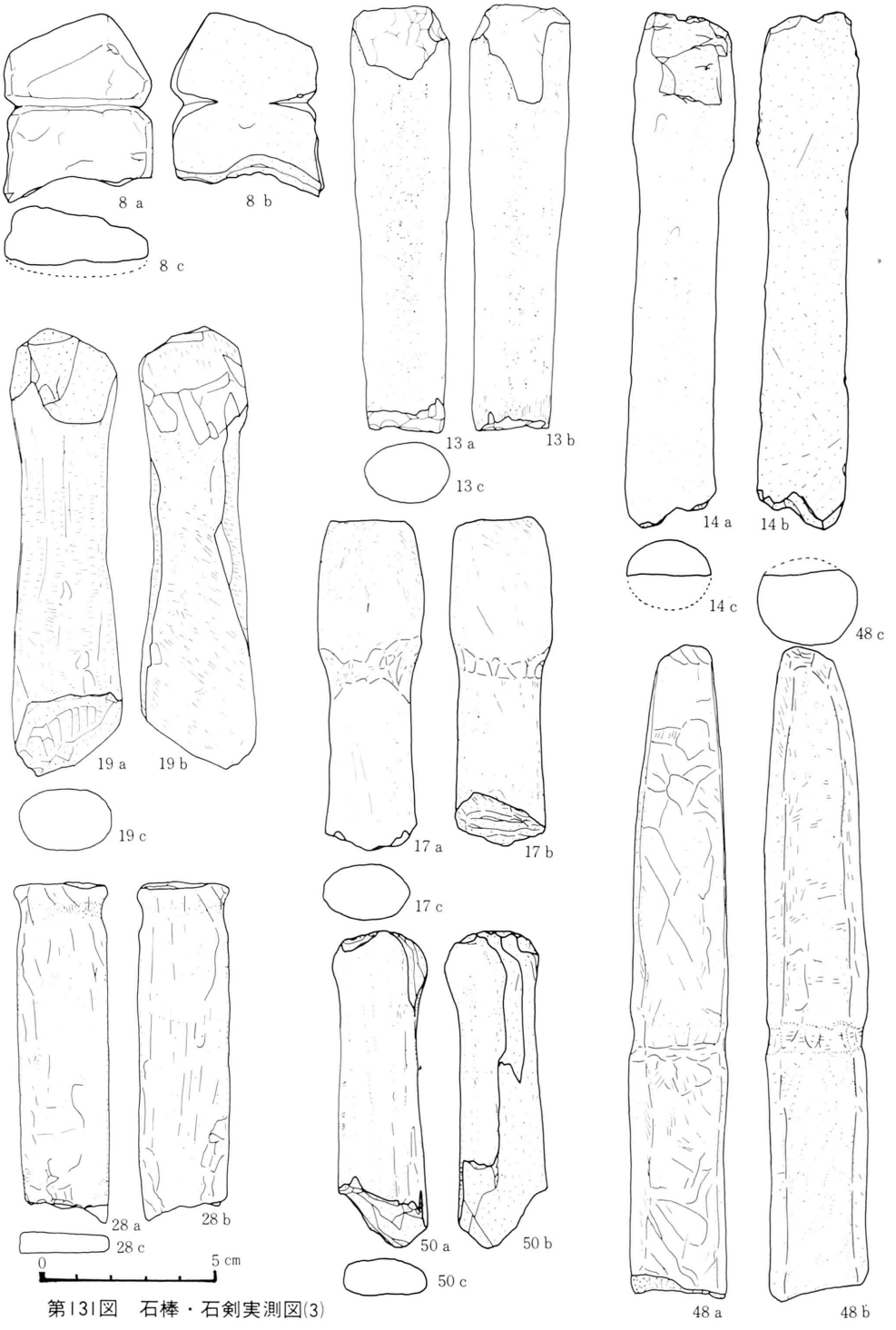
細破砕部などのその他の破損は、体部におけるそれの解釈は困難を伴なうので、ここではしばらくおく。頭部と先端部にかなりの比率が存在する。これはこの種石器の上下端に何らかの形で圧力他が加わるような形で使用されたことを示すものといえよう。



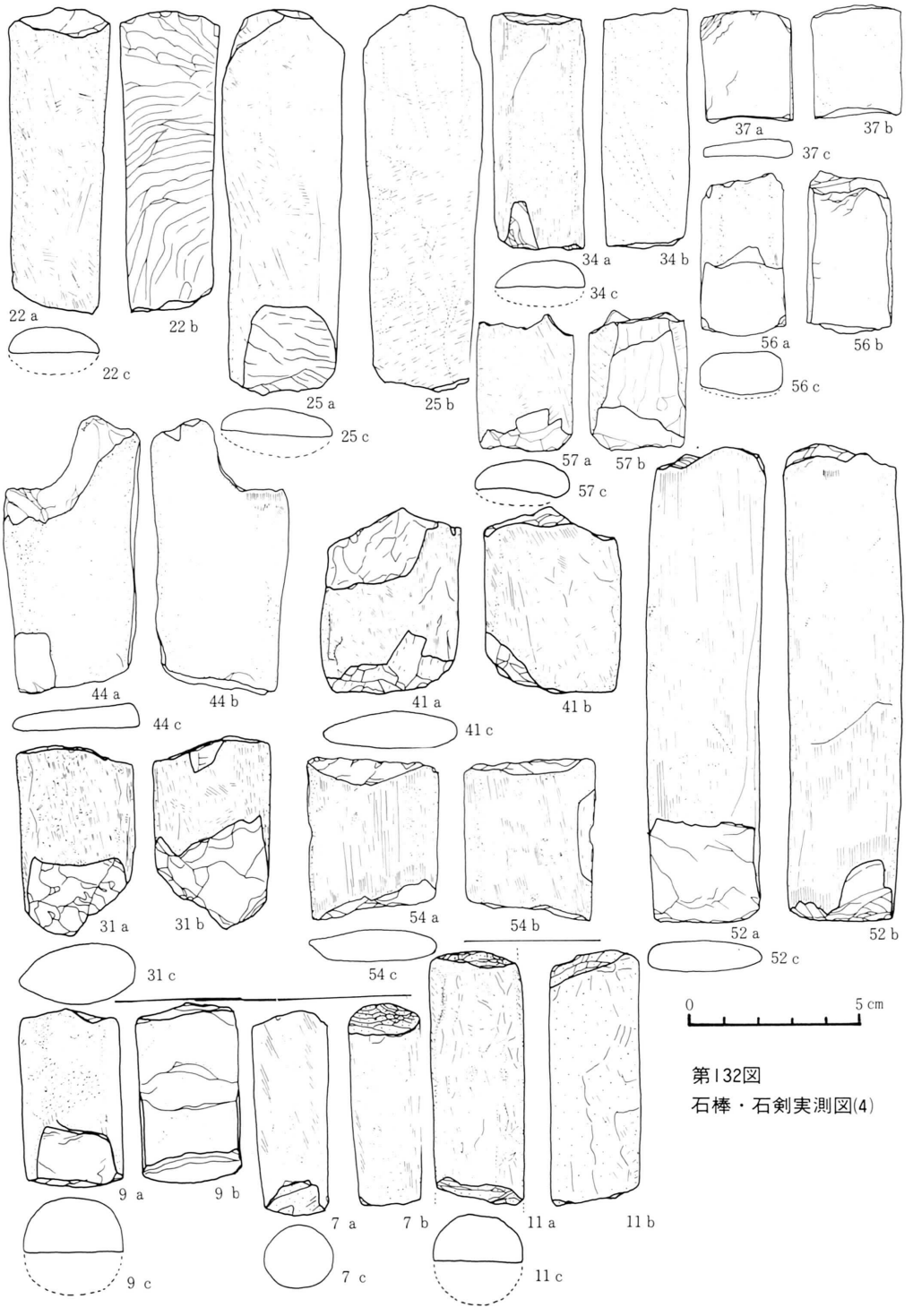
第129図　石棒・石剣実測図(1)



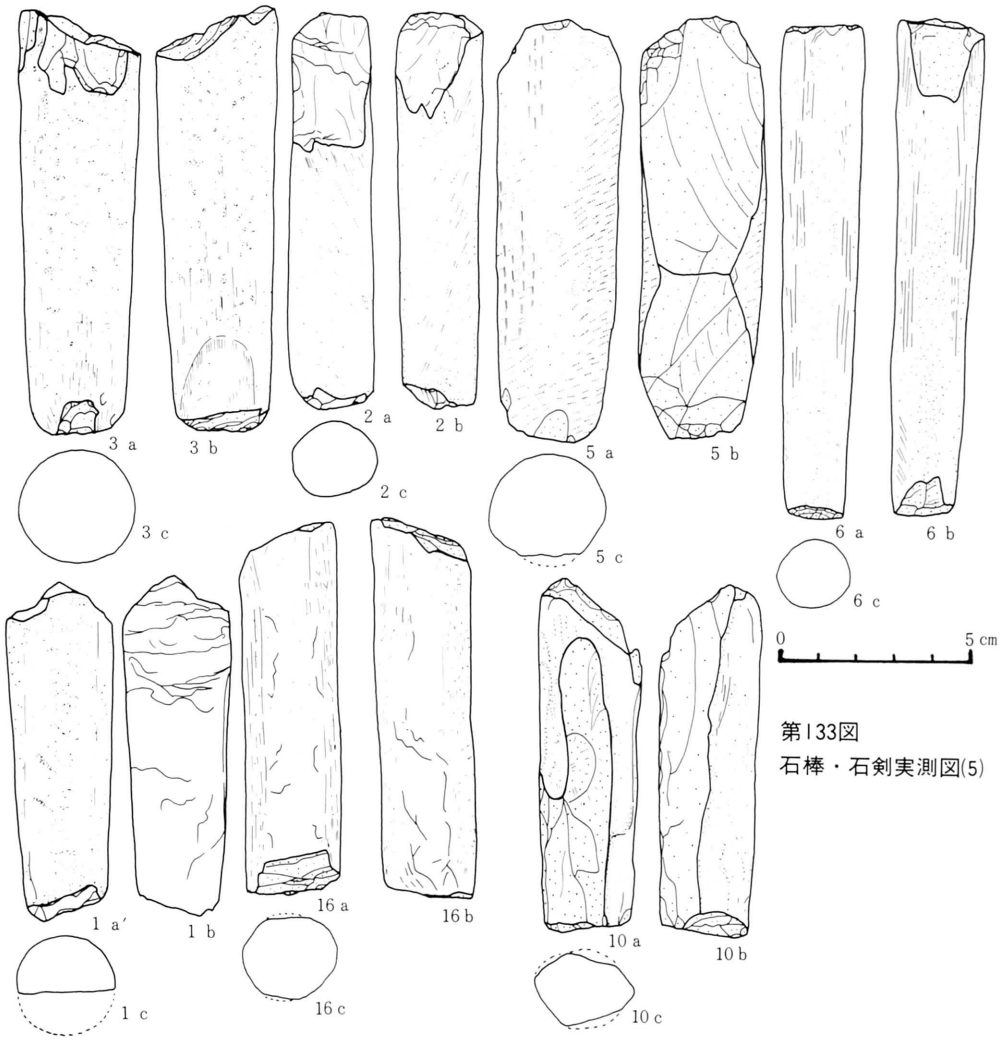
第130図　石棒・石剣実測図(2)



第131図　石棒・石剣実測図(3)



第132図
石棒・石剣実測図(4)



第133図
石棒・石剣実測図(5)

横断面形態は、Aに3が少なく、B・Cにそれが多い傾向がある。ただしこれは同一物の部位による断面形態の異同の可能性も考慮すべきであろう。

折損・破損部の断面は、Aにおいては、(2)が圧倒的に多く、Bは4類型が平均的に、Cは(3)が過半数を占める形でそれぞれ存在する。これは、材質の反映を考慮すべきと同時に、用いられ方の反映と見做しうることは先の石棒と同様であろう。棒状に仕上げられたこの種の材質が、斜位乃至半載的に破損するような使用方法はいかなるものであろうか、実験に値する課題であろう。

以上の(1)・(2)の2種は共通する点が多い。したがって、非常に類似した関係にあること、さらには同一種である可能性は極めて高い。

これらの使用石材は次のとおりである。粘板岩系統への集中ぶりが顕著であろう。

第60表　石棒・石剣類材質一覧

素　材　名	数	比率	素　材　名	数	比率
酸性凝灰岩	1	1.7	凝灰質粘板岩	16	27.1
輝緑凝灰岩	5	8.5	粘板岩ホルンフェルス	12	20.3
粘板岩	25	42.8	計	59	

t　**岩版**　（第135図、図版52）　いわゆる岩版はすべて破片の形で45点が得られた。Ｃａ12・Ｃｂ12・Ｃｂｃｏ6・Ｃｃｏ6・Ｃｃｏ9・Ｃｃ12の各グリッドのⅢ層から得られており、比較的集中化現象を示しているとも見える。しかしそれも特定地点への集中、あるいは遺構への共伴現象を指摘出来る程の精度ではない。したがって、その出土状況に特記すべき事項は無いとしておく。

三片が接合した3を中心に、そのあらましを述べる。施文されたモチーフを後元すると、第134図の如くになろう。平面形は長方形のカテゴリーに入ると思われる。三角形の彫刻部分と、渦巻文の中心をそれぞれ短辺・長辺の中心と仮定してその大きさを復元すると、縦12.5×横9.5㎝の長方形で、厚さ1.5㎝ほどのものとなろう。周縁は斜位の面取りが施こされたが如くに、平面が斜行している。

施文は彫刻的な手法で行なわれ、沈線の断面はＶ字形をなし、比較的鋭い。三角形の掘り込み部は最深0.6㎝とかなり深い。施文の痕跡（削りなど）は看取出来ない。モチーフは単純な部類であろう。

表面(a)はやや黄色味がかった茶色を呈し、素地の灰白色とは全く異なる。したがって何らかの彩色が行なわれた可能性が大である。

(2)には貫通穿孔が認められる。その作業は表裏両面から行なわれているが、それらが正確に一致せず若干ずれている。またａ側の穿孔作業には、数回のやり直しの痕跡も認められる。いずれも施回（回転）運動によっている。残存状態不良により正確は期しがたいが、この孔を中心に一種の放射状の施文が行なわれていたとも考えられる。

第134図　岩版模式図

モチーフをうかがわせるその他の資料は認められない。材質はすべて白色細粘凝灰岩であり強い斎一性にある。全般的に極めて脆いが、とりわけ裏面(b)の破損のひどいものが多い。これに何らかの意味があるか否かは未詳である。

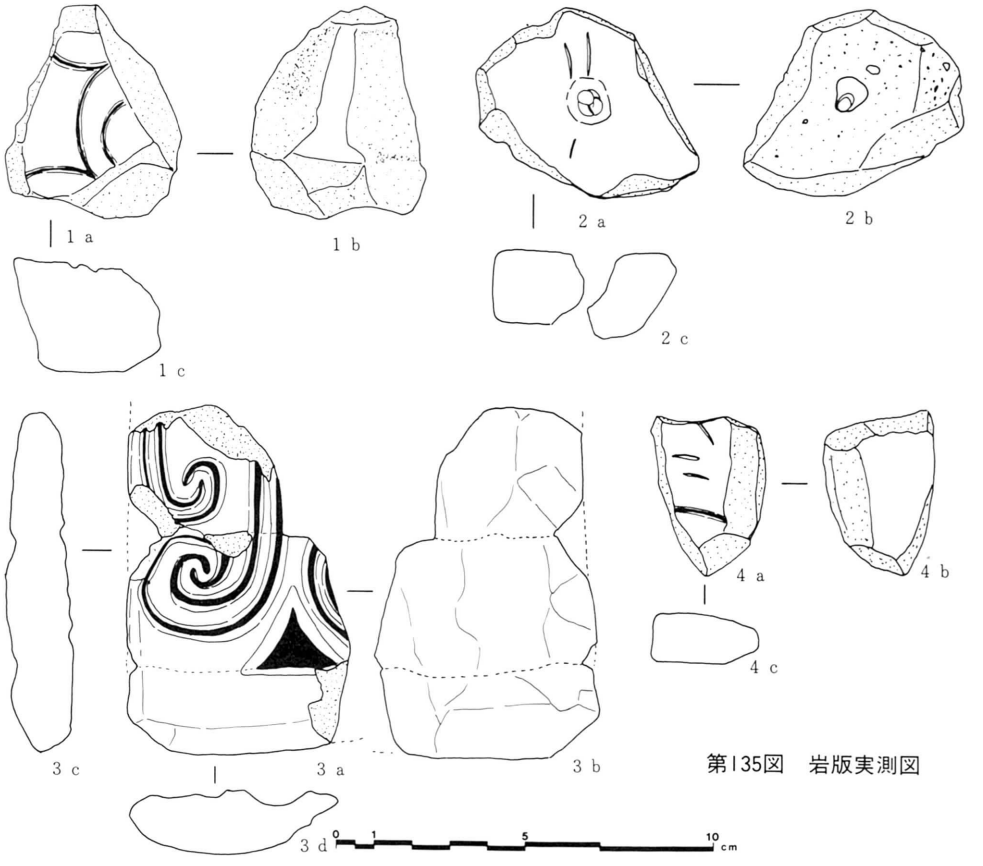
岩版の編年的研究には、江坂輝弥氏の諸業績がある。氏は早く岩版を11種に分類され、第1～9までを雨滝式

併行、10・11類を大洞C_1式併行とされた（註1）。後には5大別され、それぞれ大洞B^2式・BC式・C_1式・C_2式・A式・A′式併行とされた（註2）。本出土資料の大半は、氏の第3類に相当するものと思われる。本例の平面形が長方形と想定される点は若干気にならないでもないが、一応以上の如く考えておく。なお穿孔資料については詳細不明であるので、その存在のみを示しておく。

なお先の想定は上器等の出土結果と矛盾しないものであろう。

（註1、江坂輝彌　土偶　校倉書房　　昭和35年

（註2、　〃　岩偶と岩版　古代史発掘③　縄文時代2　土偶芸術と信仰　講談社　　昭和49年



第135図　岩版実測図

u　**その他の石器**　（第136図、図版52）　詳細不明の製品をここに一括した。

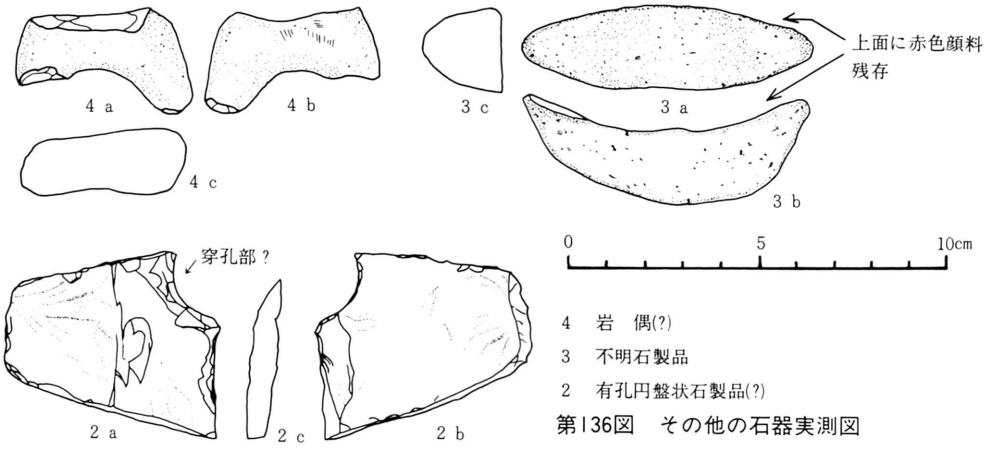
(1)　砥石と思われるもの　その形態からして砥石と思われる。出土地点を考慮すると近・現代のものであろう。

(2) 円盤状有孔石器　細片であり正確は期しがたいが、晩期にも比較的多く見られる有孔の円盤状石器（有孔石斧？）の可能性がある。

(3) 岩偶と思われるもの　調整痕を観察出来ないので人工品ではない可能性もあるが、一応こう呼んでおく。岩偶とすれば、下腹部～股にあたろう。

(4) 赤色塗料の粘着したもの　三日月形の礫の内湾部に赤色塗料が付着していることから、何らかの用途に供されたものであろう。それ自体が目的とされた、あるいは塗料原料の粉粋具などの可能性があろう。

(5) 石臼　これは近世の排水路から出土しており、比較的最近のものであろう。



4　岩　偶(?)
3　不明石製品
2　有孔円盤状石製品(?)

第136図　その他の石器実測図

v　**装飾品と思われるもの**　（第70図、図版35）　詳細不明の磨製製品を一応こう呼んだ、その一端を斜位に研磨してある。材質は玉髄である。

上と同様に用途不明品である。

w　**円盤状石器**　（第137～143図、図版53）　その周縁を剝離し、大略円盤状に仕上げた石器を仮にこう名付けた。またそれらの整理結果を第61表に示した。これらを用いて、概括的な説明を行なう。

(1) 形態　A　円形B　楕円形C　隅丸の方形に近いもの、の三種に大別可能であるが、基本形態は円形と見做してよいと思われる。したがって、計側値の直径は、Cのものはその長径をもって記している。しかし、一応それらの比率を示すと、A 45.4%、B 25.6%、C 29.0%と

なる。

(2) 大小・Yの直径の度数分布を基礎にすると、次のような五大別が可能であった。即ち、Ⅰ 5.4 cm以下、Ⅱ 5.5～5.9 cm、Ⅲ 6.0～6.9 cm、Ⅳ 7.0～7.9 cm、Ⅴ 8.0 cm以上である。その比率はⅠ 15.5%、Ⅱ 24.3%、Ⅲ 37.5%、Ⅳ 18.6%、Ⅴ 4.1%となり、Ⅴが若干少ないが、Ⅲを中心に四種が並在しる形をとっているといえよう。それぞれの大きさの中における三種の形態の存在状況の比率は次のとおりである。これをみれば、いずれにおいても三種の形態が併存するのが基本的動向のようである。ただし、ⅠにおいてBが、Ⅳにおいて B が少ないのがやや顕著な特徴に見えるし、Ⅴにおいて B が半数を越えるのは、他に比し異常ともみえる。これは、Ⅴと B の対応関係を想定すべきかとも思われる。

	A	B	C	
Ⅰ	53.1	6.1	40.8	(49) 100
Ⅱ	41.6	20.8	37.7	(77) 〃
Ⅲ	38.7	37.0	24.4	(119) 〃
Ⅳ	61.0	18.6	20.3	(59) 〃
Ⅴ	30.8	53.8	15.4	(13) 〃

(3) 剥離状況について　剥離の技法・状況、とりわけ coating の残存状況を手掛りとすると大略 6 ～ 7 種の類型がある。即ち(1) 全周縁剥離、(2) coating 残存部 1 、(3) 同 1 なるもその範囲の広いもの、(4) 同 2（ただし両者が相対する位置にあるもの）、(5) 同 2（ただし両者が連続するもの）、(6) 剥離が部分的で周縁のほとんどに coating が残存するもの、(7)不明、である。加撃方向は片側よりのものと、両面よりのものの二種があり、あたかも chopper と chopping tool のそれのようである。

	1	2	3	4	5	6	7	計
Ⅰ	57.1	18.4		6.1	8.2	10.2		49
Ⅱ	44.2	29.9	2.6	2.6	3.9	13.0	3.9	77
Ⅲ	47.9	23.5	1.7	5.0	5.0	11.8	5.0	119
Ⅳ	44.1	16.9	8.5	8.5	8.5	5.1	8.5	59
Ⅴ	30.8	30.8			15.4	15.4	7.7	13

Ⅰ～Ⅴにおいてはすべて 1 が圧倒的多数を占め、これが本来的な技法であったと見做すべきであろう。しかし、(2)の存在も無視することは出来ず、これも基本形の一つと見做されるべきかとも思われる。それ以外のものは成形途上の姿を示していると解されるべきものであろうか。

なお、既述の三形態との対応関係をみると、Aにおいては(1)59.7%、(2)20.1%、Bは(1)53.1%、(2)21.1%、(6)11.8%、Cにおいては(1)21.7%、(2)30.4%、(5)15.2%、(6)17.4%となる。この点からしても(1)・(2)が基本形をなす可能性は指摘出来るであろう。

(4) 破損状況について　完全品が多い資料であるが、破損品も若干存在し、それらについて 7 種の類型を想定した。それと前記の大小との関係を示すと次のとおりである。これからするとその使用状況は破損を生ぜしめる可能性のあまり強くないものであったと考えることも出来よう。破損状況の中では、(1)・(2)・(6)などが比較的多いとも見える。

	完全品	破　損
Ⅰ	91.8%	8.2
Ⅱ	93.5	6.5
Ⅲ	92.4	7.6
Ⅳ	89.8	10.2
Ⅴ	92.3	7.7
計	292 92.1	7.9

第61表　円盤状石器模式図・集計表

・〔形態〕　A　B　C　〔大きさ〕　I　5.4cm以下　II　5.5～5.9　III　6.0～6.9　IV　7.0～7.9　V　8.0以上

・〔剥離の範囲〕　(1)　(2)　(3)　(4)　(5)　(6)　(7)　不明（破片）

・〔破損〕　完全　(1)　(2)　(4)　(5)　(6)　(7)

〔細破砕〕　(1) 有　(2) やや有　(3) 無
（断面部に多い）

		タイプ	剥離 (1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	不明	破損 完全	1	2	3	4	5	6	7	細砕 (1)	(2)	(3)	その他
53.1	26	I－A	17	5		2		2		26								16	4	6	
6.1	3	B	3							3								2		1	
15.5 40.8	㊱ 20	C	8 ㊴	⑨		1 ③	4	3 ⑤		20 ㊱								5 ㊴	1 ⑤	14 ㊴	
41.6	32	II－A	22	7		1		1	1	30		1						28		4	
20.8	16	B	9	3				2	2	14	1	1						12	2	2	
24.3 37.7	㉕	C	3 ㉔	13 ㉕	2 ②	1 ②	3 ③	7 ㊾	③	28 ㉕	①	②						15 ㊾	2 ④	12 ㊾	
38.7	46	III－A	28	10		1	1	4	2	42		2				2		39	2	5	
37.0	44	B	23	9	1	2	1	5	3	41		1			1	1		37	1	6	
37.5 24.4	119	C	6 ㉓	9 ㉙	1 ②	3 ⑥	4 ⑥	5 ㊾	1 ⑥	27 110		③			①	1 ④	1 ①	14 ㊾	4 ⑦	11 ㊷	
61.0	36	IV－A	16	7	2	4	2	1	4	31	2			2		1		18	12	6	
18.6	11	B	7	2			1	1		10	1							9	2		
18.6 20.3	㊾ 12	C	3 ㉙	1 10	3 ⑤	1 ⑤	2 ⑤	1 ③	1 ⑤	11 ㉓	③	1 ①		②		①		2 ㉙	5 ㊾	5 ㊶	
30.8	4	V－A	3						1	3					1			4			
53.8	7	B	1	3			1	2		7								5	2 ㉒		
4.1 15.4	㊸ 2	C	④	1 ④			1 ②	②	①	2 ㊸					①			㊾		2 ㉒	
			149	㉔	㊾	㊾	㉔	㉔	㊾	295	④	⑥		②	②	⑤	①	206	㉕	㉔	
	317		47.0	23.3	2.8	5.0	6.3	10.7	4.7	93.1								68.1	11.7	23.3	

(5) 細破砕部について　剝離された断面（厚み）部分に細かい破砕部をもつものも観察出来た。その結果をみると、(1)・(2)をあわせると80%に近い。したがってこの種資料は何らかの細破砕を伴なう用いられ方をしたことは確実であろう。そしてそれはいわゆる敲打などのものを含むものではあったろう。

(6) 重量について　完全品を中心に選び、その長径と重量の関係を第75表に示した。これから明白な傾向性を看取出来ないが、大略次のことはいいうるかと思われる。即ち、大小のⅠは50g前後（100g以下）、Ⅱは50～120g、Ⅲは100g～150g以下、Ⅳは150前後、などのものが比較的多いといえよう。大体現行の50g単位にその集中のピークが存在するとも見えるのである。これらが意図的な結果とは必ずしも限らない。(同一の大きさの中の重量分布のが大きいことからもそれは明白である）であろうが、一応の傾向として提示しておく。なお厚さは各タイプともほぼ一定している。

(8) 表面は平滑なものが多い。あるいは研磨をうけているかもしれない。

(9) 材質については輝石安山岩への極端なまでの集中が特徴である。

この種遺物は、縄文時代中期以降に散見できるが、一遺跡における出土数が極端に多くなるのは晩期以降と思われる。類例は多いが、北上市九年橋遺跡（註1）、水沢市里槍遺跡（註2）、稗貫郡大迫町小田遺跡（註3）、県外ではあるが、宮城県栗原郡一迫町山王囲遺跡等（註4）、が比較的著名である。うち九年橋遺跡出土例にはアスファルト付着例、小田のそれには赤色顔料付着例が知られている。しかしその機能等については不明というほかはない。

註1）　九年橋遺跡第3次調査報告書　文化財調査報告書第18集　北上市教育委育会　昭和52年3月
　　〃　第4次　〃　〃　第23集　昭和53年3月

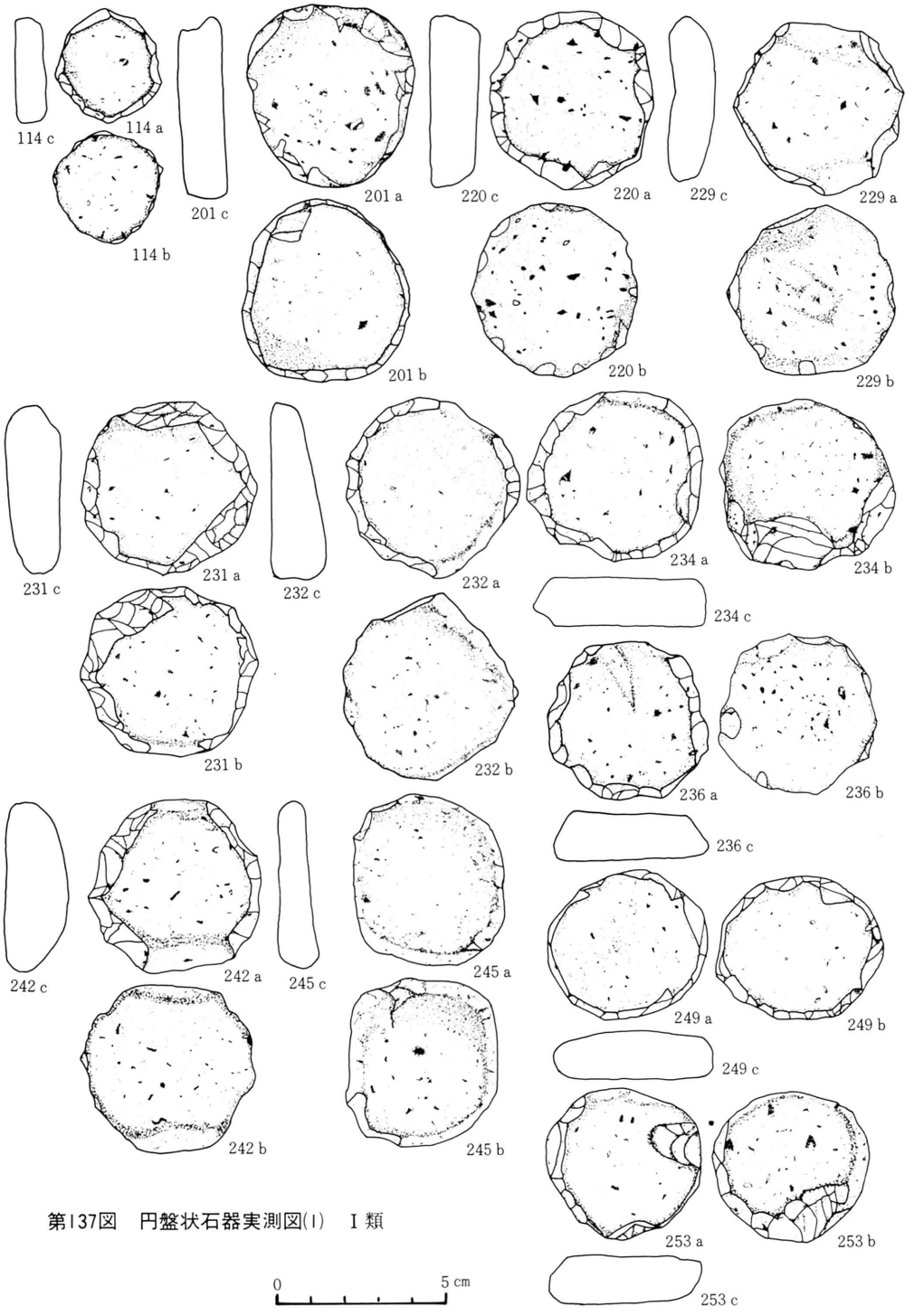
註2）　水沢市史1　原始・古代　水沢市史刊行会　昭和49年11月

註3）　岩手県稗貫郡大迫町 小田（こだ）遺跡発掘調査報告書 大迫町　埋蔵文化財報告第4集　大迫町教育委員会 昭和54年3月

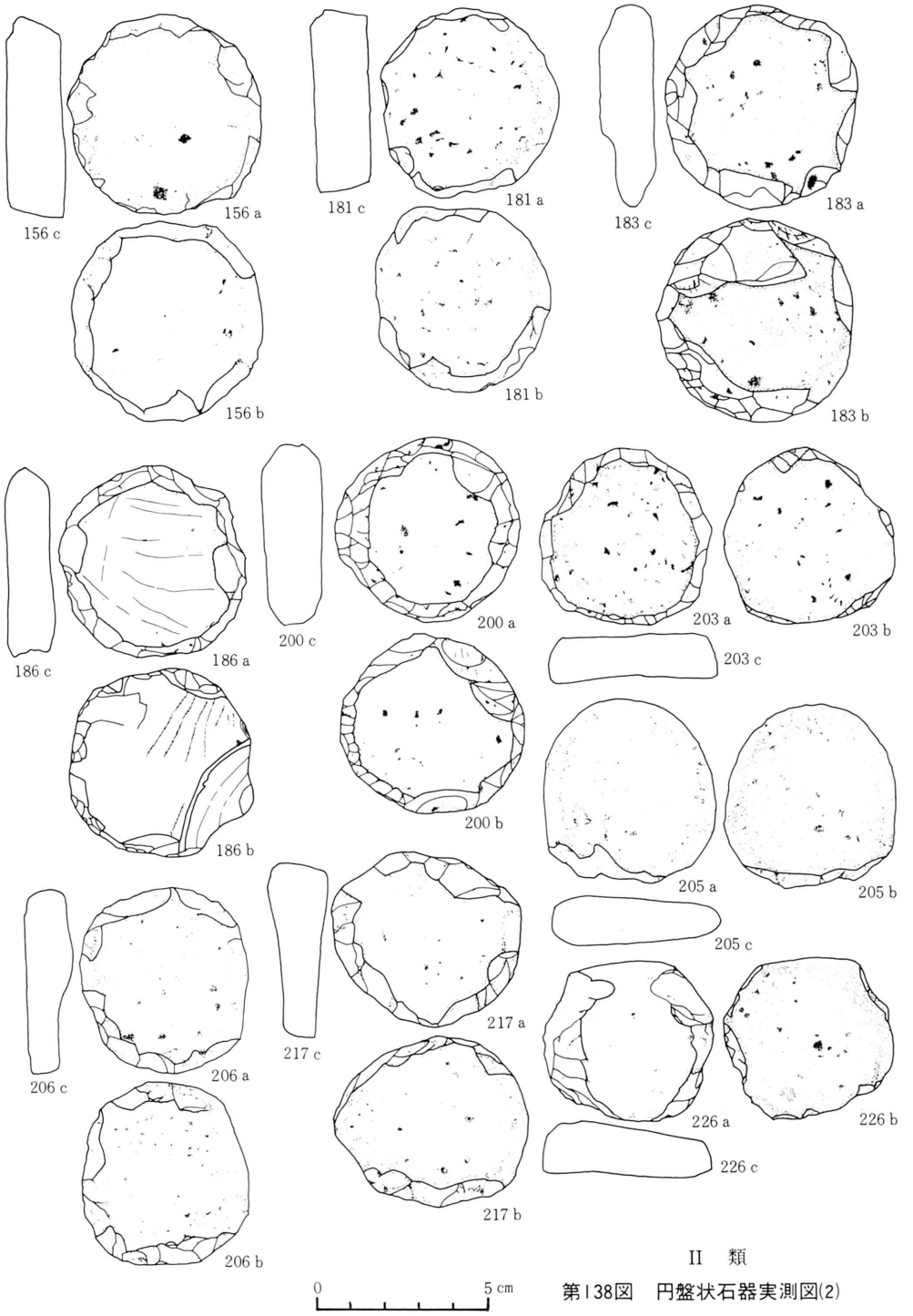
註4）　資料実見による。

第62表　円盤状石器材質一覧

材質名	I	II	III	IV	V	計	比率
珪質細粒凝灰岩		2				2	0.6
凝灰質粘板岩		2				2	0.6
砂質粘板岩	1	2		1		4	1.3
輝石安山岩	44	67	111	55	5	282	91.3
淡緑色砂質凝灰岩		1				1	0.3
フリント質凝灰岩	1	1				2	0.6
粘板岩		2	4			6	1.9
硬砂岩	1					1	0.3
硬質泥岩	1					1	0.3
泥質凝灰岩	1					1	0.3
流紋岩			2	2		4	1.3
石質凝灰岩			2	1		3	1.0
計	49	77	119	59	5	309	

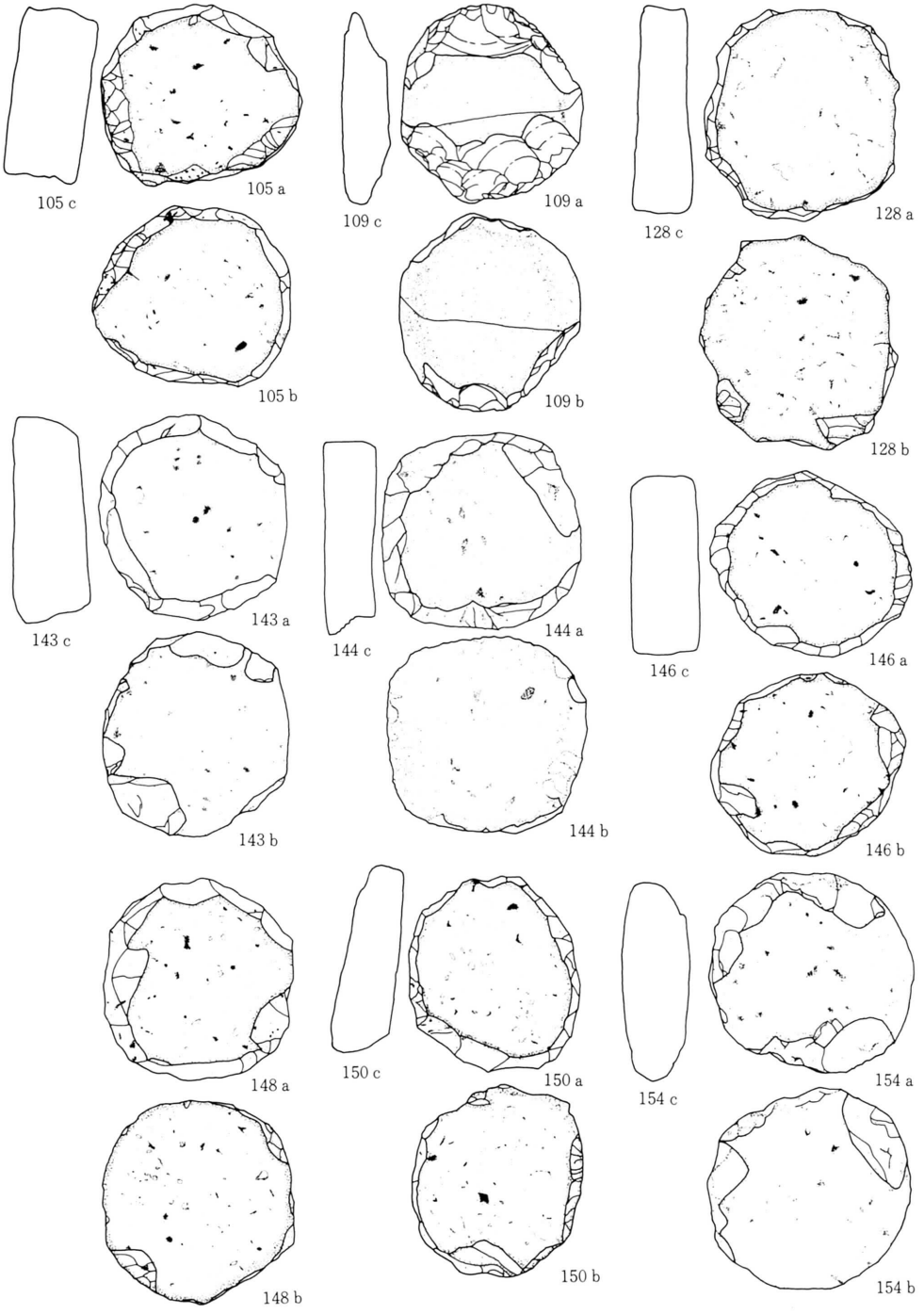


第137図　円盤状石器実測図(1)　Ⅰ類



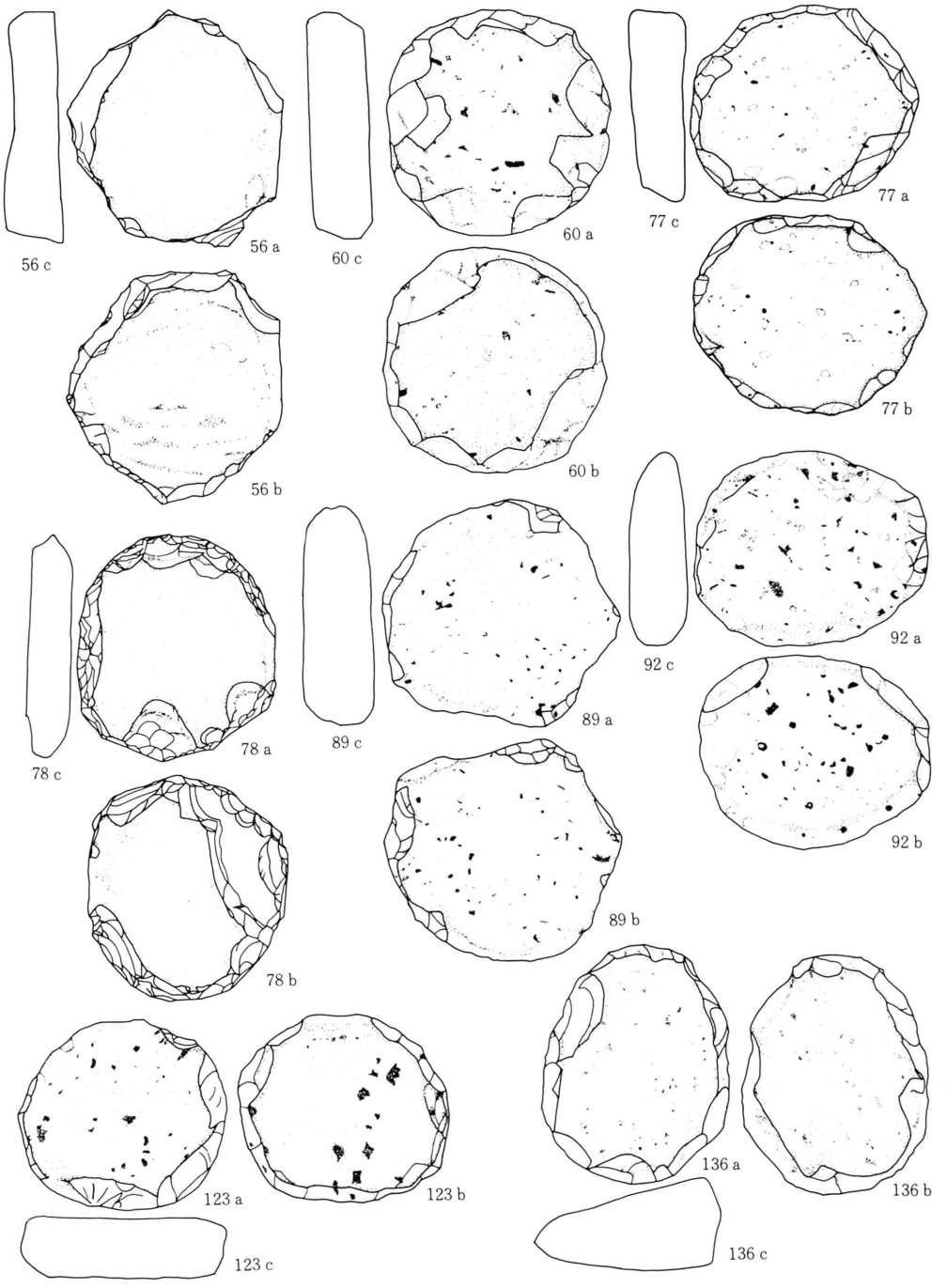
II　類

第138図　円盤状石器実測図(2)



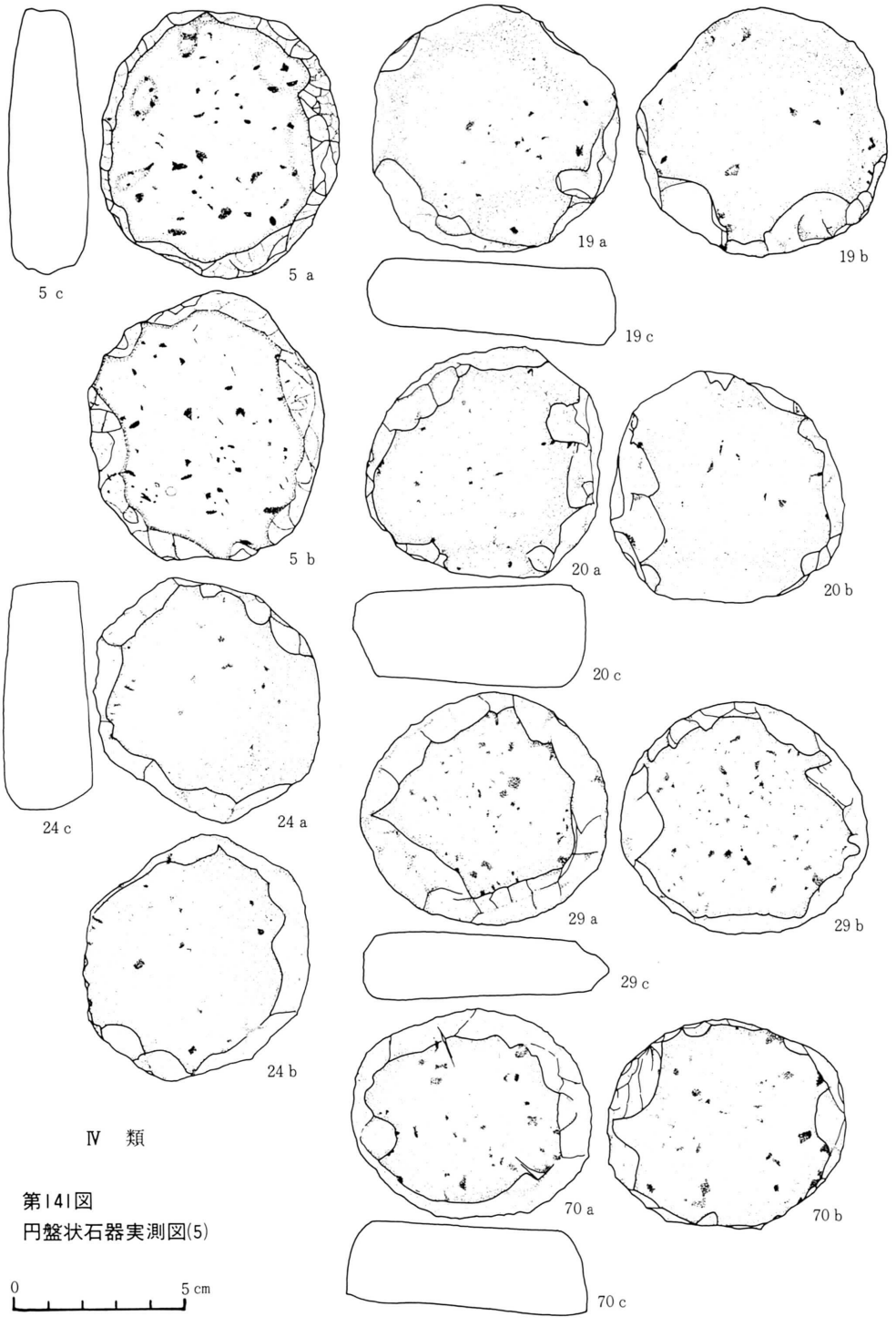
第139図　円盤状石器実測図(3)　II類

0　5 cm



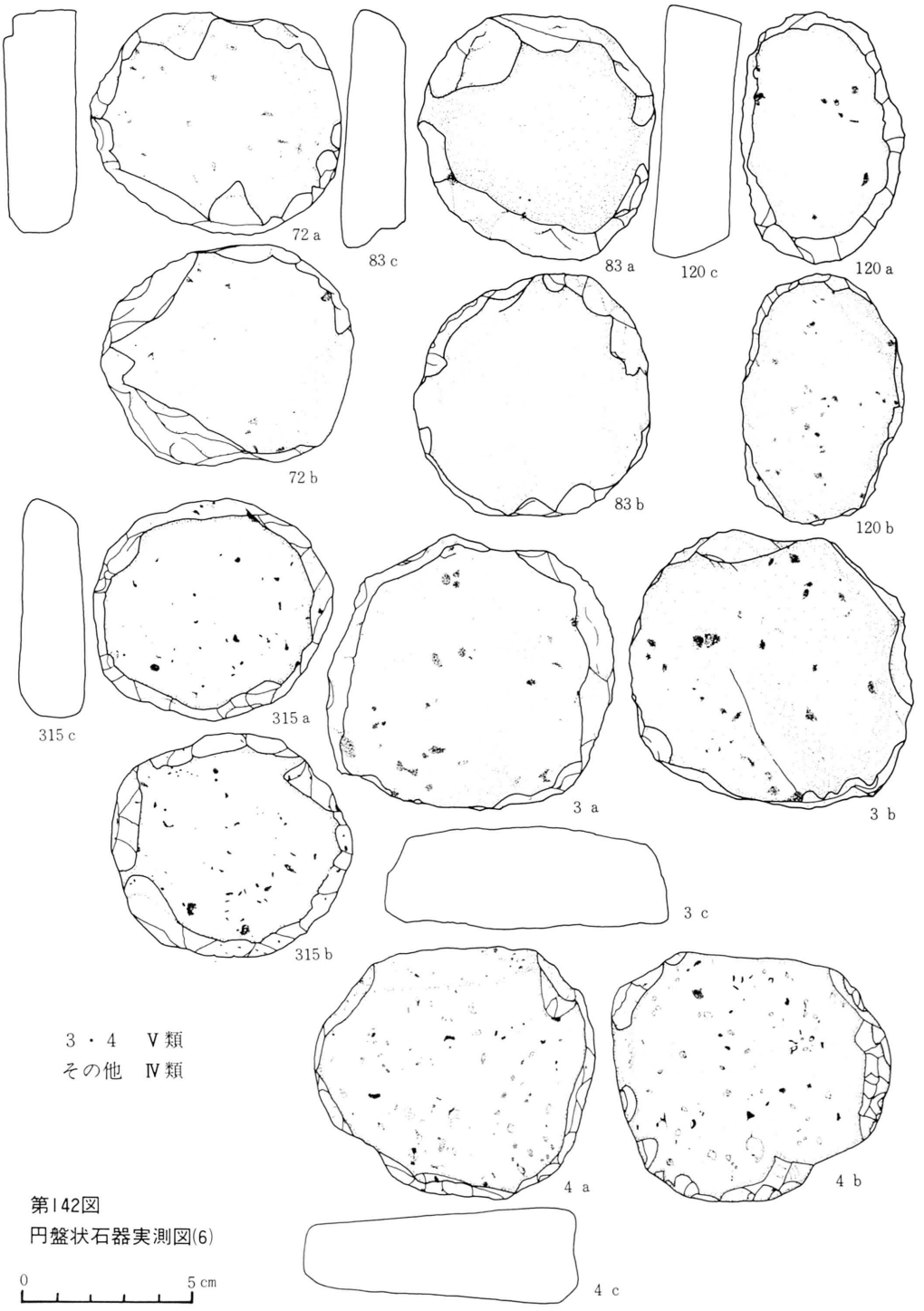
0 5 cm

第140図　円盤状石器実測図(4)　III類



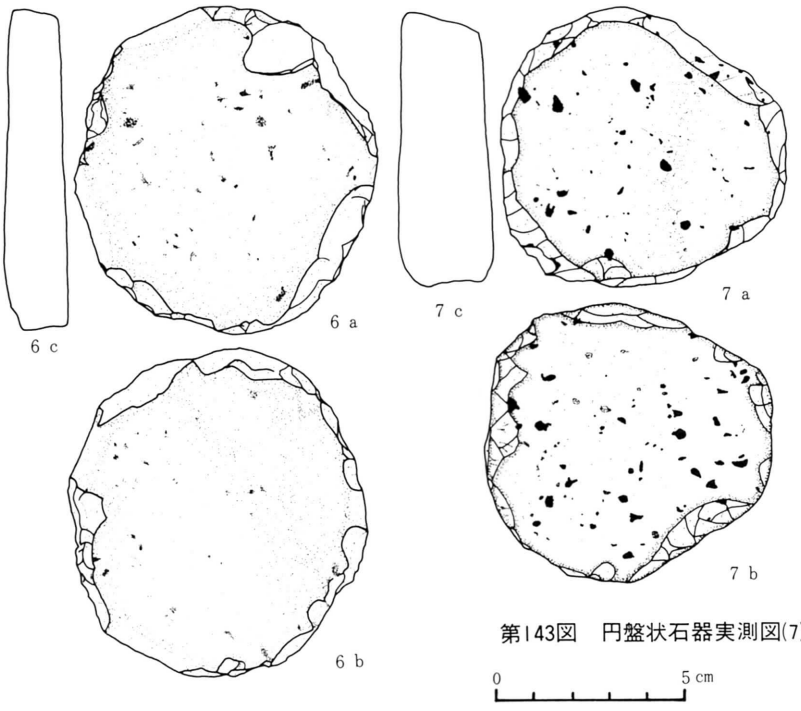
Ⅳ　類

第141図
円盤状石器実測図(5)



3・4　Ⅴ類
その他　Ⅳ類

第142図
円盤状石器実測図(6)



第143図　円盤状石器実測図(7)

素　　材　　名	数	比率
フリント質珪質凝灰岩	16	15.5%
珪質白色細粒　〃	15	14.6%
輝　　緑　〃	7	6.8%
硬質泥岩	39	37.9%
粘板質チャート	8	7.8%
チャート	2	1.9%
黒よう岩	2	1.9%
玉ずい	4	3.9%
赤色めのう	10	9.7%
合計	103	／

第 25 表　石鏃 D 類材質一覧

素　材　名	数	比率%
フリント質凝灰岩	3	9.7
珪質細粒凝灰岩	3	9.7
珪質泥岩	7	22.6
硬質凝灰質泥岩	18	58.1
計	31	／

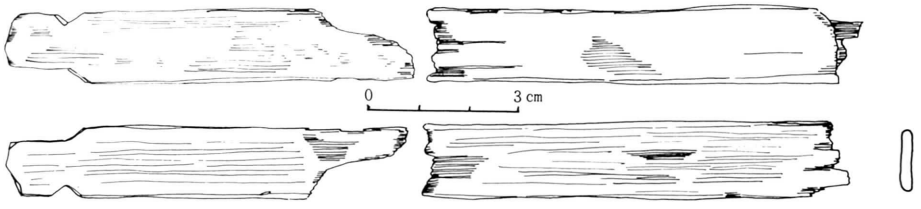
第 45 表　湾入部ある掻器材質一覧

E．その他の遺物

a　**木器と思われるもの**　（第144図、図版54）　明らかな加工痕が残存する板材を仮にこう名づけた。二片であるが同一個体と思われ、それを加味した現長16.6×1.4×厚さ0.2㎝である。断面形態は長方形である。表面の加工痕（削り痕など）は観察しえない。一端において、端部より1.2㎝の部分の両側面に、織維の走向に直角に近い三角形の切り込みが加えられる。その縁部は鋭利であり、石器による加工とは見えない程である。一方は切り込みから端部にむけて破損している。端部にも若干の加工が施こされ、やや丸味を有する。しかし、これは破損の可能性皆無ではたい。彩色等は認められない。

縄文時代の木器、ことに晩期のそれについては、昭和七年一月発行の「日本石器時代植物性遺物図録」に詳しい（註2）。これに紹介されている木器類は次のとおりである。即ち、編物・漆塗飾弓・白木弓・漆塗飾木太刀・箆状木製品・漆塗木製脚付杯・漆塗木製器具類・漆塗櫛・同耳飾・同腕輪・漆塗織維性容器・朱漆文様入樹皮製品・木材加工品・蔓製品等である。これらの諸遺物の正確な時期は判然としないが、大略晩期にかかわるものとは見做しうるであろう。本遺跡出土資料をこれらと比較すると極似するものは見あたらない。強いてあげれば、同書P.L.16～19の箆状木製品に若干類似するとはいえるであろうか。しかし、これらには彫刻が施こされる、端部に二個一対の小突起がつくり出される、全形は狭長な楔型を呈す、等々の特徴が伴ない、本例とは異なる点の方が多い。したがって箆状木製品との強弁は行なわない。木偶とも見えないわけではたいが、用途は不明としておく。材質はヒバあるいはヒノキである。

註1）　日本石器時代植物性遺物図録　財団法人　斎蒔報恩会　昭和7年1月



第144図　木器実測図

b　**植物遺存体**　（図版54）　植物遺存体として区分したものは、炭化木材・通常木材片（含木器）・種皮等である。炭化材は既述の焼土中（晩期前半主体）より、種皮類は晩期後半を主体的に出土する黒泥層を主とする湿地(B地点)より検出されたものが主である。

(1)　種皮・種皮類の鑑定は農林省岩手林業試験場村井三郎氏に依頼した。それによると、オニグルミ、コナラの二種が同定出来た。

直良信夫氏によると晩期の例たる是川遺跡よりはクリ・アカガシ・トチノキ・オニグルミ・ヤマザクラ(？)・イチイ・スギ・モミ・ヒノキ・フヂ・ブドウ・アケビ・クマザサ・ススキ・莎

草等の植物が出土し、うちクリ・トチノキ・オニグルミ・ブドウ・アケビ・ヤマザクラ・フジ等の果実は十分食料として通用するものである、とのことである（註1）

渡辺誠氏によると（註2）縄文化遺跡検出の野生植物遺存体は次のとおりである。カヤ・イヌガヤ・ハイイヌガヤ・ヤマモモ・オニグルミ・ヒメグルミ・ハシバミ・ブナ・クリ・コナラ・ミズナラ・クヌギ・カシワ・アカガシ・アラカシ・イチイガシ・ツブラジイ・スダジイ・マテバシイ・カジノキ・ヤマゴボウ・ハス・シヤリンバイ・サンショウ・イヌザンショウ・アカメガシワ・チャンチンモドキ・トチノキ・ノブドウ・マタタビ・ツバキ・ヒシ・アズマビシ・ウリ科の一種・マコモ・ササ類・クログワイ・ノビル等、堅果類を中心とした38種である。
この他のたとえば根茎類・草本類・木の葉等も当然食料化されたであろう。また落葉広葉樹林帯たる東日本においてはどんぐりではナラ類、他にトチ・クリ・クルミなどが特徴的に存在する。堅果類と根茎類はおもに秋に、草本類は春にその採集が偏ることが多かったのであろうとのことである。

本遺跡出土資料もわずかに2例ではあるが、これらの事実と矛盾の無い内容をもつといううるであろう。

註1　直良信夫　古代人の生活と環境　校倉書房　1974年

註2）　渡辺誠　食生活の変遷　古代史発掘2 縄文土器と貝塚所収 講談社　昭和53年

遺跡出土植物遺体鑑定報告書（抜粋）

岩手県文化財審議会委員　農学博士　村井三郎

I　鑑定目録

No.	14	不明	No.18	コナラ種皮
〃	15	コナラ種皮	19	オニグルミ種皮
〃	16	〃	20	〃
〃	17	〃		

II　所見

植物遺存体はコナラとオニグルミが明らかになっているだけで、花粉分析の資料はない。コナラの種皮の多かったことは、食料として採集したとみるのが穏当のようである。この両種の資料だけでは気候を推定することは無理であるが、遺跡の沢沿いにオニグルミが、周囲にコナラ林が存在したことだけは明らかに出来るので、植物群落からみて現在気候と差異あるものとは考えられない。

c　**動物遺存体**　（第145図、図版53・54）　動物遺存体と区分しうるものには、骨角器類の加工品、獣骨・角類の破片、貝類破片等がある。いずれもⅢ層を中心とする焼土中から検出されており、火力をうけたことが残存の原因とも考えられる。いずれも細片化していた。金子浩昌氏の鑑定によると、その内容の一部は63表のとおりである。遺物量が少ない故にこの資料のみからでは動物相その他を云々することは出来ないが、獣骨にイノシシとシカが優越する点は、縄文時代通有の傾向と一致するものと見做すことは出来るであろう。

貝殻片はアサリを含む。縄文時代晩期の人間の行動範囲推定の好資料である。

以上の資料のほとんどすべてが細片化している原因は不明という他は無いが、焼土中からの出土に何らかの意味を認めることは出来よう。ただしそれが単なる食料残滓の破棄を示すか、何らかの儀式的なものを伴なった後のものかは不明である。本調査例の焼土は、その場で形成されたものとはにわかには認められない点については既に述べたとおりである。

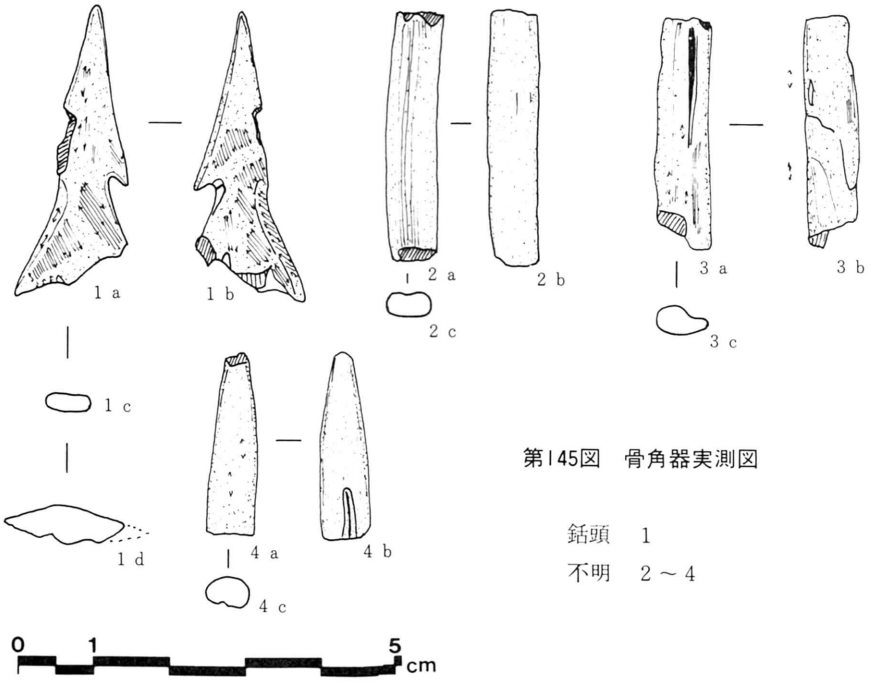
次に加工品をとりあげ、簡単な説明を行なう。第145図1は、いわゆる銛の先端部の破片である。素材を偏平にし、その両側に4ケまでの鐖が認められる。それらは左右相対の位置にはなく、若干ずれて配される。表面には擦痕が顕著に残存するが、その方向は各種ある。鐖の内側には、あたかも鋸の目立ての如き研磨痕が認められる。断面形態は先端部近くは偏平な長方形、現状の下端部（本来の体部中本部が）は、片面稜をなし、他面が凹凸ある形状を示す。稜は意図的なものであろうが、凹凸が素材に由来するか、意図的つくり出したかについては不明である。

海岸地方の貝塚出土資料と大差無いと思われるが、いわゆる固定銛あるいは離頭銛のいずれに属するかは不明である。

東登氏によると、岩手県気仙地方においては鐖のある固定鋸は大略縄文時代後期末～晩期の貝塚より出土する例が多い。また、大洞B・C_1式期の離頭鋸は、片鐖・無鐖の比較的簡略・小型のものであり、C_2式期にいわゆる燕形銛頭といわれるやや大型品が多い、とのことである（註）。本資料はその出土状況からして晩期前半（大洞C_1式期まで）に属する可能性の高いものである。本資料をいずれかに特定できる積極的根拠は少ない。いずれにせよ、遺物包含層、とりわけ岩手県内陸地方の出土例としては貴重なものであろう。

(2)～(4)は片面凹み、他面丸味をもった細長い骨の表面を入念に研磨したものである。研磨は当然ではあるが長軸方向に沿っている。他面の凹みは素材に由来しよう。用途は小片である故に不明とするほかは無いが、広義の刺突具のカテゴリーには含められるのであろう。

岩手県の海岸地域の貝塚より、比較的多く得られる骨角器は、釣針・銛・針・刺突具・箆・・いわゆる根挟み・装身具類・その他などであるが、本遺跡においてはそのうちの二種の出土をみたこととなる。非常に稀少例である故に強弁は避けねばならないが、海岸地域のそれに



第145図　骨角器実測図

銛頭　1
不明　2～4

第 63 表　骨片・骨角器等 鑑定結果

試 料 No.	出土地点	出土層位	所　　見	旧 No.
1	Bj(?)	IIIL	石　　片	13
2	Ｃｂｏ９	III	中型獣（？）骨片	11
3	Bj(?)	IIIL	イノシシあるいはシカ骨片	14
4	Cho3	III	加工品断片，刺突具 おそらく鹿骨製と思われる	20.21
5	〃	〃	要検討	1
6	Cho9	〃	イノシシ，右僥骨近位端部分	2
7	Cbo9	〃	イノシシあるいはシカの肋骨小片 1	7
8	Cb12	〃	小骨片 4	3(2/2)
9	〃	〃	イノシシあるいはシカ骨片	3(1/2)
10	〃	〃	シカの手根骨破片 1	〃
11	〃	〃	シカもしくはイノシシの四肢骨片 2	〃
12	〃	〃	シカ基節近位端	〃
13	〃	〃	中型獣（タヌキ位のもの）頸椎骨破片 1（前・後関節起部破片）	〃
14	Cb12	III	加工品断片，刺突具様のものと思われる	22
15	Cb18	〃	加工品ではなかったと思われるもの	8
16	Cc09	〃	イノシシ，右側後頭顆部分	16
17	〃	〃	鹿角小片	6
18	Bj15	〃	小骨片	4
19	Cgh(?)	〃	シカ基節骨遠位端部小片	5
20	Cg03	〃	逆刺をもつヤス状の刺突具先端部	23
21	Cb27	III	貝破片　アサリ（？）	10
22	〃	〃	貝破片　21 と同様のもの，鹹水産のものである	9

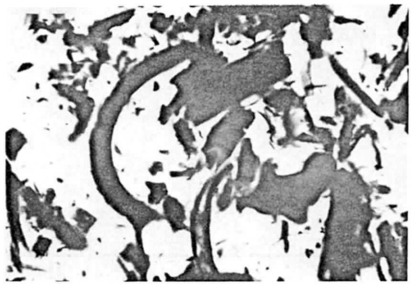
共通する要素を有するということは、縄文時代なる生産段階にあることから当然と見做すことは出来るであろう。

註）東　登　気仙縄文式時代の骨角製漁撈器具考＝特に釣針・銛・網繰りを中心として＝

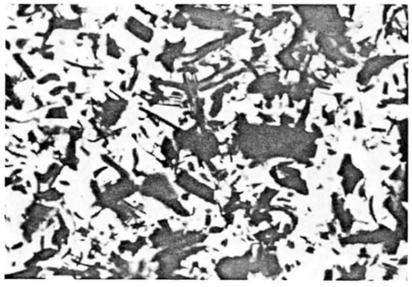
陸前高田市教育委員会　昭和33年

d　**花粉分析**　（第146図）　土器包含層中の土壌をサンプリングし、試みに花粉分析を実施した。晩期後半の遺物包含層が黒泥に近い故良好な分析結果を期待出来なかったからである。通常の包含層土である点から、花粉の良好な残存は期待出来なかったが、一応実施した。分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。以下はその結果を示す。

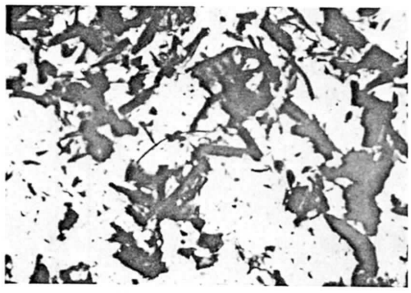
PLATE



1.
X365



2.
X183



3.
X183

第146図　花粉分析 Plate

花紛分析結果　パリノ・サーウ″ェイ株式会社

昭和54年8月31日

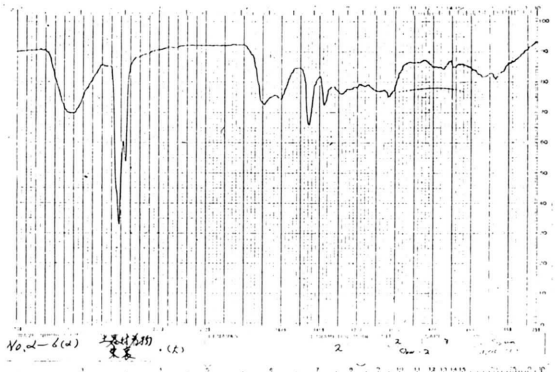
花粉分析の結果　この度の試料はＰＬＡＴＥにみられるように多量の有機物が存在するものの、花粉・胞子化石は非常に少なかった。検出された化石としては

Carduoideae（キク亜科）と

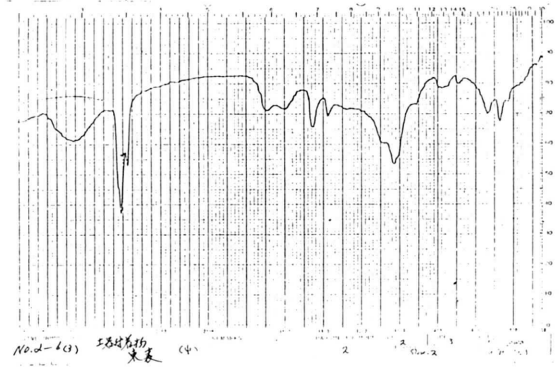
Artemisia　（ヨモギ層）

がそれぞれ1個体検出されたにすぎなかった。従ってCarduoideaeとArtemisiaが生育していたと考えられる。しかし古環境を推察するには、検出された花粉胞子が余りにも少なすぎるのがで不十分である。

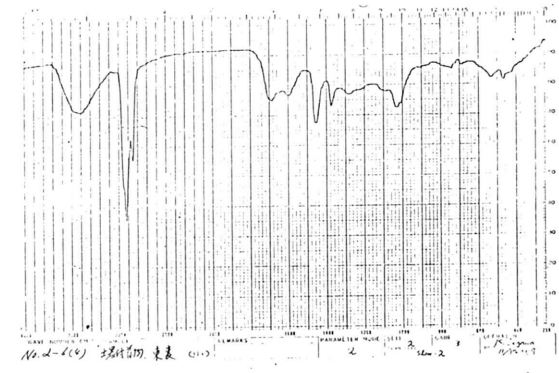
e　**顔料・被膜について**　得た顔料と土器被膜についてつぎの分析を実施した。



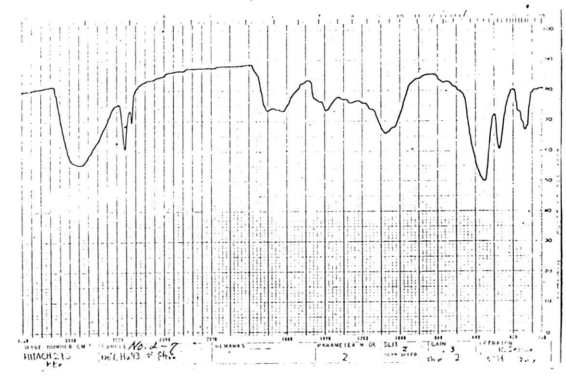
(1)



(2)



(3)



(4)

(1)～(3)　土器付着物

(4)　　土器面上塗料被膜

Bj15　Ⅲ（Ⅰc）

第147図　分光分析チャート

(1)　赤外線分光分析結果　岩手県工業試場（第147図）

No.２－６(2)　土器不着物

赤外線分光分析によると、試料はいずれも漆の吸収スペクトルとは若干異なり、またこれはベンゼンに容易に溶解しタール状となるので、漆ではないと推定される。

No.２－７　土器塗料被膜

赤外線吸収スペクトルでは、漆の吸収スペクトルとは異なり、またＸ線回析の結果では酸化第二鉄（ベンガラ）のピークが検出された。赤い被膜状の試料は顔料としてベンガラを用いたものと思われる

f　**炭化物の年代側定について**『測定結果報告書　　㈳日本アイソトープ協会

昭和54年7月11日に受取りましたC－14資料の測定結果がでましたのでご報告します。

3500＋100 Y.B.P.（3400＋95 Y.B.P.）

年代は^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとずいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（yearsB. P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計算の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}C年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95％となります。なお^{14}C年代は必らずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい（後略）』

出土地点からして晩期前半（大洞C_1式まで）にほぼおさまるものと思われる。従来の結果と大略同様であろうが、若干古い感がしないでもない。

g、**サメの歯化石について**　本調査において19点のサメの歯化石を得た。考古学的遺物の出土状況とまったく同一である。これらを岩手県立杜陵高校教諭 佐藤二郎氏 に同定を依頼した。以下にその結果を示す。

東裏遺跡から出土したサメの歯化石について　岩手県立杜陵高等学校教諭　佐藤二郎

出土したサメの歯化石は19個に達するが、これらによると、次のように5～6種に同定される。

Odontidae

Megaselachus megalodon（CHARLESWORTH）A（図版55－1、2）

Megaselachus megalodon（CHARLESWORTH）B（図版56－12）

Megaselachus sp. ?　C（図版55－4）

Megaselachus cfr. akitaensis（UYENO and HASEGAWA）（図版55－3 a）

Carcharodontidae

Cosmopoitodus hastalis（AGASSIZ）（図版56－1、2）

Cosmopolitodus trigodon（AGASSIZ）（図版56－3）

Isuridae

Isurus sp.　A～H、（図版56－4～11）

これらのうちMegaselachus megaladonは、いずれも歯牙最高長が12～13㎝に達するものと推定されるが、主に歯冠部のみが残され、歯根部は欠除している。これらはこのように巨大で、かつ、明瞭な鋸歯縁を有する点で容易に同種に同定される。M. megalodon B標本は、鋸歯縁が著しく磨耗し、明らかに使用した痕跡が認められる。また、M. megalodon A標本の鋸歯縁にも、わずかに磨耗している点が認められる。

Megaselachus akitaensisは、咬頭頂から歯根底辺中央部にかけて破断された左側部分のう

ち、歯冠下半部から歯根底までの部分が残されているに過ぎない。しかし、この残存歯根底から歯頸部を経て鋸歯縁下半部にわたる角度は、M. megalodon のそれに較べて角度が小さく、先きに UYENO and HASEGAWA が秋田県産のものについて Carchalodon akitaensisn. sp. と記載したそれと酷似する。したがって、後者に同定することが許されれば、この標本は、歯牙最高長が 14 cm程度に達していたものと推定される。

Cosmopolitodus hastalis および C. trigodon の化石はヨーロッパで産出が知られているもので、これまでわが国から産出した記録はないようである。これに対して、Isrus 属の歯牙化石は、わが国各地の中新統、鮮新統からよく産出する。

東裏遺跡をとりまく衣川下流域一帯には、中部中新統に属する下黒沢層と呼称さる細粒砂岩層が分布しているが、同層の中から、これまでいくつかの M. megalodon が採集されている。このことから、これらの化石は、下黒沢層から産出したものと判断してほぼ間違いがないだろう。

また、M. megalodon に明瞭な使用痕が認められることから、なんらかの利用目的をもって－おそらく加工用具として－採集したものと推定される。

註1）L. S. GLikman 1964. Osnovy paleontologii、vol. XI 、p. 231、tablica v、figs. 5. 6. 7、lzdatel'stro "Nauka", Moskva. (in Russian)

2）Teruya UXENO and Yoshikazu HASEGAWA、1974. A New Miocene Lamnoid Shark, Carcharodon akitaensis、from Central Japan. Bull. Nat. Sci. Mus. vol. 17、No. 3 、1974.

Ⅳ　まとめと若干の問題提起

本事前調査によって得られた資料の〝基礎的事実〟の一部は以上述べてきたとおりである。以下には、それら〝基礎的事実〟の中の数項目を選択し、若干の問題提起とまとめを行なうこととする。しかし、遺物の整理を必ずしも完全に終了していないのが現実でもあり、あくまでも現時点におけるそれしか行ない得ない点をあらかじめことわっておく。遺跡・遺構・遺物の順にふれる。なお遺物の一部については、分析・鑑定の結果報告とかねるものもある。

1　遺跡の立地について

本遺跡が至近の距離に川をひかえた微高地（低位段丘他の縁辺部）に立地することは既にのべた。このような遺跡立地は各時代に見られるが、縄文時代についてみると、とりわけ晩期のそれとして占地されることが多いと思われる。類例を求めると稗貫郡大迫町小田遺跡（稗貫川と大沢川を北にひかえた中位段丘の北縁部、大洞B～C_2式相当[注1]）、北上市九年橋遺跡（和賀川北岸の自然堤防上、大洞C_2式主体[注2]）、水沢市里槍遺跡（低位段丘が開析された低地上の小河川周辺の自然堤防上、大洞C_2式主体[注3]）、水沢市杉の堂遺跡（北上川を東に臨む低位段丘の縁部部、ただし現河床との比高はかなり高い。晩期の各期と一部弥生式[注4]）、一関市谷起島遺跡（低位段丘上に形成された微高地、磐井川・赤子川・後背湿地等をひかえる。現在までのところ大洞A・A′式、弥生式[注5]）、などが著名である。この他にも、たとえば前沢町河岸場遺跡、一戸町蒔前台遺跡等の例がある。

県外における最近の例では、宮城県栗原郡一迫町山王囲遺跡（一迫川と長崎川の合流点近くの低位段丘上の微高地、大洞C_2～A′式、弥生式）、同巻堀遺跡（一迫川北岸の狭い河岸段丘上、大洞B-C～A′式[注6]）、青森県新郷村咽畑遺跡（清水川上流域のもっとも新しい低平な河岸段丘上、大洞C_2式～A′式[注7]）、なども知られている。

以上の立地・占地を縄文時代晩期の遺跡立地の一特徴と見做しうるか否かについては今後も資料の蓄積と検討を要しよう。たとえば、その生業論的検討などはまず行なわれなければならない。その意味で本遺跡出土資料中に明白な漁撈具、とりわけ網漁関連の遺物が欠落しているとも見える現象はやや理解に苦しむ。その一方でほぼ同一立地・占地を行なった南隣の北館遺跡の平安時代相当の竪穴住居跡より所謂土錘が多量に出土した事実もあるのである。したがって直ちに河川を対象とした漁撈との関連のみを想定するだけでは不十分であろう。

次に、この種の占地が弥生時代のそれにも共通する側面も看過しえない。そのすべてではないがこの種占地の遺跡からは晩期前終末から弥生時代の遺物が得られているのは事実である。したがってこの種の生業論的観点からの検討も必要であろう。

伊藤鉄夫氏の教示によると、胆沢扇状地の扇頂部付近の胆沢町西部の宮沢原周辺、扇端部の

水沢段丘面上のいずれにおいても、時代・時期による遺跡立地・占地の移動・変遷がある由である。それはいずれにおいても、縄文時代晩期になると、より下位の面・地点へ立地する傾向があるというものである。高位に残る晩期遺跡は小規模化もするらしい。

また胆沢扇状地においては後続する弥生時代・古墳時代・古代にかけても遺跡立地の変遷をたどれる。その大略の傾向は「より低位への占地→それに加えてより高地への占地(つまり占地対象地の拡大傾向)」という図式になる。その背景は末だ解明されてはいない。しかし現象的には、古墳時代・弥生時代のそれと縄文時代晩期遺跡（の一部）のそれが共通するかの如くである。

いずれにせよこの問題は今後追究さるべき課題である。

註1）　岩手県稗貫郡大迫町小田遺跡発掘調査報告書（大迫町埋蔵文化財報告書第4隻）大迫町教育委員会、昭和54年3月

註2）　九年橋遺跡第3次調査報告書　文化財調査報告書第18隻　北上市教育委員会　昭和52年3月

〃　第4次　〃　第23隻　〃　昭和53年3月

註3）　水沢市史1　原始・古代　水沢市史刊行会　昭和49年11月

註4）　同上

註5）　岩手県一関市萩荘　谷起島遺跡第一次発掘調査報告書（ＬＯＣ。Ａ）　一関市教育委員会　昭和52年9月

註6）　巻堀遺跡　一迫町教育委員会　昭和52年3月

註7）　新郷村咽畑遺跡の調査一咽畑遺跡発掘調査報告書一亀ヶ岡文化研究会調査研究報告書第1集　亀ヶ岡文化研究会　1979年1月

2　遺跡（遺物包含層）の性格について

本遺跡が遺物包含層のみからなることは既に述べたとおりであるが、その性格について若干ふれておく。ただしその範囲が限られた事前調査たる調査の性格からする大きな制約があり、詳細は尽しがたいが、周辺の地形・分布調査その他の補助的資料を援用し、それを試みる。

(1)　本包含層は「集落」に附属したものであった可能性がある。この場合の集落には〝母村〟的意味を多少こめており、所謂キャンプサイト的な短期間のそれを想定していない。これはＡ・Ｂ両地点の西方（南方も）が一段高い福原面に相当する平坦面をなし、そこより焼土・炉と思われる礫・完全土器他多数等（晩期の各期のものからなる）の出土をみたという事実[注1)]から想定したものである。

キャンプサイトなどの短期間の居住地においても遺物包含層の形成（乃至土器の廃棄）が行なわれることは既に明らかであるが[注2)]、本遺跡は上述の理由で〝母村〟的なものに付属・形成されたものと考えておく。

岩手県地方においても縄文時代各期の〝集落〟跡の調査が進み、その占地の変遷・構成要素等が急激に明らかになりつつある。そのうち構成要素を簡単に見ると、ⓐ竪穴住居、ⓑ貯蔵穴様のピット、ⓒ墓乃至墓拡様のピット、ⓓ陥し穴状のピット、ⓔ屋外炉穴様ピット、ⓕ屋外炉(?)、ⓖ遺物包含層、ⓗ湧水地他の〝水場〟等などからなるらしい。それぞれを若干詳しく見ると、ⓐには規模の異同があり、所謂大型住居（長径20 m以上のものも稀ではない）、中型、小型まで各種が存在し、その組みあわせにも種々（時期的・機能的）の類型があるらしい。住居規模と屋内炉の数・配置・形態などにそれは典型的にあらわれている。岩手県の現状では、大型住居は貝殻文土器盛行期にその初現が求められる。[注3)] ⓑはその縦断面形他に数タイプが存在するが、竪穴住居にかなり近接して存在することが多いのは確実である。検出された両者の数量比からすると、一棟の住居に数基のピットが伴なっていた可能性が大である。ⓒにも同様に数類型ある。その詳細な把握は今後の課題であるが、ピットをなすものには平面小判形のものなどがあり、さらにその周辺に柱穴様のものを伴なう例もある。したがって何らかの施設を伴なう墓乃至墓拡が存在した（ひいては何らかの儀式が）可能性が極めて大である。[注4)] ⓓは従来〝溝状土拡〟などと呼称されてきたもので数類型ある。若干巾広で、その底面に複数の小ピットを有するタイプは〝陥し穴〟状ピットなる呼称がふさわしい。後期に属する確実例がある。これが居住域（竪穴住居の集合区域）に近接して（同時に）併存したか否かは若干の検討を要しよう。この種遺構単一からなる遺跡が多く存在し、さらに、居住域たる竪穴住居近くに検出された例の多くに、それとの重複現象が認められ、両者に時間差を想定する必要のある例も多いからである。ⓔ・ⓕは省略するが、ⓕの中にはその壁を確認できなかった竪穴住居の屋内炉を含む可能性もあるが、それ以外の例と思われるものも多く、独立した一項目として扱かっておく。ⓖにはその形成位置・廃棄状況に数類型ある。前者には自然地形の凹部・斜面などを選択するものと、廃絶家屋などを利用して廃棄するものなどがあり、それぞれに時代・時期・地域における差・特色があるらしい。またその利用状況（廃棄の過程における）にも数類型があるらしく、廃棄の場のみならず何らかの生産活動（石器製作などの直接的な、また儀式などの間接的なそれの両者を含む）の場としても利用される場合もあったらしい。これは広義の集落の構成要素たる性格をふまえれば当然である。これは貝塚も同様であろう。ⓗはその立地・地形に制約されるが、集落成立の前提条件として重要視されねばならない。

以上のⓐ～ⓗの組みあわせも種々の例がある。一歩進んで、その組みあわせの特色により当該遺跡、とりわけ集落の性格を検討しうる可能性があるといえる。その詳細にふれる余裕はないが、ⓗは別とし、たとえばⓐ・ⓑ・ⓒ・ⓖなどをもつ集落に、より〝母村〟的性格を想定することはできると思われる。いずれにせよ本調査例は集落に附属する頻度の高い遺物包含層と考えておく。

(2) 本包含層出土遺物は、土器・石器類ともに日常生活により直接的にかかわりをもつものが多い。石器類に明確な錘が欠ける点が若干奇異な点は既にふれたし、土器類に土偶破片がやや多い感がすることも同様である。ただし大迫町小田遺跡[注5)]ほどではないので、通常の姿と見做すべきなのであろう。全般的に、とりたてて〝異常〟を主張すべき内容ではないとしておくが玉類の欠落には注意すべきかもしれない。

(3) 遺物の出土状況・廃棄状況に特異な現象はない。帯状の範囲内に若干の群在化傾向を示す程度である。この廃棄状況は土器については〝亀ヶ岡パターン[注6)]〟の範ちゅうに加えられるべきものであろう。亀ヶ岡パターンは晩期に通有の遺物が密集して存在する類型であるが、遺物類の組成にはそれぞれ異同がある。極めて限定された組成内容しかもたない例と本調査例の如くにほぼその全内容を網羅していると考えられる例の存在である。この解釈にも種々の観点からの検討が必要であるが、ここでは、遺跡の性格のちがいを反映する要素として扱い(1)の如くに述べた。

石器の組成・量が豊富な点も同様である。

剥片の接合資料（一部に仕上げ加工着手済のものを含む）が同一地点に集中したこと、とりわけA地点南半に焼土・炭化物類の集積が見られたこと、I_d・II_a層にピット様のものの底面が見られたことなどは、遺物包含層上においても何らかの行為・生産活動が行なわれていたことを示す可能性がある。廃棄の仕方にもかかわるこの行為の具体相に迫る何らの現象も看取できなかったのは違憾であるが、何らかの儀式と関連があるのかもしれない。

以上のように本包含層は、晩期の一定期間を廃棄の場所として継続的に選択されて形成されたもの、と結論づけておく。

註1） 本遺跡所在地の千葉太四郎氏の教示と、本課の現地確認による。

註2） 枚挙にいとまがないほど多数あるが、縄文時代晩期の比較的最近の調査例としては、前項註⑦の咽畑遺跡が該当しよう。

大型住居他については、岩手県松尾村・長者屋敷が好例である。

註3） 長者屋敷遺跡現地説明会資料 (財)岩手県埋蔵文化財センター 昭和54年

なお、貝殻文盛行期のものは、岩手県二戸市長瀬D遺跡が好例である。四井謙吉氏の教示による。

註4） 岩手県紫波郡紫波町西田遺跡が典型例である。佐々木勝氏の教示による。

註5） 前項註1）

註6） 鈴木克彦 廃棄論の再構成と課題 考古学ジャーナル142 1977

3　遺物包含層の時間的推移について

(1)　本遺跡は、遺物包含層のみからなり、それがA・Bの二地点からなることは既に述べた。その出土遺物（主体的な）をみると、A地点は後期末～晩期前半、B地点は晩期後半のものが多い。したがって本遺跡においては包含層形成位置に時期による異同が存在することになる。

しかしA地点からも晩期後半の遺物は若干量出土しており、それを考慮するならば、晩期後半には、前半からの地点に加え新しい位置をも選択し用いた、とするのがより正確であろうか。ただしA地点からの後半遺物の出土量は微量ではある。

(2)　同様の現象はA地点内においても存在する。後期末と晩期初頭を一括した若干あいまいな鉢の1類は、Bブロック南端とCブロック北半（B_j、C_a、C_bの　各12、15）に集中する傾向がある。したがって、A地点はその北半から若干古めの、南半から若干新しめの遺物が出土している、ひいては、北半と南半にある程度の時間差の存する可能性がある、ということになる。（第64表）

以上のように本遺跡の遺物包含層形成にあたっての時間差が平面的に現われているという可能性がある。この原因は未詳であるが、A地点について考えると既に述べたとおり遺物包含層形成部分の基盤層が南北に走る溝状を呈していることに関連する可能性があるとも考えられる。なお時間差が層位的あり方にあまり反映されていない点については既にふれたところである。

4　土器の器種組成について

既に分類した土器を器種別にまとめると、深鉢・甕・鉢（ただし一部に台付鉢を含む可能性大なることは既にふれた）・台付鉢・皿・高杯・壺・注口・香炉・異型の10種となる。

それらを晩期前・後半に二大別すると第65表のようになる。それによると

（前半）深鉢の大部分、甕1～3類、鉢1～11類、台付鉢1～4類、皿のすべて、高不のすべて、注口1～5類、壺1～6・10類、香炉、異型

（後半）深鉢の一部、甕4～12類、鉢12～16類、台付鉢5類、高坏3類、注口4・5類、壺7～9類

となる。なお型式学的細分が可能なものについてはそれも示してある。

(2)　さらに煤様の炭化物の付着の有無による二大別も示してある。これはその付着の原因に、それが火にかかった、ひいては広義の煮沸的用途に用いられた可能性があるとの想定を前提としている。付着あるものは、深鉢のすべて、甕の同、鉢7～11，13，14類、16a類の一部、16dの一部、台付鉢、壺1の一部となる。

〔I〕

(1)・(2)から、次のような若干の問題点が生じる。まず(1)の後半の組成が貧弱な点についてで

Columns (left block): Ae50 Af50 Ag03 Ab21 Bb09 Bc18 Bc09 Bd12 Be21 Be12 Bf09 Bg21 Bg18 Bg09 Bh24 Bh21 Bh18 Bh15 Bh12 Bb09 Bh06 Bi21 Bi18 Bi15 Bi12 Bi09 Bj24 Bj21 Bj18 Bj15 Bj12 Bj09 Bj06 Ca24 Ca21 Ca18 Ca15 Ca12 Ca09 Ca06 Ca03 Cb30 Cb27 Cb24 Cb21 Cb18 Cb15 Cb12 Cb09 Cb06 Cb03 Cc21 Cc18 Cc15 Cc12 Cc09 Cc06 Cc03 Cd33 Cd21 Cd18 Cd15 Cd12 Cd09 Cd06 Cd03 Cd50 Ce21 Ce18 Ce15 Ce12 Ce09 Ce06 Ce03 Cf30 Cf15 Cf12 Cf09 Cf06 Cf03 Cf50 Cg30 Cg21 Cg18 Cg12 Cg09 Cg06 Cg03 Cg50 Ch33 Ch09 Ch06 Ch03 Ci06 Dj30 不明

Columns (right block): Bd65 Bd68 Be65 Be68 Bf62 Bt65 Bf68 Bg65 Bg68

器種	No.	Ae50 〜 不明	Bd65 〜 Bg68
深鉢	1	1 2 1 1 11 2 11 3 1 6 4 20 8 2 2 9 14 4 6 2 5 2 1 1 16 2 5 3 2 1 3 16 1 13 10	3 2 1 2 1 1
	2	6 2 1 1 1 1 1 1 2 1 2 2 1 1 1 1 5 1 4 2 1	1 6
	3	1 6 3 2 7 1 4 6 2 14 5 2 19 14 3 4 5 11 14 17 4 5 29 37 72 120 11 1 47 43 137 146 74 7 3 4 8 10 25 15 69 68 85 20 9 26 102 72 55 14 1 3 8 26 41 57 18 4 13 69 153 106 5 1 31 97 103 14 129 230 120 1 26 188 2 137	11 40 20 25 4 18
	4	1 1 5 1 1 1 1 3 10 2 1 2 3 23 20 1 3 1 1 4 14 3 3 5 20 23 2 1 3 3 1 1 9 2 2 7 4 1 11 32 1 5 2 1 13	4 12 2 4 2 1 1
	5	1 4 1 1 1 2 1 2 1 2 1 1 3 2 1 1 2 4 6 1 12 1 1 2 4	1 1 2 1
	6	1	
カメ	1	5 2 1 1 1 1 1 2 5 1 1 1 1	1 2 2 1
	2	1 1 1 1 2 1 1 2 1 2 6 5 4 10 5 8 10 5 1 1 5 1 2 8 24 7 4 5 13 24 11 6 8 11 1 4 15 11 1 5 3 12 1 4 9 1 1 9 14	12 16 7 17 1 4
	3	1 1 1 2 1 4 1 2 1 2 6 2 1 1 8 4 3	2 1 3 1 3
	4	1 1 1 1 1 1 1	5
	5	1 2 1 2 1 1 1 4 1 1 7 3 3 5 7 2 3 4 6 20 2 2 2 1 3 3 2 4 2 1 3 3 1 6 1 1 1 2 3 1 3 1 2 11 1 27 1 4 10 3 1 2 12 1 14	13 58 10 40 1 1 3 4 30
	6	1 1 2 2 2 1 1 2 1 1 1 3 2 1 2 1 1 3 1 1 2	1 18 3 3 1 4
	7	2 1 1 2 1 4 1 1 1 3 5 1 1 4 1 2 1 5	6 7 2 2 2
	8	1 1 4 1 2 2 2 2 3 1 3 3 1 3 1 1 4 1 3 1 3 2 5 2 2 2 1 3 2 1 3 1 1 3 4 4 2 2 1 1 1 1 1 7	7 14 2 6 1 1
	9	1 1 1 1 1 1 2 1 2 1 1 3 2 1 1 2 4 1 1 1 1 1 2 1 1 2 2 1 2 5 1 8	26 56 18 24 4 14
	10	1 2 1 1 2 3 1 3 4 2 1 1 1 1 2 7 1 1 6 3 1 2 1 5	4 15 10 33 1 2 5 9
	11	1 1 14 3 1	2
	12	1 1 1	2
	13	1 1 1 1	2 1
鉢1	宮戸	1 4 1 1 2 7 1 1 3 1 3 1 1 1 2 4 6	1
	大洞B	1 1 1 8 10 10 1 2 21 8 3 2 9 8 2 1 6 13 2 1 1 3 8 6 3 4 1 4 1 4 5 1 1 1 1	
	2	1 1 6 1 2 7 6 3 9 14 1 21 1 1 7 1 4 6 1 1 3 1 2 8	1
	3	1 1 2 5 1 1 1 1 1 2 3 3 3 2 4 9 49 8 1 1 2 2 4 2 32 4 3 10 10 25 13 1 1 2 6 36 4 5 9 8 6 7 31 10 11 10 6 1 4 15 31	1 1 1
	4 a	2 6 1 1 4 9 3 2 1 1 2 3 3 1 9 6 1 2 3 2 5 3 2 2 3 5 6 2 4 6 3 2 8 17	2 2 2 1 1
	4 b	2 1 1 1 2 4	1
	5	1 1 1 4 3 1 1 1 3 1 1 1 8 1 1 1 2 2 6 8 1 3 4	2 2 1 1
	6	1 1 2 4 18 1 1 1 1 6 1 1 3	1 3
	7	1 2 1 1 2 2 3 7 1 2 1 3 2 3 1 1 2 1 1 5 2 4 2 2 2 2 2 3 1 2 6 1 1 2 13 6 8 6 7 11 10	1 1 4 2
	8 a	3 1 1 2 1 1 5 2 2 1 4 3 1 2 1 7 1 1 3 7 2 1 1 2 1 2 1 1 4 3 1 4 1 2 5 5	3 2 2
	8 b	2 1 2 1 1 6 6 2 18 3 1 1 1 9 4 4 4 1 7 1 1 5 2 1 1 7 10 1 2 1 1 2 1 9	1 2 1 2 2
	9	2 1 2 5 1 1 8 1 6 2 16 1 3 4 1 7 1 11 1 1 2 1 6 1 4 2 1 1 9 15 1 3 13 31 3 1 2 30 16	2 2 1
	10	1 2 8 2 1 3 1 12 3 5 3 19 69 15 1 3 14 26 12 2 5 30 19 5 10 33 1 1 4 13 3 2 7 5 4 1 2 1 25	2 1 1 1 1
	11	3 1 1 7 8 1 2 4 16 21 9 1 1 1 2 3 29 13 6 1 3 4 5 3 4 2 1 1 2 1 4 4 1 16	
	12	1 1 1 1 1 2	2 5 3 6 6 1 12
	13	2 2 1 2 3 3 1 6 3 4 3 3 3 2 1 1 2 1 1 1 1 1 2 3 1 1 3 2 1 20 1 1 2 3 14 16 1 1 6 12 5 3 1 3 1 4	3 6 7 9 3 1 6
	14	4 4 1 1 1 3 1 7 3 3 1 2 1 1 2 1 1 2 2 1 1 2 3 5 5 2 1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 2 1 2 4	11 30 23 40 3 5 13
	15	1 2 4 5 1 1 1 1 1 1 2 14 4	7 13 2 13 2 4 3
	16 a	1 1 2 1 7 1 2 1	6 7 1
	16 b	1 1 7 6 1 1 1 1 1 1 1 2 2 1 5	8 41 3 14 2
	16 c	1 1	1 9 4 2 2
	16 d	1 1 1 1 6	2 10 2 1
台付鉢	3	1 2 2 2 1 1 1 3 4 1 8 3 1 7 3 17 10 12 4 1 1 3 12 7 4 7 6 2 2 8 19 1 6 3 4 9 11 1 9 13 1 15 6 18 5 23 23	2 4 2
	4	1 1 1 1 2 4 1 6 3 3 6 3 2 7 2 1 1 1 5 10 5 3 2 1 2 1 2 3 17 7 2 1 1 45 1 3 7 16 1 89 11 1 5 15 6 1 7 35 40	1 1 4 2 1
	5	2 3 1 1 1 1 4 1 2 9 10 1 1 6 4 6 1 1 5 2 2 1 1 2 8 3 1 1 1 2 1 3 2 1 1 1 4 7	6 9 40 8 3 12
皿	1	1 1 4 3 2 2 3 4 3 3 1 19 9 2 6 7 1 1 1 4 2 8 13 1 22 18 2 4 1 14 10 6 2 5 4 13 10 5 1 13 21 2 7 26 6 4 13 46 21 2 4 20 1	1 1 2
	2	3 3 3 1 4 1 1 3 5 4 1 3 1 1 6 10 2 3 1 2 3 3 7 7 2 10 10 8 3 1 1 9 14 3 1 1 15 1 3 12 16 16 1 7 15	1 2 1
	3	1 1 2 1 1 1 7 6 1 1 7 7 5	1
	(4は1に含)	3 1 6 8 3 3 5 10 4 8	
壺	1	1 1 4 3 1 2 1 1 4 1 1 1 1 1 2 5 1 4 4 14 2 2 6 2 4 1 5 8 4 1 15	1 1 1
	2	1 1 2 1 2 6 4 3 1 2 1 2 3 2 1 4 1 1 8 8 1 2 7 2 2 4 1 1 6 7 1 3 2	1 9 2 2 1
	3	1 2 1 1 1 6 2 4 10 6 5 3 5 1 2 5 1 1 1 4 2 3 1 1 1 3 11 10 1 1 4 1 2 1 1 5 1 2	2 1 1 1
	4	1 3 2 2 1 1 2 3 1 2 2 2 4 1 1 1 10 3 9 1 4 1 1 5 5 8 6 1 1 1 2 4 7 1 2 2 10 11 2 1 1 1 1 4 3 1	3 1 1
	5	2 1 3 1 1 3 5 1 3 2 2 2 4 3 3 3 6 1 1 1 2 5 1 2 1 1	
	6	1 2 1 5 3 10 1 1 2 1 7 1 1 3 1 1 2 2 1 1 2 1 1 1	1 3 2 2 1
	7	1 1 1 3 4 3 1 2 1 2 1 1 1 1 1 1 7 1 1 3 2 3 2 1 4 1 1 2 1 7	23 25 24 20 4 2 3
	8	1 2 6 1 1 1 1 1 1 2 1 1 1 1 3 1	10 11 4 11 1 3 1 22
	9	1 1 10 1 2 1 1	2 2
	10		
	11	1	1 1
注口	1	1 1 1 1 2 3 6 3 2 3 2 6 4 5 2 1 1 1 1 1 1 1 1 3 2	1
	2	1 1 2 1 1 3 3 1 13 2 4 2 3 15 14 4 2 1 2 2 3 8 7 11 2 1 2 10 1 3 3 2 5 6 2 1 2 2 4 3 1 1 4 6 2 1 4 2 1 1 1 1	1 1 2 2
	3	1	
	4	1 1 2 1 2 1 2 1 4 1 4 6 1 3 1 1 1 1 1 2 3 2 1 3 2 1 6 1 1 1 4 1	2 1 1
	5	2 1 1	1 1
	6	4 1 1 1 2 2 3	2

第64表　地区別　土器（おもに口縁部）破片出土数

あるが、同一器種を比較してそこに異同がある現象の解釈は二つの観点からの検討が必要である。(ア) ある器種の存否即時間差を示すものである。つまり組成が異なる、というもの、(イ) その存否と廃棄のされ方その他に何らかの関係があるとする可能性である。

〔(ア)に関連して〕晩期の各期の一般的な組成を確認する。芹沢長介氏によると[註]所謂B、B-C式の器種としては壺（大中小、細頸・広口他各種）、鉢（浅鉢・深鉢）、台付鉢（大小）、急須、皿、盤、香炉形他が、C_1式期も壺、鉢、台付鉢、急須、皿、香炉形が、C_2式は壺、急須、台付鉢、鉢、皿形、A式は壺、台付鉢（高杯形に近いもの多い）、浅鉢、皿、深鉢、急須（稀）等があるという。

これを考慮すると、器種の有無に時間差を導入しうる可能性をもつものは、深鉢型と甕型であろう。既に個別にもふれてあるが、深鉢型としたものに類似した器形は晩期後半にも存在するが、その比率は減少化傾向にある。逆に口縁の分化した甕形が発達（ヴァリエイションが多くなるという現象も含めて）するのはC_2式以降である。晩期前半と後半の深鉢型と甕型のあり方は、前者の機能を後者が果たしていたと解すのがもっとも妥当なものと思われる。

〔(イ)に関連して〕次に上述の観点で見ることが出来ないのは、皿型であろう。浅鉢とされるものよりは大型で器厚の低い皿型はC_2式にも存在するのが一般的である。しかるに本遺跡の調査ではそれが出土していない。この解釈には前述の(イ)的観点からする検討が必要である。調査で得られた事実は、晩期後半の遺物は調査地域全域から得られているが、それが集中するのは東端部である、つまり地点により時期差が顕著であり、それは前半よりかなり限定された範囲内におさまる、である。これから可能な解釈は(a)本調査は後半の包含層の全域にまでその手が及んでいない、(b)後半においては皿型土器の廃棄のされ方に他と異なるものがあった、などである。本調査は既述のように時間の制約をうけたものであり(a)である可能性が大であるが、(b)の可能性も一応指摘し、今後の類例の増加をまちたい。

註. 芹沢長介、石器時代の日本、築地書館　1960年

〔II〕　煮沸用と思われる器種について

何らかの文様帯を有し、かつその器面に煤様の付着物の見られる器種が存在することは既にふれた。再述になるが、それらは鉢型では晩期前半の7，8、台付鉢を含む可能性がある9～11、晩期後半の13,14類、台付鉢型では晩期前半の1～4、後半の5類であった。これは広義の煮沸用容器と考えられるものであろう。これらの機能の系統は大略以下のように考えられてよい。

鉢型なることが確実な器形では、晩期前半の7，8が、後半の13，14に機能が引きつがれたものであろう。さらにのべればこれらは16 c、dの一部にまで及ぶとも考えられる。

台付鉢（その可能性のあるものも含む）では、鉢の9～11から台付鉢2，3，4、さらに5

へと引き継がれたものであろう。

この変遷観はあくまでも機能のそれであり、器形・モチーフの直接的系譜を云々しているものではない。台付鉢3，4と5の間には直接的なそれを想定してもよいであろうが、鉢9～11

器種＼時期	前半	B	Bc	C_1	後半	C_2	A	A^1
深鉢 大	◎				◎			
中	◎				◎			
小	◎				◎			
甕 1	◎		×					
2	◎			×				
3	◎			×				
4					◎	×		
5					◎	×		
6 a					◎	×		
b					◎	×		
7					◎	×		
8					◎	×		
9					◎	×		
10 a					◎	×		
b					◎	×		
11					◎	×		
12					◎		×	
鉢 1	○	×						
2	○		×					
3 a	○			×				
b	○			×				
4 a	○							
b	○							
5	○							
6	○							
7	◎			?				
8	◎	?	?	?				
9 a	◎			?				
(含台付) b	◎			?				
10 a	◎		×					
b	◎		×					
c	◎		×					
11	◎		×					
12 a					○	×		
b					○	×		
13 a					◎	×		
b1					◎	×		
b2					◎	×		
14 a					◎	×		
b					◎	×		
15					○	?		
16 a					○		×	
b					○		×	
c					◎		×	
d					○			×
台付鉢 1 a	◎							
b	◎							
2	◎			×				
3	◎			×				
4	◎			×				
5					◎	×		
皿 1	○			×				
2	○			×				
3	○		×					
4	○			×				
高坏 1 a	○			×				
b	○			×				
2 a	○							
b	○							
3	○							

器種＼時期	前半	B	Bc	C_1	後半	C_2	A	A^1
注口 1	○	×	×					
2 a	○	×	×					
b	○		×					
3 a	○			×				
b	○			×				
4					○	×		
5					○		?	
6								
壺 1	○◎							
2	○							
3	○			?				
4 a	○		×	?				
b	○		×					
5	○							
6	○		×					
7					○	×		
8					○			
9					○			
10	○							
11								
香炉	○		×					
異型	○		×					

◎は煤様のものが付着するもの
×は該当型式名
？は若干疑問あるもの

第65表

と台付鉢3，4の器形の相違は大きい。ただし台付鉢2を介在させると、鉢の9と台付鉢3，4に関連性を想定することは出来る。器形はもとより、口縁部文様帯に羊歯状文をもつなどのモチーフの面でも関連性を指摘できる。蛇足ではあるが、これらはさかのぼると鉢の2としたものの中にも存在する可能性のある台付鉢にも関連しよう。

5　土器施文について

縄文晩期土器の施文については既に諸先学の業績に詳しいので[注1)]、ここでは本遺跡出土資料を概観するにとどめる。したがって大半は光学の業績の再述になるであろう。なお既に示した実測図・模式図・拓影の再掲示は行なわず、箇条書きとする。また概括的に取り扱う。

①　施文される文様帯は、主要な文様帯と補助的な文様帯に二大別できる。その組みあわせには、いずれかの単一使用と両者の組みあわせの二種がある。単一の場合は、比較的つくりの粗雑である(所謂半精製～粗製)土器の場合が多い。　前者は巾もひろく、面積も大きい。後者は巾が狭く帯状になることが多く、前者への附加的要素として用いられることが多い。

②　主要な文様帯の文様の基本的モチーフ（たとえば所謂K字文・太腿骨文など）は、各器種に共通して施文される。それは時間的に変化を示す。即ち、器種と特定施文モチーフの厳密な対応関係はない。基本モチーフが時間差を良好に反映する[注2)]。

③　補助的な文様帯への施文モチーフも限定され、かつ施文部位もかなり限定される。即ち前者については、平行沈線文・刻み目帯・シュリッツ風列点文・羊歯状文・半截羊歯状文などがあり、後者は、主要な文様帯の上、下限に沿って・体部下端（底部との境界部）・頸部基部・口縁部・肩部等々　である。即ち、補助的な文様帯は、何らかの意味での境界部、あるいは端部近くに付されるべき性格のものということができる。これらを「エンドポイント」あるいは「コーナーポイント」の存する部分に関連するものということもできる[注3)]。

④　基本的モチーフは、具体的に各器種に施文される場合には、若干の変形を施こされる。たとえば、大洞C_1式の太腿骨文風入組文も、鉢・皿・高杯・台付鉢などにおいては、それぞれ若干異なる様相を示す。したがって、一見各器種独自・特有の施文モチーフが存するかの如くに見える。逆にそれをとらえて、モチーフの異同観察による器種の推定はかなりの程度で可能である。

⑤　同一器種においても、施文される細かいモチーフは単一ではなく複数の形で存する。たとえば前記の太腿骨文風入組文にも、一端のみ尖るもの・両端とも尖るもの・尖端部をもたないものの三種が存在するように。

⑥　補助的な文様帯は、口縁端部外面、内面への施文と結合することが多い。後者の類例は

あまり多くは無いが、厳然として存在する。

⑦　モチーフ（基本単位）の展開状況（くり返し回数）は、3あるいはその倍数、4あるいはその倍数の形をとるものが多い。横位に展開するのが普通である。

⑧　モチーフ（基本単位）は、相互に点対称の位置にある2つの図形により構成されるものが多い。これは所謂太腿骨文などに該当する。

⑨　モチーフ（基本単位）にも付加的な要素の強いものが組みあわせになる。それは明らかに三叉（状入組）文の系譜に連なるものである。即ち基本的モチーフも、さらに細かい要素に分解することができる。

⑩　モチーフ（基本単位）の描出は、その部位により若干変化する。たとえば、部位によりモチーフの構成要素に増減を行なう、あるいは正面位と後正面のモチーフを裏がえしにするなどの改変を加える。

⑪　正面観的意識は上記の要素の組みあわせ（より複雑）や、モチーフの描出の差（間隔をつめたり広げたり）、瘤状突起の貼付、口唇のつくりの相違などにより表現される。

⑫　主要な文様帯を縦位の線で区画する例は、大洞C_1式までの晩期前半には皆無か、極めて少数である。大洞C_1式の鉢（非煮沸用の所謂精製）や壺の一部にわづかに見られる程度である。

⑬ 文様帯中の縄文は、ほとんどが所謂「充塡縄文」である。

⑭　皿型土器底部外面への施文も、体部における原則と大略同一である。

⑮　モチーフをもっとも基礎的な要素に分解すると、所謂三叉状入組文的なものになる。その削り取られる部分の広狭が、各種の入組文を形成するといえる。したがって、文様として意識される部分が、しだいに逆転する傾向にあるともいえる。

⑯、⑮のことから、所謂三叉状入組文は大洞B式のメルクマールとしては直ちには扱いえないこととなる。

⑰　基本的なモチーフの中には、本来的な属性をもつものもある。たとえば羊歯状文の末端の嚙みあいなどである。それらはそれ以前へと系譜をたどれるものであろう。

註1）　山内清男、所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の始末　考古学　第一巻三号

杉山寿栄男編　日本原始工芸概説　昭和三年

芹沢長介　石器時代の日本　築地書館　1960年　　その他枚挙にいとまがない程多数ある。

註2）　晩期土器の型式区分・細分・編年観は、これを指標として行なわれてきたといってもよい。

註3）　corner point, end point.

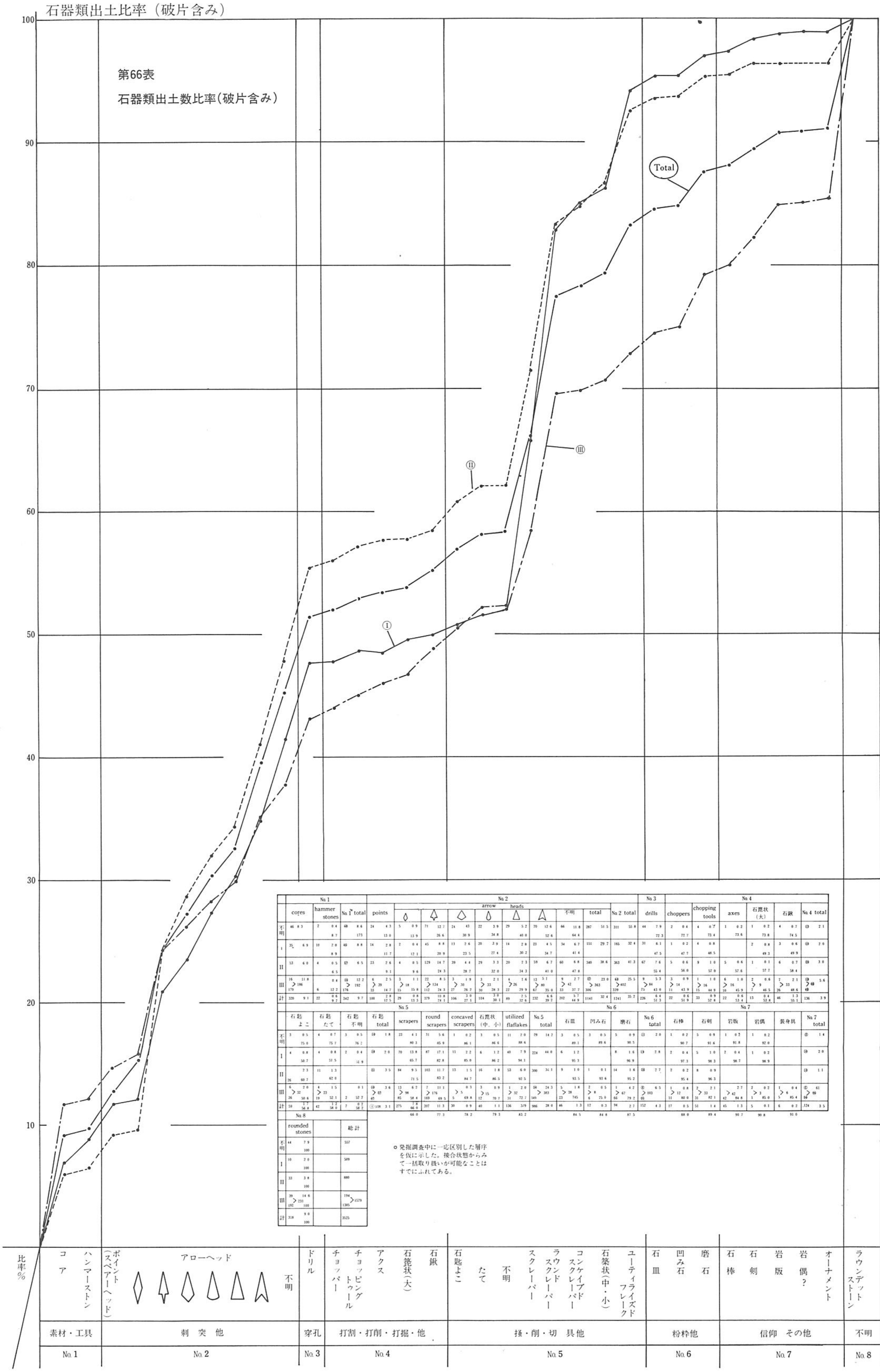
Anna O. Shepard. CERAMICS FOR THE ARCHAEOLGIST.

CARNEGIE INSTITUTION OF WASHINGTON　WASHINGTON, D.C. 1965

石器類出土比率（破片含み）

第66表

石器類出土数比率(破片含み)



	No.1			No.2											No.3	No.4					
	cores	hammer stones	No.1 total	points	arrow heads (1)	arrow heads (2)	arrow heads (3)	arrow heads (4)	arrow heads (5)	arrow heads (6)	不明	total	No.2 total		drills	choppers	chopping tools	axes	石箆状（大）	石鍬	No.4 total
不明	46 8.3	2 0.4 8.7	48 8.6 17.3	24 4.3 13.0	5 0.9 13.9	71 12.7 26.6	24 4.3 30.9	22 3.9 34.8	29 5.2 40.0	70 12.6 52.6	66 11.8 64.4	287 51.5	311 55.8		44 7.9 72.3	2 0.4 72.7	4 0.7 73.4	1 0.2 73.6	1 0.2 73.8	4 0.7 74.5	⑪ 2.1
Ⅰ	35 6.9	10 2.0 8.9	45 8.8	14 2.8 11.7	2 0.4 12.1	45 8.8 20.9	13 2.6 23.5	20 3.9 27.4	14 2.8 30.2	23 4.5 34.7	34 6.7 41.4	151 29.7	165 32.4		31 6.1 47.5	1 0.2 47.7	4 0.8 48.5		2 0.8 49.3	3 0.6 49.9	⑩ 2.0
Ⅱ	53 6.0	4 0.5 6.5	57 6.5	23 2.6 9.1	4 0.5 9.6	129 14.7 24.3	39 4.4 28.7	29 3.3 32.0	20 2.3 34.3	59 6.7 41.0	60 6.8 47.8	340 38.6	363 41.3		67 7.6 55.4	5 0.6 56.0	9 1.0 57.0	5 0.6 57.6	1 0.1 57.7	6 0.7 58.4	㉖ 3.0
Ⅲ	16・170 >186 11.8	6 0.4 12.2	⑯・176 >192 12.2	6・33 >39 2.5 14.7	3・15 >18 1.1 15.8	22・112 >134 8.5 24.3	3・27 >30 1.9 26.2	3・30 >33 2.1 28.3	4・22 >26 1.6 29.9	13・67 >80 5.1 35.0	9・33 >42 2.7 37.7	㊼・306 >363 23.0	㊸・339 >402 25.5		9・75 >84 5.3 43.0	3・11 >14 0.9 43.9	1・15 >16 1.0 44.9	6・10 >16 1.0 45.9	2・7 >9 0.6 46.5	7・26 >33 2.1 48.6	[illegible] 5.6
計	320 9.1	22 0.6 9.7	342 9.7	100 2.8 12.5	29 0.8 13.3	379 10.8 24.1	106 3.0 27.1	104 3.0 30.1	89 2.5 32.6	232 6.6 39.2	202 5.7 44.9	1141 32.4	1241 35.2		226 6.4 51.3	22 0.6 51.9	33 0.9 52.8	22 0.6 53.4	13 0.4 53.8	46 1.3 55.1	136 3.9

	No.5										No.6				No.7					
	石匙よこ	石匙たて	石匙不明	石匙total	scrapers	round scrapers	concaved scrapers	石箆状（中、小）	utilized flaflakes	No.5 total	石皿	凹み石	磨石	No.6 total	石棒	石剣	岩版	岩偶	装身具	No.7 total
不明	3 0.5 75.0	4 0.7 75.7	3 0.5 76.2	⑩ 1.8	23 4.1 80.3	31 5.6 85.9	1 0.2 86.1	3 0.5 86.6	11 2.0 88.6	79 14.2	3 0.5 89.1	3 0.5 89.6	5 0.9 90.5	⑪ 2.0	1 0.2 90.7	5 0.9 91.6	1 0.2 91.8	1 0.2 92.0		⑧ 1.4
Ⅰ	4 0.8 50.7	4 0.8 51.5	2 0.4 51.9	⑩ 2.0	70 13.8 65.7	87 17.1 82.8	11 2.2 85.0	6 1.2 86.2	40 7.9 94.1	224 44.0	6 1.2 95.3		8 1.6 96.9	⑭ 2.8	2 0.4 97.3	5 1.0 98.3	2 0.4 98.7	1 0.2 98.9		⑩ 2.0
Ⅱ	26 2.3 60.7	11 1.3 62.0		㉛ 3.5	84 9.5 71.5	103 11.7 83.2	13 1.5 84.7	16 1.8 86.5	53 6.0 92.5	300 34.1	9 1.0 93.5	1 0.1 93.6	14 1.6 95.2	㉔ 2.7	2 0.2 95.4	8 0.9 96.3				⑩ 1.1
Ⅲ	6・26 >32 2.0 50.6	4・19 >23 1.5 52.1	2 0.1 52.2	⑩・45 >[illegible] 3.6	13・85 >98 6.2 58.4	7・169 >176 11.1 69.5	5 >5 0.3 69.8	3・12 >15 0.9 70.7	1・31 >32 2.0 72.7	34・349 >383 24.3	5・23 >28 1.8 74.5	2・6 >8 0.5 75.0	1・66 >67 4.2 79.2	⑧・[illegible] >103 6.5	1・11 >12 0.8 80.0	2・31 >33 2.1 82.1	42 >42 2.7 84.8	2・1 >3 0.2 85.0	1・5 >6 0.4 85.4	⑤ [illegible] 6.1
計	59 1.7 56.8	42 1.2 58.0	7 0.2 58.2	①108 3.1	275 7.8 66.0	397 11.3	30 0.9	40 1.1	136 3.9	986 28.0	46 1.3	12 0.3	94 2.7	152 4.3	17 0.5	51 1.4	45 1.3	5 0.1	6 0.2	124 3.5
					66.0	77.3	78.2	79.3	83.2		84.5	84.8	87.5		88.0	89.4	90.7	90.8	91.0	

	No.8		
	rounded stones		総計
不明	44 7.9 100		557
Ⅰ	10 2.0 100		509
Ⅱ	33 3.8 100		880
Ⅲ	39・192 >231 14.6 100		194・1385 >1579
計	318 9.0 100		3525

o 発掘調査中に一応区別した層序を仮に示した。接合状態からみて一括取り扱いが可能なことはすでにふれてある。

6　石器類の組成比について

既にのべた石器類の組成と出土数、その比率は第66表のとおりである。ブロック別・層位別に配してある。それらを総合して集積グラフ化すると、第66表のようになる。さらにそれらを整理し、石核(原石)・信仰関係の遺物以外の、より直接的な生産用具のみの比率を出した（第67表)。それによると、刺突具31%（楕円形掻器も入れると43.8%)、掻・削器類30.2%（楕円形掻器を除くと16.7%)、円盤状石器17.8%、石錐6.5%、打割他具3.4%、掘削具2.5%、槌石0.5%となる。

この結果と比較すべき晩期の資料には九年橋遺跡がある。その第4次の報文[註1]により、単純に数のみを見ると、第68表のようになる。これに先と同様の操作を施こすと、刺突具59.8%、掻削具11.6%、石錐10.2%、粉粋具9.2%、円盤状石器6.0%、打割他具3.3%となる。大勢としてはほぼ類似下にあるといえるであろう。組成比率を見るならば九年橋には信仰関係のものが他数を占める傾向があるとも見える。

ちなみに縄文早期（ムシリⅠ式相当期）の例たる大渡野遺跡最下層の組成・比率を示すと次のとおりである[註2]。石核(原石) 6.3%、槌石0.9%、石槍3.6%、石鏃6.8%、石錐1.4%、片刃石器2.3%、石斧0.5%、石匙3.6%、削器4.5%、掻器14.9%、トランシエ様2.7%、石箆状36.2%、使用痕ある剝片8.6%、磨石2.3%、環状石器6.8%である。これも先と同様に整理すると、製作関連7.2%、刺突具10.4%、旋回具1.4%、打割具他2.8%、掻削具70.5%、粉砕具2.3%、その他6.8%となる。早期と晩期の短絡的比較は無意味であるが、その組成に顕著な異同のあることを示す為に一応示しておく。

このような本遺跡の石器組成は、その消耗度の反映を示しているとも考えられるが、廃棄のメカニズムが不明な現段階では、一応晩期の石器組成の一例として提示する程度に留めておくただ石錘などが欠落している点は、その立地が河川を臨む点を考慮すると、若干奇異の感をいだかせる。あるいは錘には石器以外の別の製品をあてていたと考えるべきなのであろうか（た

原石	186	(11.8)	192(12.2)
槌石	6	(0.4)	
石槍	39	(2.5)	402(25.5)
石鏃	363	(23.0)	〔楕円形掻器を加えると、568(36.0)〕
石錐	84	(5.3)	
片刃	14	(0.9)	46(2.9)
両刃	16	(1.0)	
石斧	16	(1.0)	
石鍬	33	(2.1)	33(2.1)
横型石匙	32	(2.0)	392(24.9)
縦型石〃	23	(1.5)	〔楕円形掻器を除くと216(13.7)
不明	2	(0.1)	
掻器	98	(6.2)	
楕円形掻器	176	(11.2)	
湾入ある掻器	5	(0.3)	
石箆状	24	(1.5)	
使用痕ある剝片	32	(2.0)	
石皿	28	(1.8)	103(6.5)
凹み石	8	(0.5)	
磨石	67	(4.3)	
石棒	12	(0.8)	93(5.9)
石剣	33	(2.1)	
岩版	42	(2.7)	
装身具	6	(0.4)	
円盤状石器	231	(14.7)	
計	1576		

※直接的生産活動関連(原石と石棒以下を除く)のものは1297となる。

第67表、Ⅲ層の細果の抽出値

第69表　材質別石器類個数一覧(1)

		石核	槌石	石槍	石鏃						不明	石錐	石匙 横	石匙 縦	掻器	楕円形掻器	湾入ある掻器	石篦状(中小)	使用痕ある剥片	片刃・両刃	石斧	石篦状(大)	石鍬	石皿	凹み石	磨石	石棒・石剣	岩版	岩偶	装身具	円盤状石器	石臼
1	硬質泥岩	9		11	78	8	27	39		86	67	63	7	5	28	21		1	7												1	
2	珪質〃	2		5	11				10			34	22	16	51	24	7	2	28													
3	凝灰質〃	4		6	16				17			12	14	6	59	116	18	2	1			1										
4	粘板岩	3	5											1	2				1	3	3		24			1	25					
5	砂質〃	1																1		3	1		4								6	
6	黒色〃											1																			4	
7	チャート質〃	3			4	4	4		5							7																
8	珪質〃	2														2																
9	凝灰質〃		15									7								3							16				2	
10	石灰質〃																			3												
11	粘板岩ホルンフェルス	6											1		6			1		33		2	1				12					
12	凝灰質〃	1																														
13	凝灰質砂岩	1																														
14	アルコース〃																							1								
15	硬砂岩											1		2	1							1				1			1		1	
16	チャート質〃	1								9																						
17	細粒〃																			1		2										
18	凝灰質〃																							1		1						
19	チャート	28			25		13	2	3			19			9	71		1	6													
20	泥質〃	7		4	10			8					2					1				1										
21	凝灰岩質〃								1				2																			
22	輝緑凝灰岩質〃	21							4							2																
23	凝灰岩	3																														
24	砂質〃	2																														
25	泥質〃															12		5													1	
26	石灰質〃																			1												
27	酸性〃	3																									1					
28	緑色〃																				8											
29	石質〃																	1													1	
30	珪質石質〃																		14													
31	珪質〃				7							8			26	27		2				1										
32	フリント質〃	8		19	56	1	26	16	11	34	40	27		10	21	39	3	2	2	7			1								2	
34	珪質淡緑色〃												2																			
35	熔結凝灰岩																															1
36	安山岩質〃																									1						
37	硬質泥岩質〃				21	2	7			21	31		2													1						
38	珪質泥質〃	3							13									9														
39	珪質角礫	1																														
40	珪質濃緑色細粒〃																	2	2													
41	珪質細粒〃	75											3		23		3	7	53			2									2	
42	珪質白色細粒〃				19	3	10	15		10																						
43	白色細粒〃	4								4													1					45				
44	泥質細粒〃														11																1	
45	輝緑凝灰岩	6		9	9			7			6	15	1	3	26	25			7				11				5					
46	チャート質〃	7													1	23																
47	珪質〃								9						1	3																
48	泥質〃															5																
49	流紋岩	36			3				9						1	13		2	2	1												
50	斜長石〃																							1							4	
51	安山岩	6	1																	1	3		2									
52	輝石〃	3																				1		44	20	75					282	
53	複輝石〃	7																														
54	輝石安山岩塊岩																							3								
55	変朽安山岩	2																		1	7											
56	玢岩	1	1																													
57	長石〃	1																														
58	黒曜岩			3	6			2	1	5	2	2			1																	
59	松脂岩											1	3		2				1													
60	片状ホルンフェルス		1																		1											
61	珪線石〃																				1											
62	珪岩	2													1																	
63	珪化した緑色岩										1																					
64	蛇紋岩															1																
65	紫水晶						1																									
66	石英	6			5				1																							
67	玉髄	3		10	45	5	2	4	2	22	24	18	1		5	3			2							1				1		
68	めのう	2			55	2			1		28	2	2		1	14																
69	赤色めのう						14	10		37		12			4			2	11													
70	鉄(質)石英	9			3				1										1													
71	蛋白石										2					3																
72	磁鉄鉱	1														1																
73	珪化木	25																		7			2									

石　　鏃	347	(49.7)	
石　　錐	59	(8.5)	
石　　匙	34	(4.9)	(9.7)
不定形掻器	11	(1.6)	
箆状石器	22	(3.2)	
磨製石斧	10	(1.4)	(2.7)
打製石斧	9	(1.3)	
磨　　石	37	(5.3)	(7.6)
石　　皿	16	(2.3)	
岩　　版	3	(0.4)	(16.5)
石剣類	105	(15.0)	
玉　　類	10	(1.4)	
円盤状石器	35	(5.0)	
計	698		

註1　IV－1の註2に同じ

註2　大渡野遺跡、
岩手県文化財調査報告書第32集所収

第68表、九年橋遺跡出土石器数及び比率

とえば土製有孔円盤など)。また円盤状石器の組成比率は決して小さいものではない。それはとりもなおさず使用頻度の高い、ひいては重要度の高い石器であることの反映とも考えられる。したがってこの種石器の性格規定の手掛りの探究も今後意識的になされるべきであろう。

石器個別のタイプ細分、その組成は、別にふれてある。

7　石器の材質について

器種別の石材組成は個別に示したが、以下にはそれを総合し、石材と器種との関係を見る。個別に示したものは82種であったが、親縁性にしたがい73種に整理した。具体的には、凝灰質泥岩、硬質凝灰質泥岩・凝灰質硬質泥岩、泥質チャート・粘板岩質チャート、酸性凝灰岩・流紋岩質凝灰岩、フリント質珪質凝灰岩・フリント質凝灰岩・赤色フリント質凝灰岩、石英・珪石、めのう・白めのう・という整理である。なお材質名の冒頭に出てくる〝珪質〟(例えば珪質凝灰岩・珪質泥質凝灰岩等)は〝珪化した(された)〟の意である(第69表)。

73種を大別すると(1)岩石(第69表中の番号1～64)と、(2)鉱物(同65～72)、さらに(3)化石(同73)となる。(1)を細分すると(a)、堆積岩(同1～48)、(b)火成岩(同49～64)となる。(a)をさらに細分すると、(イ)泥岩　(ロ)粘板岩　(ハ)砂岩　(ニ)硬砂岩　(ホ)チャート　(ヘ)凝灰岩からなる。同様に(b)は(イ)流紋岩、(ロ)斜長石流紋岩　(ハ)安山岩　(ニ)玢岩　(ホ)黒耀岩　(ヘ)松脂岩　(ト)ホルンフェルス　(チ)珪岩　(リ)蛇紋岩からなる。(2)の鉱物は(イ)紫水晶　(ロ)石英　(ハ)玉髄　(ニ)めのう　(ホ)赤

色めのう　(ヘ)鉄質石英　(ト)蛋白石　(チ)磁鉄鉱であり、(3)は珪化木である。以上の区分と器種の関係を概観する。なお器種内の細分したタイプとの関係はここでは見ない。また石核（乃至原石）については詳述はしないが、石器類と原石類の存在する種類が厳密に一致していない点には若干留意する必要があると思われる。原石が製品化されるまでの過程での取り扱かわれ方、さらにはその過程における量的な寡多などを反映している可能性があるからである。

(1)　泥岩類――No.1～3は刺突具・穿孔具・広義の掻器・削器類にほぼ限定されているといってよい。

(2)　粘板岩類――No.4・5、9～11は、槌石、広義の斧的な用途のもの・鍬的なそれ、石棒・石剣類に顕著に多く用いられている。つまりこの類は重量がその機能と密接な関係をもつ可能性のある器種に選択使用されていることになる。ただし、7・8は、刺突具・掻器類にのみ用いられており先と対照的である。

(3)　硬砂岩類――量的に少なくやや問題があるが、刺突具・掻器類に比較的多く用いられているが、斧的なものにも用いられており、やや選択が自由な印象がある。

(4)　チャート類――明らかに刺突具・穿孔具・掻器類に限定使用されている。

(5)　凝灰岩類 ― もっとも変種に富むが大半は刺突具・穿孔具・掻器類に用いられている。その中で緑色凝灰岩(28)は石斧にほぼ限定される点、フリント質凝灰岩(32)は片刃・両刃にも用いられる点白色細粒凝灰岩(43)が岩版に集中する点などが特徴的である。

(6)　輝緑凝灰岩類は刺突具・穿孔具・掻器類に主体的に利用されるが、石鍬にも用いられる点が目立つ。

(7)　流紋岩類――大略刺突具・穿孔具・掻器類に用いられる。

(8)　安山岩類――石斧等の打割・掘削具、石皿等の粉粋具、円盤状石器にほぼ限定され、もっとも特徴的なあり方を示す。

(9)　黒耀岩――刺突具・穿孔具への集中利用が顕著であり、これも特徴的である。

(10)　ホルンフェルス類――石斧・槌石であり、重量との関係がある。

(11)　紫水晶以下の鉱物類――No.72を除いて、刺突具・穿孔具・掻器類への集中傾向が顕著である。また装身具類への利用も見られる。前者については玉髄・めのう類が主体をなす。

(12)　珪化木――片刃・両刃石器、石鍬類であり、ホルンフェルス他に類似する。

概観すると以上のようになる。これによると、〝器種による石材の選択使用〟の傾向が存在するのは明らかである。その原則を再述的にのべてまとめとする。

(a)　槌石、片刃・両刃石器、石斧、石箆状石器（大型）、石鍬等は粘板岩類、硬砂岩類、緑色凝灰岩、フリント質凝灰岩、珪質細粒凝灰岩、安山岩類、ホルンフェルス類、珪化木等をおもに選択・利用する。

(b)　刺突具・穿孔具・掻器類には、泥岩類、チャート質粘板岩、チャート類、珪質とフリント質凝灰岩、硬質泥岩質凝灰岩、珪質白色細粒凝灰岩、輝緑凝灰岩類、流紋岩、黒耀岩、玉髄、めのう、赤色めのう、鉄（質）石英などを選択・利用する。

(c)　粉粋具には、安山岩類、とりわけ輝石安山岩がもっとも多く利用される。

(d)　石棒・石剣類には粘板岩類が、岩版には、白色細粒凝灰岩が用いられる。

(e)　円盤状石器は輝石安山岩が集中的に選択・利用される。

ということになる。以上は従来認識されてきた事実・傾向にほぼ一致するものであろう。縄文時代晩期における石材選択の一資料とはなしうるであろう。

8　石材産出地について

佐藤二郎氏によると、各素材の推定される産出地は以下のとおりである。

硬質泥岩 珪質泥岩 凝灰質泥岩	新第三紀中新世　奥羽山地　胆沢川上流～平鹿地方
粘板岩 砂質粘板岩 黒色粘板岩 チャート質粘板岩 珪質粘板岩 凝灰質粘板岩 石灰質粘板岩	北上山地古生層 南部北上山地西縁　薄衣～東山町
粘板岩ホルンフェルス 凝灰質粘板岩ホルンフェルス	北上山地西縁
凝灰質砂岩	新第三紀
アルコース砂岩	北上山地
硬砂岩 チャート質硬砂岩 細粒硬砂岩 凝灰質硬砂岩	北上山地
チャート	北上山地　古生層　北部に特に多いが南部にも存在
泥質チャート 凝灰質チャート	北上山地南部

輝緑凝灰岩質チャート ┘

凝灰岩　　新第三紀

砂質凝灰岩　　〃　　衣川付近一帯

泥質凝灰岩　　〃　　〃

石灰質凝灰岩　　南部北上山地

酸性凝灰岩　　〃

緑色凝灰岩 ┐
石質凝灰岩 ｜　新第三紀グリーンタフ層　脊梁山地　磐井川・胆沢川上流
珪質石質凝灰岩 ┘

珪質凝灰岩　　新第三紀

フリント質凝灰岩　　新第三紀中新世　江利地方に多く見られる（稲瀬層中に多い）。

珪質泥質凝灰岩　　新第三紀　磐井川・胆沢川上流

熔結凝灰岩　　厳美層　衣川―平泉―厳美

安山岩質凝灰岩 ┐
硬質泥質凝灰岩 ｜　新第三紀中新世　グリーンタフ層　磐井川・胆沢川上流
珪質角礫凝灰岩 ┘

珪質濃緑色細粒凝灰岩　北上山地　東磐井～江刺地方の古生界

珪質細粒凝灰岩 ┐
珪質白色細粒凝灰岩 ┘　脊梁山地中新世

白色細粒凝灰岩　　新第三紀中新世　磐井川上流　厳美西部

泥質細粒凝灰岩　　脊梁山地新第三紀中新世

輝緑凝灰岩 ┐
チャート質輝緑凝灰岩 ｜　北上山地・古生層　特に東磐井～気仙地区
珪質輝緑凝灰岩 ｜
泥質輝緑凝灰岩 ┘

流紋岩　　脊梁山地　磐井川・胆沢川上流

斜長石流紋岩　　奥羽山地新第三紀中新世中部　胆沢川上流

安山岩　　新第三紀中新世　脊梁山地

輝石安山岩　　新第三紀鮮新世　国見山一帯

複輝石安山岩　　〃　　〃

輝石安山花熔岩（多孔質の）第四紀火山　須川・焼石岳火山群(?)

変朽安山岩　　脊梁山地奥地　西磐井　新湯―胆沢川上流

玲岩	南部北上山地
長石玲岩	〃
黒耀岩 ┐	国見安山岩の活動期（鮮新統）の熔岩の一部か？
松脂岩 ┘	胆沢川北部の丘陵地基盤を構成する本畑層の上部中に礫として含まれている例が多い。
片状ホルンフエルス	北上山地または和賀仙人付近
珪線石ホルンフエルス	東磐井（大東町）
珪　岩	南部北上山地　東磐井
珪化した緑色岩	東稲山～江刺地区
蛇紋岩	東磐井～江刺地区
紫水晶	
石　英	北上山地
玉　髄 ┐	
めのう ┤	北上山地　安山岩などが風化してFe^{++}、Mu^{++}、Mg^{++}
赤色めのう ┤	〃　イオンが溶脱され、残った$SiO_2 \cdot nH_2O$である。
鉄質石英 ┤	川原の礫として採集されたものか(?)
蛋白石 ┘	
磁鉄鉱	赤金鉱山？釜石鉱山？
珪化木	新第三紀中新世　江刺地方

以上のように本遺跡出土石器の素材は北上山地・奥羽山地の両者から産するものからなる。北上川以東・以西の両岸よりの素材選択ということになる。その入手経路・運搬過程・行動範囲などの具体相は不明である現在、それら解明の基礎資料の一つとして以上の事実を提示するにとどめる。既にふれた原石の種類と製品化されたそれに異同があることなどを手掛りとして検討することは今後可能であろう。

以上の原石のうち、黒耀岩について、明らかになっている限りで、その具体的産出地をあげておく。本遺跡に比較的「近く」位置するものとして、水沢市折居（国鉄東北線「陸中折居駅」西方）の堀切段丘中の真城層産のものがある。[注1)] 次に花泉町飯倉地区の滝沢層の露頭・国鉄東北線「清水原」駅付近の五反田地内の段丘礫層中などにも確認されている。[注2)]

北上すると和賀郡湯田町川尻の旧土畑鉱山付近、[注3)] 岩手県雫石町橋場の小赤沢地内の段丘礫層中に検出されている。[注4)] この他にも数個所の産出地が予想されている。

したがってかつて想定されていたよりは、その産出地は多いことになるし今後もさらに増加すると思われる。これらの産出地点の明確な原石と各遺跡出土の製品を分析、比較することに

より、石材の移動状況の復元をも図るべきであろう。

註1）　高橋文夫氏の教示により実査・確認・採集している。

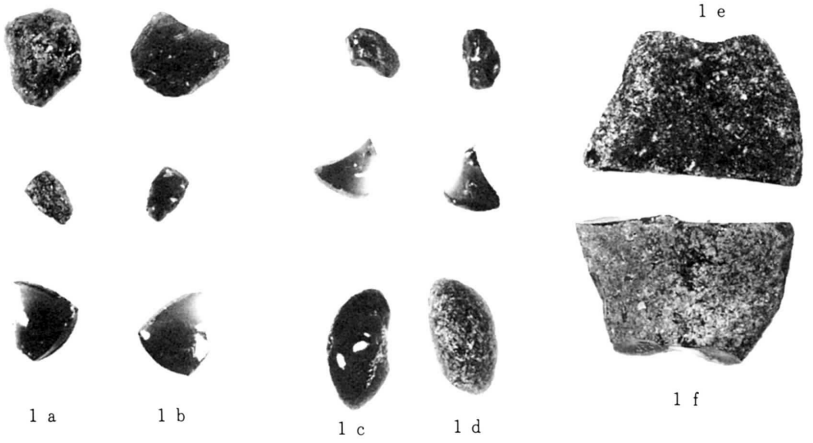
註2）　熊谷常正氏の教示による。また同氏は東北地方の黒耀石出土遺跡の集成を行なっている。

南小梨蛇王遺跡　千厩町文化財調査報告第1集　千厩町教育委員会

註3）　八重樫良宏氏の教示による。

註4）　高橋与右衛門氏の教示による。

さらに佐藤二郎氏の教示によれば、岩手郡雫石町周辺の橋場層（新第三紀中新統最上部）は石英安山岩質凝灰岩と一部熔結凝灰岩などからなるが、その北部においてはその間に黒耀岩・松脂岩等の破片を混在するとのことである。したがって前記の小赤沢地内以外にも産出地が存在する可能性は大である。



1．水沢市折居産出(1.5分の1)

2．雫石町産出（約3分の1）

第148図　黒耀岩原石の例